

## 第Ⅶ章 確認調査の成果・考察・課題

### 第1節 深川・北宮地区の調査について

#### (1) 菊之池B遺跡

菊之池B遺跡では1号石組、2号石組、3号石組、4号石組、5号石組を確認した。R2A区、R2C区は菊池川旧河川の中、R2F区は菊池川旧河原と考えられる。

1号・2号石組にはVI層を基盤とした1期、V層を基盤とした2期がある。1号石組では3期に部分的な修復が行われている。1期～3期の時期は出土土師器から13世紀後半～14世紀前半と考えられる。これらの石組は立地場所、石組形態から菊池川旧河川に伴う船着場と想定した。これらの石組の上面にIII層が堆積すると、遺構は完全に土に埋もれてしまう。その時期は出土遺物から17世紀末頃～18世紀中頃と考えられる。III層から出土した15世紀代と考えられる龍泉窯系青磁瓶の口縁部片は、耳付タイプの可能性があり、青磁の奢侈品である。また、香炉と考えられる青磁片も出土している。

3号石組は四段の階段状構造で、南側に向かって緩やかに低く傾斜する。石組の上から二段目までは水中ポンプを稼働しないと水に浸かる。石組東側を部分的に深掘りを行い、深さ約60cmまでは石組が確認できた。最下部のVI層が石組の基盤層で、1号・2号石組1期と同様である。石組の南端部先は菊池川旧河川に達すると推定でき、3号石組は旧河川護岸と考えられる。出土遺物から、石組は13世紀後半～14世紀前半頃に築造され、14世紀後半頃まで使用されたと考えられる。

4号石組は二段の階段状構造で、南側に向かって緩やかに低く傾斜している。水中ポンプを停めると、上段まで水に浸かる。出土遺物は少なくて、小片が殆どで、図化できたのが青磁片1点である。4号石組の基盤層は3号石組と同じで、3号石組と同様な時期と考えられ、出土青磁片の時期とも矛盾しない。4号石組は3号石組と同じ旧河川護岸と考えられる。

5号石組は1号～4号石組の構造とは異なり、四段の石積みである。石組は深さ約30cmの掘り込みの東側端部に大型の石を三段に組み込み、その石積を背後から押さえるように石を積んでいる。掘り込み内の土層堆積に自然堆積でない凹凸が著しい層がある。この凹凸のある層は掘り込み内に沈殿した土を浚渫した痕跡と考えられる。このことから、5号石組は内部に水が溜まる池状遺構、水路などが想定できる。出土遺物から、5号石組は13世紀後半頃に築造され、14世紀後半まで使用されたと考えられる。

R2A区は土層の状況から菊池川旧河川の中と考えられ、船着場と考えられる1号・2号石組の南側隣接箇所にある。1号・2号石組の南側には菊池川旧河川が流れていたと想定できる。

R2C区は土層の状況からR2A区と同じ菊池川旧河川の中と考えられる。擾乱層から中世の土師器、陶磁器が出土した。

R2F区では大小の角のない石を多量に確認した。調査区の最下部には砂層が存在する。この場所は明治期の字図の「中川原」の範囲内であり、調査区の確認した内容から旧菊池川の河原と考えられる。出土土師器は外底部に回転糸切痕のある小片がある。出土陶磁器は時期幅があり、古いものが12世紀中頃～後半、新しいものが17世紀～19世紀代である。新しい時期の遺物は菊池川が現在の河道となり、「菊池井手」が築造され、旧河道が機能しなくなった時期を示していると考えられる。

#### (2) 北宮館跡（菊之城跡）

北宮館跡（菊之城跡）では掘立柱建物跡1棟、石列跡1基、土坑5基、溝跡2条、ピット群を確認した。これらの中で、一連の遺構として、5トレンチのV層上面で確認した1号掘立柱建物跡、1号石列跡、4号・5号土坑が考えられる。また、2・3トレンチで確認した1号溝跡は、伸びる方向が1号掘立柱建物跡の柱

筋とほぼ一致するので、同時期と想定できる。

1号掘立柱建物跡に伴う4号土坑出土一括遺物が遺構の築造時期を示すと考えられる。土師器小皿4個体、土師器壺9個体の時期は13世紀前半～後半である。1トレンチ～5トレンチの中で、最上位であるV層上面で、遺構を検出したのが5トレンチの1号掘立柱建物跡とその一連の遺構である。このことから現時点で、北宮館跡（菊之城跡）で最も新しい時期の遺構と考えられる。北宮館跡の機能終了時期を判断する資料となる。

北宮館跡（菊之城跡）は多量な土師器が出土し、唐物威信財の輸入陶磁器も存在することから領主館の可能性が高い。残存する地形から、推定南北長約90m、推定東西長約100mの方形区画の館跡が想定できる。この館跡は初期遺構が未確認で時期が不明確であるが、11世紀後半～12世紀前半の輸入陶磁器、12世紀末～13世紀初頭の土師器が出土していることから、1号掘立柱建物跡より古い時期の遺構が存在する可能性が高い。

### （3）県内の類似遺跡の構成要素の比較・検討

近年の研究進化により、中世武士団が所領を支配する際の拠点は屋敷だけではないと認識されるようになった。屋敷以外のものとして、屋敷周囲の河川や道路、水陸交通の結節点にある集散地、水田・畑の灌漑用水施設、一族・祖先の極楽浄土や民の暮らしの安穏を祈る寺社などがある。これらは武士団が所領支配を行なう中で、整備・管理した施設であり、本稿の構成要素として理解されるようになった（国立歴史民俗博物館2022）。ここでは県内の主な中世遺跡の構成要素について概観し、北宮館跡（菊之城跡）とその関連施設について比較・検討を試みる。

#### ① 陣ノ内城跡と関連施設

##### 【城跡】

陣ノ内城跡は熊本県上益城郡甲佐町大字豊内に所在する。城跡は甲佐岳（標高753m）から派生する尾根の先端の平坦地（標高約100m）に築かれている（第102図1）。城跡の平面形は略方形を呈し、北側と東側に堀跡、土塁跡が残っており、確認調査の成果から西側、南側にも堀跡と土塁跡が存在したと考えられている。その規模は東西方向210m以上、南北方向190m以上とされている。南側・西側の堀跡、土塁跡のトレンチ調査結果から、堀跡は幅約5.8m～8.5m、深さ約2.7mで、土塁跡の下端幅は南側が約5m、西側が約10mと想定されている。城跡の南東隅と北西隅に堀跡・土塁跡が途切れた箇所があり、虎口となっている（第102図5、第103図1）（甲佐町教育委員会2020、上高原2022）。

出土遺物は4期に大別してある。1期（12世紀～14世紀）の遺物は、貿易陶磁器が同安窯系・龍泉窯系青磁、華南白磁が主体で、高麗象嵌青磁1点、国産品は東播系須恵器、古瀬戸の陶器である。1期の遺構は確認されてない。2期（16世紀前半～後半）の遺物は景德鎮窯の青花が主である。3期（16世紀末～17世紀前半）の遺物は漳州窯系の陶磁器である。4期（19世紀以降）の遺物は肥前系の陶磁器である（甲佐町教育委員会2020）。

熊本県内の城郭との比較検討の結果、近世初期の「織豊系城郭」であり、本丸を直線的な堀で区画する小西行長の城との共通点があることから、小西行長の築造と考えられている（甲佐町教育委員会2020、上高原2022）。

##### 【甲佐神社と緑川の石組堤防跡・船着場跡】

甲佐神社は中世には「肥後二宮」とされており、「一宮」は阿蘇神社であるので、有力な神社として当時の益城郡全体から信仰を集めた神社であった。甲佐神社を修理造営のために木材を確保する「砥用」「小北」の二つの山を木原氏が寄進した史料がある（『木原顯実寄進状』、1173年）。14世紀になると、甲佐神社の神官たちは阿蘇大明神の「御嫡子」で、「南郡管領の鎮守」なりと主張する。南郡とは益城郡のことをさす中



1 陣ノ内城跡と関連施設位置図（国土地理院地図を一部加工して作成）



2 鶴ノ瀬堰周辺の緑川堤防（西から）（甲佐町教育委員会2012より）



3 船着場跡（南から）（甲佐町教育委員会2012より）



5 陣ノ内城跡平面図（甲佐町教育委員会2020より）



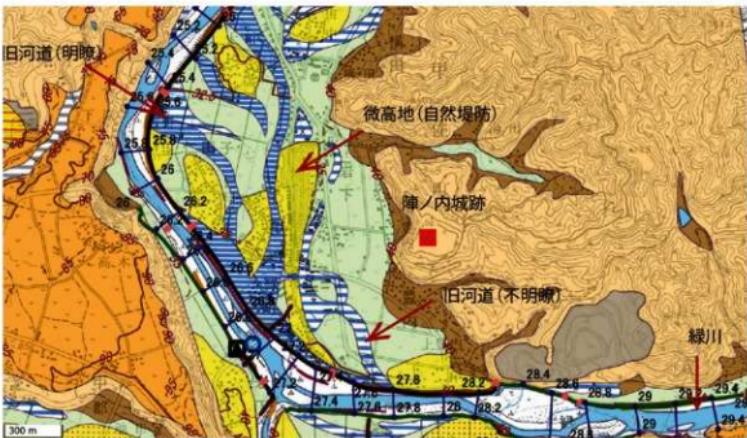
4 船着場跡（西から）（甲佐町教育委員会2012より）

第102図 陣ノ内城跡の関連施設 1

世の言い方で、当時は現在の上益城・下益城の大半地域を統括していたようである。一宮の阿蘇神社から独立的な益城郡の鎮守へと発展していき、中世的な郡の世界の象徴として崇敬されるようになった。この甲佐神社の南側に接して上掲往還が緑川に沿って通っており、河川整備事業に伴って、上掲往還遺跡の発掘調査が実施された。その結果、甲佐神社の鳥居の前（南側）から江戸時代と考えられる石組堤防跡と階段状の船着場跡が確認された（第102図3・4）。このことから、甲佐神社は緑川水運を利用した物資の集散地と位置付けることができる。鎌倉時代の甲佐神社の社領を見ると、現在の甲佐町域に多数存在していたが、離れた



1 陣ノ内城跡全景（東から）（甲佐町教育委員会2020より）



2 緑川の旧河道と陣ノ内城跡（国土地理院地図を一部加工して作成）

第103図 陣ノ内城跡と旧河道

地域にも社領が存在していたのが注目される。それらは八代北郷（現在の宇城市小川）、宇土の勾野（現在の曲野）、益本郷の堅志田（現在の美里町）などである。これらは不知火海から甲佐に入る2ルートの経由地になっている。つまり、海と甲佐神社とを結ぶルートが社領になっており、道筋の要所を恒常に確保していたことになる（種葉2022）。第104図1は甲佐神社を緑川の対岸から見た写真、第104図2は神社境内から南側を見たもので、鳥居の前面に緑川が流れている。これらから、神社は緑川水運を意識した立地であることが分かる。緑川の河床勾配を見ると、上流部が約1/10～1/200、下流部が約1/1,000～1/7,000で、甲佐神社が所在する上揚地区や鵜ノ瀬堰付近から高田堰（熊本県上益城郡嘉島町）付近は中流部になる。中流部の河床勾配は1/300～1/600程度で、段丘の発達した平地を緩やかに蛇行しながら流れている。上流部の急勾配で、流れの早い川が上揚地区・鵜ノ瀬堰付近からは緩やかな流れに変化する。甲佐神社前面の船着場跡の上流域で、刎の発掘調査が行われた。調査範囲は河川改修工事が及ぶ刎の長さ約65m分で、幅約8m、高さ約3m、上部平坦面幅約3mの石積が確認されている。この刎の存在で、緩やかになった水の流れが岸に寄ってくる箇所に船着場が築造されている。船を着岸し、荷物の積み下ろしを行うに最適な刎と船着場の位置関係となっている（甲佐町教育委員会2012）。甲佐神社の境内に「緑川通漕碑」がある。この碑文は通漕計画に携わった渡辺寛太が後世に残すために文化11年（1813）に記したものである。それは緑川は鵜ノ瀬堰より上流は通船できず、矢部、砥用（上流域の集落）の者は牛馬に頼っていたとの内容である（熊本県教育委員会1989）。甲佐神社鳥居前の道は海と山をつなぐ往還の役割をもち、神社周辺の緑川には水運に必要な施設が存在している。陸運と水運の結節点に甲佐神社は立地している。

#### 【鵜ノ瀬堰】

鵜ノ瀬堰は緑川左岸の甲佐町寒野の尾北の渡しから、右岸の農内へ下流方向に斜めに約700mの長さで、川を遮断するように築造された堰である。この堰は加藤清正の緑川河川工事の中で、代表的なものである（花岡2013）。河川改修工事に伴い緑川左岸の鵜ノ瀬堰取り付け部を15m×160mの範囲で発掘調査が実施された。調査の結果、川床のほぼ全面に石敷きした石積を検出した（第102図1・2）。石材は凝灰岩の割石（約0.4m～1m）が主であり、安山岩、石灰岩が混じる。検出された石の角は殆どが摩耗し丸くなっていた。石は鋭角の部分を上流に向けて水を切るように配置されていた。石敷きの上流部では石に穴を穿ち、2列の穴が直線的に並んでいた。石積は約90mを確認し、上流から下流に向けて約20m付近までは石積の高さが緩やかに低くなり、残りはほぼ水平になっている。高さは上流部で約2.5m、下流部で約1.2mを測る。石積の方法は場所によって違いがある。上流部では直径約15cm～30cmの丸石を面積みが基本となっている。上流から約12m～40m付近は約20cm～30cmの凝灰岩割石が乱雑に積まれている。上流から約40m～67m付近では約30cm～70cmの割石が一部布積み状になっており、その上部に約20cm～30cmの礫が積み上げられている。これらの状況は部分的な修復を行なながら現在に至ったと考えられている（甲佐町教育委員会2012）。第105図1は現在の堰の現況写真で、緑川を南東から北西方向に向かって、上流側に突出した円錐状に堰を設置している。第105図2は堰の北西端部（右岸側）にある井手への分水施設の現況写真である。

#### 【甲佐井手・新井手】

鵜ノ瀬堰の分水施設から取水している井手が甲佐井手、新井手である。甲佐井手は大井手とも言われており、鵜ノ瀬堰分水施設から約260m下流にある箇所から取水している（第102図1、第105図3）。この井手の工事完成は慶長13年（1608）とされている。また、新井手は上井手と呼ばれており甲佐井手の支流の一つで、甲佐井手の取水口より約100m上流から取水している（第105図6・7）。この井手は文政7年（1824）に完成したとされている（熊本県教育委員会1989）。甲佐井手、新井手は現在も甲佐の中心部を流れている。

#### 【都市的な景観】

第103図2は国土地理院の治水地形分類図をベースにして加工したものである。水色の縞模様は緑川の旧



1 甲佐神社遠景（西から）



2 甲佐神社から黒川を見る  
(北から)



3 陣ノ内城跡と麓集落（西から）（甲佐町教育委員会2020より）

第104図 陣ノ内城跡の関連施設 2

河道、黄色は微高地（自然堤防）を示している。甲佐神社周辺の綠川は乱流域であるが、陣ノ内城跡の南側から西側の平坦地周辺まで下ると、かって乱流域が存在していたことが旧河道や微高地の分布状態から判断できる。陣ノ内城跡直下の「上農内・下農内」（第102図1、第104図3）は安定した堆積土壌区域で、乱流域の微高地が現在の市街地である「岩下」（第102図1、第105図4・5）の地域である。ここで参考になるのが「一遍聖絵・福岡の市」（別途記述）で、乱流域の島に商品を船で運び、商品の売買を行っている状況が描かれている。陣ノ内城下の「上農内・下農内・岩下」地域は「福岡の市」のような都市的景観が形成される条件が整った所であると考えられる。さらに、1610年に製作された「慶長の肥後国絵図」に付箋が貼られ、国内の宿泊場所と考えられる場所が山鹿、高瀬、内牧、高森、大津、どいの内（農内）小川、宇土、八代、日奈久、田浦、佐敷、水俣である。その中に、「どいの内（農内）」が入っており、陣ノ内城下町としての農内地域の状況が浮かんでくる（稲葉2022）。

## ② 相良頼景館跡と関連施設

相良頼景館跡は熊本県球磨郡多良木町大字黒肥地字蓮花寺に所在し、球磨川上流域右岸に隣接している。館跡の南側の球磨川は水勢は緩やかで、水深が比較的浅くなり、安定した流れである（第106図1）（熊本県教育委員会1977、永井2016）。ここでは、館跡、石積堤防跡、蓮花寺跡について見てみる。

### 【館跡】

館跡は南側の河川側に土塁がなく、平面形が「コ」の字形の土塁に囲まれた方形居館跡である。東西方向は土塁跡内側で約54mを測り、南北方向は北側土塁内側から約60mが館跡の範囲と考えられる。現存する土塁跡は幅約9m、高さ約2mで、調査当時の北側土塁跡はほぼ原形を留めており、東側・西側土塁跡は一部を消失した状態であった。北側土塁跡には門と考えられる遺構は確認できず、南側の球磨川に面した箇所に入口を想定している。土塁跡の外側には壕跡が南側を除く三方に巡っている。壕跡の大きさは上部幅約63m、底部幅約2m、深さ約2mである。壕跡は覆土の状況から、溝水状態が長期間継続したと考えられる（第106図1、第107図、第108図3）。館跡はⅠ期～Ⅲ期に区分されている。Ⅰ期には土塁築造以前の柱穴群がある。Ⅱ期では土塁跡・壕跡の築造と切落しによる館跡の造成を行っている。Ⅲ期ではⅣ層を基盤とした石積堤防を築造し、東外塙南側の拡張や広場の造成を実施している。Ⅰ期～Ⅲ期の時期は出土土器器から、13世紀中頃～14世紀前葉と考えられている（熊本県教育委員会1977、永井2016）。

### 【石積堤防跡】

石積堤防跡は館跡の南側に位置する現球磨川と並行した状態で、ほぼ東西方向の帯状に築造されている。石積堤防跡は館跡の東外塙跡の南側から切落し・広場の南側を経由して西外塙跡の南側まで長さ約165mが確認されている。館跡の切落し上面と石積堤防跡との距離は、東外塙跡で約12m、館跡の中央部で約23m、西外塙跡で約40mを測る（第107図）。石積堤防跡はⅣ層（黄灰色砂層）を基盤として石を積んでいる。石積最下部の石は球磨川の流れの方向に長軸を描いた横置きにし、その上面に3～5段の円礫（径約20cm～30cm）を載せ、高さ約1mになっている。目地には繩・粘質土を充填させている。石積の東端から館跡中央部までは比較的丁寧な積み方をしている。第108図1・2の写真は石積堤防跡の球磨川に面した外側の石積の状況である。石積は川に向かって緩やかに低く傾斜している（熊本県教育委員会1977、永井2016）。石積傾斜状況は菊之池B遺跡のR2B区・R2D区で確認した3・4号石組と類似している。

### 【蓮花寺跡】

蓮花寺跡は熊本県球磨郡多良木町大字黒肥地字蓮花寺に所在する。蓮花寺跡は相良頼景館跡の南西方向に直線距離で約80m離れた隣接箇所にある（第106図1・第107図・第108図4）。平坦面の北側寄りに平面形が長方形の石積基壇があり、東西約12.1m、南北約7.8mの規模である。使用されている石材は球磨川の河原石である。石積基壇は3時期に区分されている。1期は基壇のほぼ中央部に平面形が方形（約4m×約4m）



1 鶴ノ瀬堰 (南東から)



2 鶴ノ瀬堰分水 (西から)



3 甲佐井手取水口 (東から)



4 岩下を流れる甲佐井手 (北から)



5 岩下を流れる甲佐井手 (北から)



6 甲佐井手と新井手の分水 (東から)

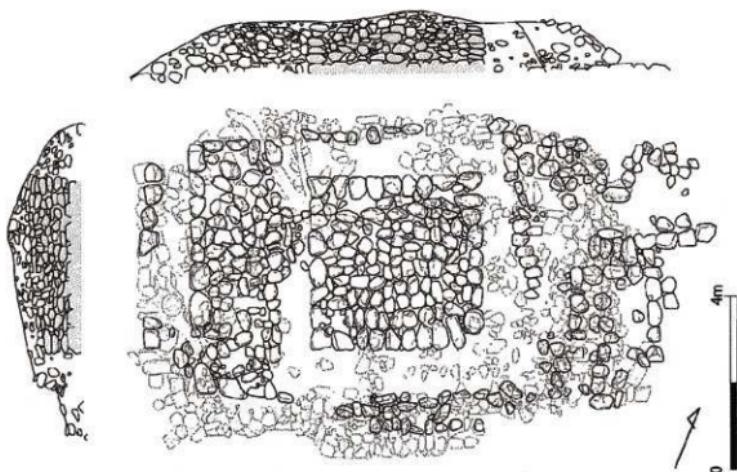


7 新井手の取水口 (南から)

第105図 陣ノ内城跡の関連施設 3

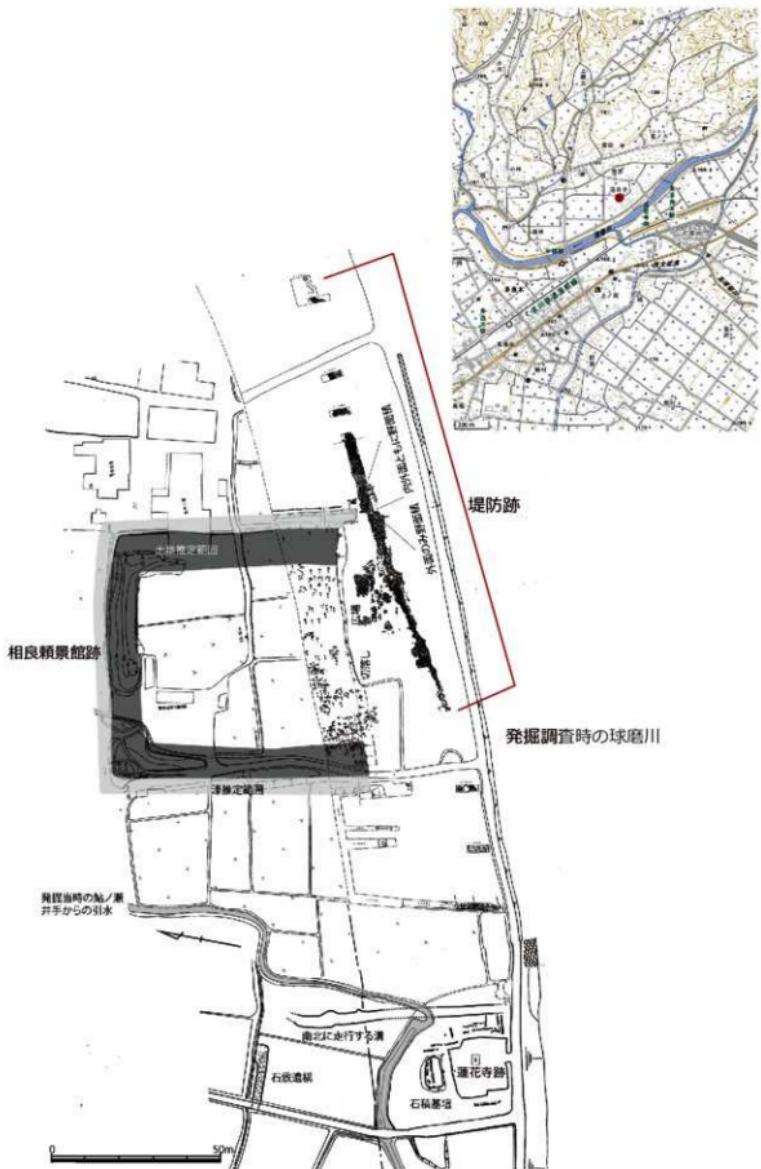


1 相良頼景跡と関連施設位置図（国土地理院地図を一部加工して作成）



2 蓮花寺跡石積基壇実測図（永井2016を一部加工して作成）

#### 第106図 相良頼景館跡の関連施設



第107図 相良頼景館跡と蓮花寺跡(永井2016、国土地理院地図を一部加工して作成)



1 堤防跡（西から）



2 堤防跡（東から）

1・2 相良頼景館跡堤防跡（熊本県教育委員会1977を一部加工して作成）



3 相良頼景館跡（南から）



4 蓮花寺跡（東から）



5 鮎之瀬堰（北から）

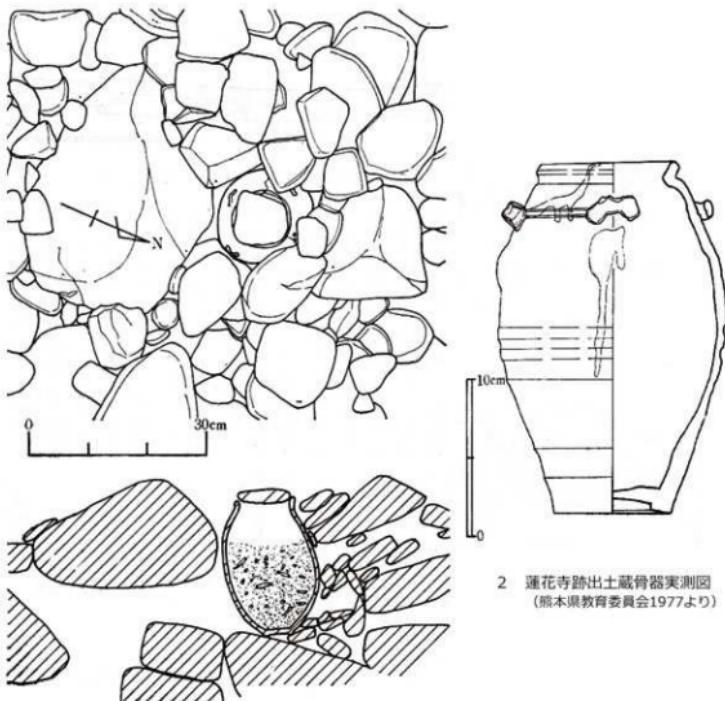


6 鮎之瀬井手取水口（東から）



7 鮎之瀬井手（東から）

第108図 相良頼景館跡・蓮花寺跡・鮎之瀬堰・鮎之瀬井手



1 石積基壇内蔵骨器出土状況実測図（熊本県教育委員会1977を一部加工して作成）

2 蓮花寺跡出土蔵骨器実測図  
(熊本県教育委員会1977より)

#### 第109図 蓮花寺跡石積基壇

で、高さ約1~1.3mの基壇を造っている。基壇の基礎部四辺は直線的に直角に接するように石材を選定している（第106図2）。1期の基壇内のはば中央部から蔵骨器が出土し、内部には火葬骨が容器の2/3程度入っていた（第109図1）。蔵骨器は四耳壺の転用で、蓋は扁平な河原石を利用している。四耳壺は口径約9.7cm、器高約22.2cmで、口縁部は「く」の字形に屈曲し、胴部外面上位に波状沈線が施され、横形の四耳を貼り付け、高台付底部である（第109図2）。四耳壺は大宰府編年耳壺VI類で、13世紀代のものである（山本2000）。1期の石組基壇は火葬骨を埋葬した石組墓である。2期の基壇は1期のものを東に約1.3m、西に約2.8m、北に約1.8m、南に約1.6mの幅で拡張している。2期の基壇平面形は長方形を呈し、東西約8.2m、南北約6.8mである。西側拡張端部は1期と同様に直線的な基礎石配置となっている（第106図2）。永井氏は積石下の砂層から出土した外底部に回転糸切痕をもつ土師器の壺・小皿はこの2期に伴うものと考えており、13世紀末~14世紀前葉の築造と想定している。3期の基壇は2期の基壇をさらに、東に約2.8m、西に約1.2mの幅で拡張したものである（第106図2）。境内では板碑24基、五輪塔102基、笠塔婆1基が確認された。これらは西側1群、北側石積基壇上1群、東側2群の大きく三箇所に分かれて分布していた。これらは調査区の北側に移転復元されている。最も古いものは建武元年（1334）の銘が刻まれており、14世紀前半に造塔行為が開始されたと考えられている。応仁3年（1469）~天文3年（1534）は塔の空白期間で、最も新しいのは文禄

3年（1594）の銘がある（熊本県教育委員会1977、永井2016）。

#### 【鮎之瀬堰・鮎之瀬井手】

館跡の北東方向に直線距離で約600mの箇所の球磨川に鮎之瀬堰があり、堰の右岸側に井手の取水口が設置されている（第108図5～7）。第106図1の鮎之瀬井手は主要な用水路・排水路を図示した。鮎之瀬井手は館跡と蓮花寺跡の北側隣接地点を流れ、さらに西側の王宮神社の南側を経て、蓮花寺跡の南西方向に直線距離で約1kmの地点で球磨川と合流している（熊本県教育委員会1977、永井2016）。

鮎之瀬井手の取水口に砂岩製の碑が建っている。碑は高さ約1m、上部幅約54cm、下部幅約61cm、厚さ約14cmである。「球磨郡開墾年記」より鮎之瀬井手の掘削は貞享2年（1685）とされている（多良木町史編纂委員会1980）。この碑は永仁3年（1295）に相良頼宗が建立したとの旨である。碑は後世のものであるが、伝承があったと考えられ、土墨外側の堀跡底部で確認した粘質の水性堆積層の存在が理解しやすい。この井手は現在も農業の用水路・排水路として機能している。

相良氏の所領は多良木村100丁、人吉庄600丁で、惣領である上相良氏の所領は多良木村であり、人吉庄にも惣領権を及ぼしていた。人吉は肥後国中（肥後中央平野部）との交通要地であり、人吉・下相良氏にとって球磨川水運とでの日向国府への道は重要な交通路であった。この道は多良木を経由することになり、そのことは下相良氏が惣領である上相良氏に従属していたことによる。人吉の年貢米は盆地内の球磨川を運上し、多良木から九州脊梁山脈を越える陸路（猪鹿倉越・横谷越）に変更し、日向国府をめざす。その後、一つ瀬川水運で河口を経て、海路で京都、鎌倉に到着する。このように、盆地の東端に位置し、郡内交通上最優位にあることが、九州に下向した相良氏の中で惣領家である上相良氏が多良木に定着した要因である。その惣領家の居館が球磨川に面した箇所にあり、球磨川に石積堤防の護岸を整備し、船着場風の施設を整造していることは注目できる（服部1978b）。球磨川の鮎之瀬堰周辺は船運可能な最上流地点であり、陸上交通の要所でもある。

#### ③ 北宮館跡（菊之城跡）と関連施設

菊池氏遺跡の中で、中世前期は深川・北宮地域に拠点を置くが、その中心的な施設が北宮館跡（菊之城跡）である。その後、中世後期になると、拠点を隈原地域に移し、肥後守護として活躍したと考えられる。ここでは北宮館跡（菊之城跡）とその関連施設について見てみる。

#### 【北宮館跡（菊之城跡）、菊池川旧河道沿いの遺構、北宮阿蘇神社】

北宮館跡（菊之城跡）や菊池川旧河道沿いの遺構については、第IV章第1節で述べているので、概略を述べる。北宮阿蘇神社については説明を補足する。

北宮館跡（菊之城跡）は方形区画内から多量の土師器や奢侈品である輸入陶磁器が出土していることから、菊池氏の拠点施設と考えた。その館跡の南西方向に直線距離で約600m離れた旧河道沿いの範囲に、石組の船着場跡・護岸施設跡・水が溜まる施設跡と考えられる遺構を確認した。北宮阿蘇神社は菊池川に面した場所に位置しており、神社の南側隣接地点には川が流れている（第110図1）。第110図2は神社の対岸からの写真で、現鳥居の前には昇降用の階段が川岸から取り付けられている。第110図3は神社側から川を見たもので、現鳥居の前面には菊池川の流れを肉眼で観察することができる。神社の佐藤信清宮司からのご教示によると、旧鳥居は現鳥居より川寄りの箇所で、昇降用階段の南側にあった。その旧鳥居の脇にあった手水鉢が発見され、現鳥居の北側に置いてあるとのことである。手水鉢は平面形が略楕円形（長径約103cm、短径約68cm）を呈し、高さ約40cmの自然石である。その上面に平面形が略三角形の凹面（約59cm×約51cm×約33cm、深さ約5cm）があり、水が溜まっている（第110図4）。

#### 【上市場・下市場】



1 北宮館跡と関連施設位置図（国土地理院地図を一部加工して作成）



2 菊池川対岸からの阿蘇北宮神社遠景（南から）



3 阿蘇北宮神社から菊池川を見る（北から）



4 阿蘇北宮神社の旧手水鉢（西から）



5 参考資料 益田氏の関連施設（国立歴史民俗博物館2022より）

第110図 北宮館跡の関連施設



A (南から)



B (西から)



C (東から)

第111図 菊池井手と菊池川旧河道比較図

明治期の絵図を見ると、北宮館跡（菊之城跡）と北宮阿蘇神社に挟まれた菊池川に沿った箇所に「上市場（かみいちば）・下市場（しもいちば）」の小字名を確認できる（第110図1、第146図）（菊池市教育委員会2020）。この状況に類似したものに島根県の中世・益田氏の城下町がある。益田川の右岸に益田氏の屋敷跡と考えられる「三宅御土居跡」が位置し、屋敷跡は土塁と堀に囲まれた東西二町×南北一町の規模をもつ。この屋敷の南側対岸の川に沿って場所に「上市（かみいち）・中市（なかいち）・下市（しもいち）」の地名が残っている。これらは水運を利用した商業地と考えられている（第110図5）（国立歴史民俗博物館2022）。このことから、北宮館跡（菊之城跡）の東側隣接地である「上市場・下市場」も川に面した物資の集散地、商業地であった可能性がある。

#### 【菊池堰・菊池井手】

菊池堰は北宮館跡の東側に直線距離で約270m離れた菊池川にある。この堰から取水しているのが菊池井手で、取水口は川の右岸（西側）にある（第110図1、第111図C）。第112図左は「菊池川全図」（菊池市指定文化財）の中から菊池堰周辺を抽出したものである。「菊池川全図」は安政2年（1855）、菊池川絵図方御用懸・井上英太右衛門が描いた菊池川水源から玉名市滑石の河口までの全流域の測量図である（菊池市2017）。図中のBに菊池堰や菊池井手取水口が表現されている。図中Aには北宮阿蘇神社が描かれている。第112図右は抽出した絵図に該当する部分の現在の国土地理院地図である。「菊池川全図」と国土地理院地図を比較すると、絵図が作成された頃の菊池川の流路は現在の菊池川の流路と殆ど変わらない。絵図完成の1855年以前には菊池川から取水する菊池堰・菊池井手が築造されていたことになる。

菊池川の江戸時代築造の水利施設の中で、最上流域にあるのが古川井手で、文化13年（1816）に築造されている。古川井手の築造にあたっては、下流に既存の原井手、菊池井手が存在しており、水利施設利用の制約などの課題があった。古川井手築造後には、上流の新施設と下流の既存施設との間に水利権を巡る紛争が頻繁に起こっていた。この解決策として、菊池川本流からの取水ではなく、豊後国日田郡の兵藤山、保慶山の山水を古川井手に注ぐ兵戸井手を天保4年（1833）に完成させた。原井手は元禄14年（1701）の築造との記録があるが、菊池井手には築造の記録がない。しかし、水争いの記録から、古川井手が完成した1816年以前には菊池井手が築造されていたことになる（本田1970）。

第111図1には治水地形分類図の菊池川旧河道を示した。第111図2は現在の菊池井手の主要な流路図である。菊池井手の取水口から南西方向に流れる流路は、中世前期の北宮・深川地区に築造された河川施設が位置する菊池川旧河道と殆ど同じである。その箇所から西側の菊池井手は丘陵の先端南側付近から大きく流れが二つに分かれ、再度合流し、北西方向にはほぼ直線的に流れ、第111図A付近で南側に流路が大きく屈曲し、第111図B地点で現在の菊池川と合流する。これらの菊池井手流路の分岐、合流、屈曲の状況は、菊池川旧河道流路とはほぼ同一である。このことから、菊池井手は菊池川旧河道を利用して1816年以前に築造したと考えられる。このことは菊池川旧河川の河原と考えられるR2F区出土遺物の時期と矛盾しない。

#### 【陸上交通】

北宮館跡（菊之城跡）から西側に直線距離で約1.7km離れた菊池市西寺に菊池郡衙推定地がある。この郡衙推定地を経由する古代官道（車路）が考えられている。この官道の想定ルートは郡衙推定地から南東方向に進み、菊池川を渡り、花房台地に至る。その後、泗水を通り、国府方面へ伸びる車路本路と阿蘇二重峠方面へ伸びる車路豊肥支路に分かれる（菊池市教育委員会2012）。

『菊池郡絵図』（慶長12年（1607）～寛永3年（1626））を見ると、隈府を起点とする道が放射状に伸びている。これらには菊池往還（熊本～隈府）、日田往還（熊本～隈府～日田）などの20路線が挙げられている（菊池市1986）。菊池氏遺跡は中世前期の深川・北宮地域に拠点を置いた時期と中世後期に隈府地域に拠点を移す2時期があると考えられている。隈府地域に拠点が移動した時期には、陸上交通の集約地が隈府に存在



菊池川全図（菊池市2017を一部加工して作成）

A : 北宮阿蘇神社  
B : 菊地井手取水口



現在の菊池川  
(国土地理院地図を一部加工して作成)

第112図 菊池川全図（江戸時代）と現在の菊池川

したと想定できる。

#### ④ まとめ

①陣ノ内城跡、②相良頼景館跡、③北宮館跡（菊之城跡）の各関連施設の中には、築造時間が不明確で、同時性を立証できないものも含まれている。そこで、拠点城館が立地する隣接地域・空間に関連施設が存在するか否かの観点でまとめる。

A：護岸・船着場と考えられる河川整備施設が存在する遺跡 ①・②・③

①の河川整備施設は江戸時代の築造であるが、中世にも存在した可能性がある。

B：神社・寺などの宗教施設が存在する遺跡 ①・②・③

すべて中世のものである。

C：堰・井手などの利水施設が存在する遺跡 ①・②・③

すべて江戸時代の築造物が現存しているが、中世にも存在した可能性がある。

D：市場などの商業施設が存在する遺跡 ①

①の施設は江戸時代のものであるが、中世にも存在した可能性がある。③では遺構等は確認できないが、「市場」の字名から中世に存在した可能性がある。②の施設については現状では不明である。

E：陸上交通と水上交通の結節点が存在する遺跡 ①・②・③

①・②には地形的な要因から船が週上できる限界地があり、そこから先は陸上交通が担う。江戸時代の交通結節点が中世にも存在した可能性が高い。③は拠点が北宮・深川地区から隈原地区に移動した後であれば、江戸時代の陸上交通の要所が中世にも存在した可能性がある。

相良頼景館跡の商業施設の存在（D）が不明な点を除けば、三遺跡にはA～C・Eの共通した構成要素が存在している。ここで、小野正敏氏のパネルディスカッションでの重要な指摘を引用する。小野氏は①陣ノ内城跡、②相良頼景館跡の共通する要素に焦点をあて、次のように述べている。鎌倉時代に権力が最初に抑えるところは、広く地域の開発・生産の原動力である用水の堰口である。こうした場所の近くには川港があり、船が週上する。川港は山間からの急な川の流れが緩やかになる場所で、それより上流には船が上がっていかないので、そういう変換点の場所を抑える（小野2022）。

陣ノ内城跡、相良頼景館跡は各地域の中世の本拠地の施設である。これらと共に要素をもつことは、北宮館跡（菊之城跡）が菊池川水運を重視した菊池氏本拠の館跡である可能性を補強するものである。

#### （4）県外の川港の類似施設等について

菊之池B遺跡の石組遺構とほぼ同時期の県外の川港類似施設・類似遺構について見てみる。

##### ①川西遺跡（徳島県教育委員会2017）

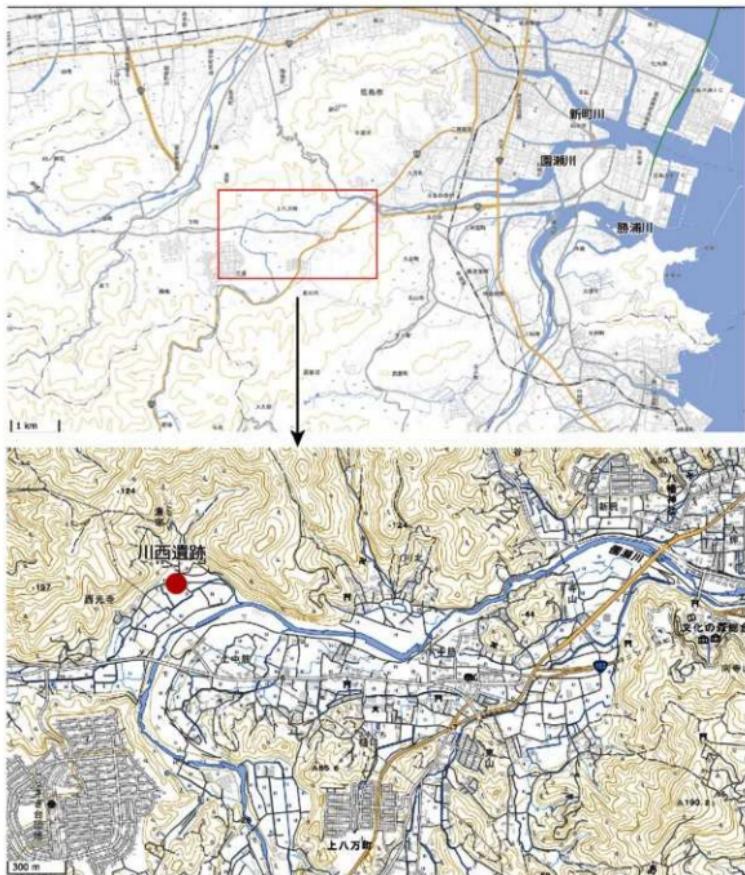
川西遺跡は徳島県徳島市上八万川西173番地1他に所在する。遺跡は徳島県を西から東に流れる吉野川水系の南岸地域に属しており、園瀬川の左岸に位置する。その位置は園瀬川河口から約8km上流域の沖積平野である（第113図）。

この遺跡の護岸施設について述べる。園瀬川旧河道の川岸に沿った状態で石列が確認されている。この石列を集石遺構（石積み護岸施設）として報告してある。結晶片岩の集石遺構は東西方向約45m、南北方向約10mで、最大高さ約1.5mが確認されており、石を積んだ全体の平面形はT字形を呈している（第114図・第115図）。

出土土器の年代を検討し、大きく4時期の遺構変遷を示している。

##### 【第1段階】（12世紀後葉～13世紀前葉）

自然堆積の砂礫層と地山層との間に埋めるように川岸斜面を結晶片岩小角礫（15×10×5cm前後）で敷



第113図 川西遺跡位置図（国土地理院地図を一部加工して作成）

き積みして護岸を築造している。確認した範囲は東西方向約45m、南北方向5~10mである。川岸斜面の最大勾配は約30°で、高さ約15mの斜面には小角礫を積んでいる。

#### 【第2段階】（13世紀代）

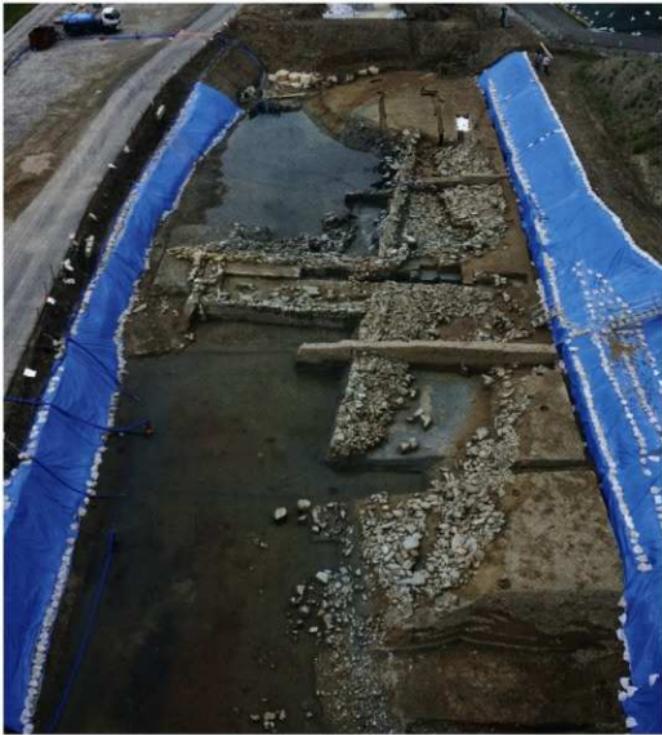
第1段階の小角礫の上に、結晶片岩中角礫（30×20×10cm前後）を積み、改修・補強を行っている。また、石積み護岸の中央部北端から南に約5mの箇所の川岸緩斜面は、東側に約15mの範囲に小角礫を積み、平面形が鋭角三角形状を呈している。

#### 【第3段階】（13世紀後葉~14世紀前葉）

第2段階の鋭角三角形状の平面形を呈する箇所と第1段階の石積み護岸とを覆いかぶせるように円礫（直徑約5~10cm）を含む盛土を石積護岸の東側で行っている。盛土を行うために、石積み基底面に、結晶片



第114図 川西遺跡Ⅱ区東側遺構配置図(集石遺構) (徳島県教育委員会2017を一部加工して作成)



II区集石遺構（東から）



II区集石遺構（南から）

第115図 川西遺跡 II区集石遺構写真（徳島県教育委員会2017を一部加工して作成）

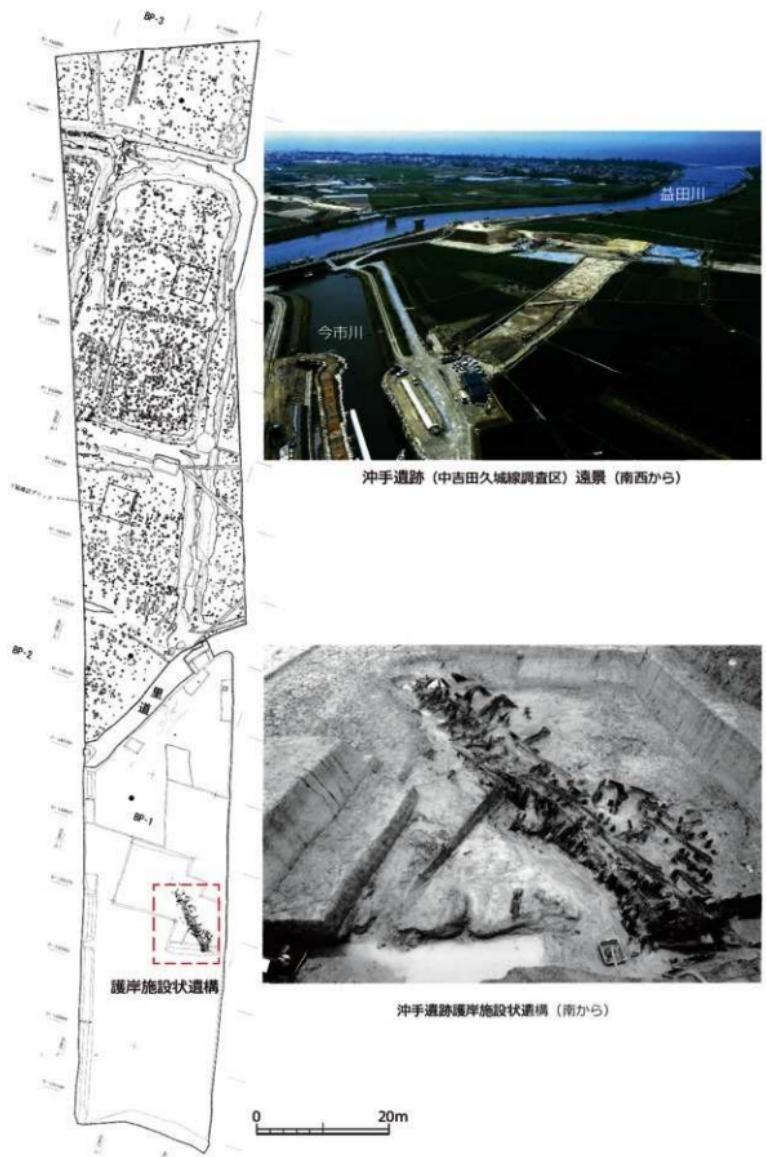
岩大角礫（約30×20×10cm以上）を築地状に石を組み合わせて築造している。

【第4段階】（14世紀中葉～15世紀前半）

第2段階から中州砂礫堆積と粘土堆積が進んでおり、その対策として築地状石積み護岸中央部に、東西幅約5.5m、南北長約15m規模の突堤状の突き出しを築造しており、この遺構を集石（突堤）としている。集石（突堤）の東西端に結晶片岩中角礫の小口を前面になるように積み上げており、その中に土砂、礫を充填し、版築構造ではないが、固くしまっている箇所がある。この箇所を東から見た立面図では、結晶片岩中角礫を2～4段ほど垂直に積み重ねている。この集石（突堤）の西側で、石積護岸の南側の部分に杭・添え木・横木



第116図 遺跡分布図(益田市教育委員会2013を一部加工して作成)



第117図 沖手遺跡（中吉田久城線調査区）遺構配置図、全景・遺構写真（益田市教育委員会2010を一部加工して作成）

を組み合わせて構築されたと考えられる構が2箇所で確認されている。集石と護岸を保護する目的と考えられている。

以上のような変遷から、石積み護岸施設と集石（突堤）は一時期に築造されたのではなく、12世紀後葉～15世紀前半の間に増築、改修を行い維持してきた。多種・多量な出土遺物から、中世の河川交通を利用する地域の重要な施設で、調査地点の周辺に船着場、荷揚場などの施設が存在すると想定されている。

### ② 沖手遺跡（益田市教育委員会2010）

沖手遺跡は島根県益田市久城町に所在する。遺跡は益田川河口から約1km遡った右岸の低地である水田地帯に立地する。遺跡の南側に隣接する今市川は昭和10年代の河川改修以前の益田川の旧河道である。中吉田久城線の調査区では、里道の南側は遺構が殆ど確認されていないが、護岸施設状遺構が確認されている。この遺構は長さ約13mの範囲で、砂に近い状態の土層に自然木、杭状に加工した木を打ち込んで横木を固定したものである。横木は部分的に3列～4列が確認されている。理化学分析で、構築年代は飛鳥～奈良時代と推定されている。里道より北側の調査区では、ほぼ全面に中世の掘立柱建物跡、井戸跡、墓跡、道路状遺構などが検出されている（第116図3、第117図）。

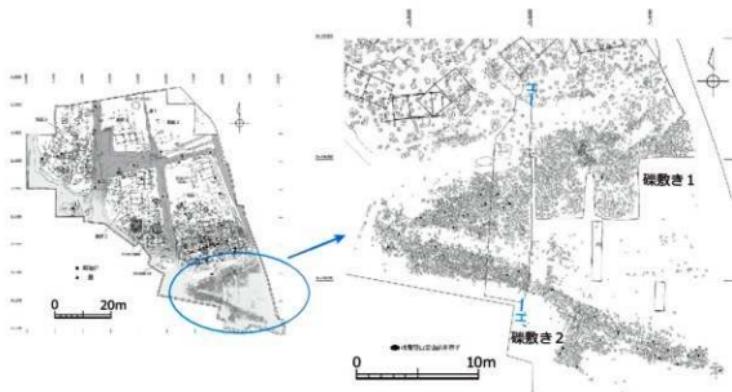
遺跡内には道路によって計画的に区画された複数の屋敷地がある。その中に、大型の掘立柱建物跡があり、川港の公的な施設や有力者の館と考えられる。また、町屋と推定できる短冊状の建物跡が並んでおり、棹秤の分銅の出土から、商人の存在が想定できる。出土した中国産陶磁器で年代が分かれるのが2377点である。内訳はI期（11世紀後半～12世紀中頃）が929点、II期（12世紀後半～13世紀前半）が897点、III期（13世紀後半～14世紀前半）が156点、IV期（14世紀後半～15世紀中頃）が211点、V期（15世紀後半～16世紀前半）が156点、VI期（16世紀中頃～末期）が52点である。I期とII期の出土量が多いのが特徴であり、屋敷の区画はこの頃に成立したと考えられる。当時の船着場跡は確認されてないが、11世紀後半～12世紀前半頃に、立地と出土遺物の内容から港施設をもった集落として成立したと考えられる。III期で遺物出土量が急激に減り、その後は消滅することなく集落として存続したようである。中心的な港湾施設としての役割は中須西原・東原遺跡に移ったと考えられる（国立歴史民俗博物館2020・2022）。

### ③ 中須西原遺跡（益田市教育委員会2013）

中須西原遺跡は島根県益田市中須町に所在し、中須東原遺跡の西側に隣接している。遺跡は益田川河口から約700m遡った左岸に位置している（第116図2）。調査区の南東隅で、礫敷遺構を2基を確認し、北側を礫敷き1、南側を礫敷き2としている（第118図）。

礫敷き1は南西から北東方向に伸びる帯状の平面形を呈しており、長さ約25m、幅約10m以上である。石材は大型の礫岩、砂岩の角礫が多く使われている。礫が集中して高く盛り上がる箇所が存在する。西寄りの部分に高津川の青野山安山岩が使用されているが、少量である。礫敷き1には船を繋ぎとめると考えられる杭が確認されている。礫敷き2は礫敷き1の西側端部に重なるように築造されており、北西から南東方向に伸びる帯状の平面形を呈している。遺構の大きさは長さ約30m、幅約1～3mである。遺構のほぼ中央部が幅1mと狭くなっており、東寄りの箇所で南側に約2.5m張り出し、平面形が方形になった部分がある。C14のAMS年代測定結果から、礫敷き1は15世紀前半、礫敷き2は15世紀後半以降に築造されたと考えられている。礫敷き1の築造後に礫敷きの伸びる方向を変えて、礫敷き2を築造している。これは河道の変化に起因すると想定されている。礫敷き1・2は部分的な構造物で、護岸とは考えにくく、船着場・荷揚げ場の遺構と考えられている。（第118図・第119図）。礫敷きの写真を見ると、斜めの壁面と壁面から伸びる底面に礫敷きが確認できる。

礫敷遺構の北側に冲手遺跡と同様に、道路で区画された屋敷地があり、多くの掘立柱建物跡、倉庫と考えられる方形堅穴建物跡が確認されている。遺跡出土遺物の中で、年代の分かれる中国産陶磁器は1538点であ



砾敷き検出状況（西から）



砾敷き検出状況（東から）

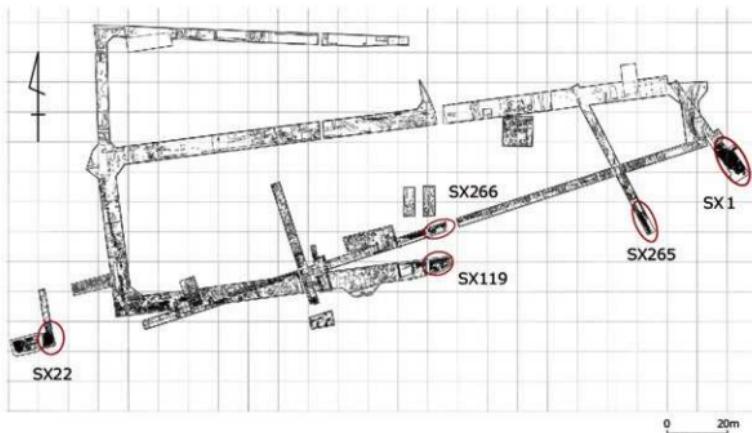
第118図 中須西原遺跡砾敷き遺構（益田市教育委員会2013を一部加工して作成）



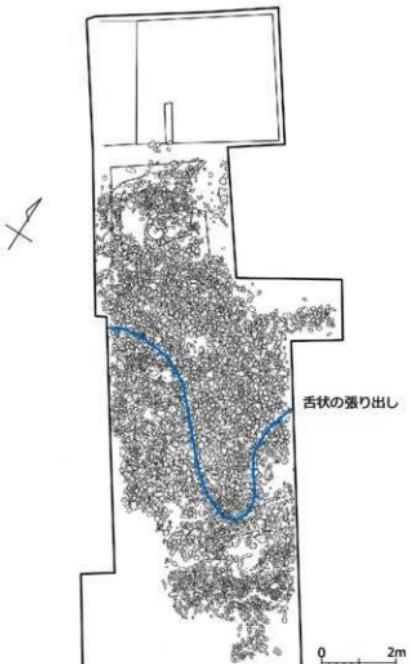
第119図 中須西原遺跡礎敷き遺構断面図（益田市教育委員会2013を一部加工して作成）



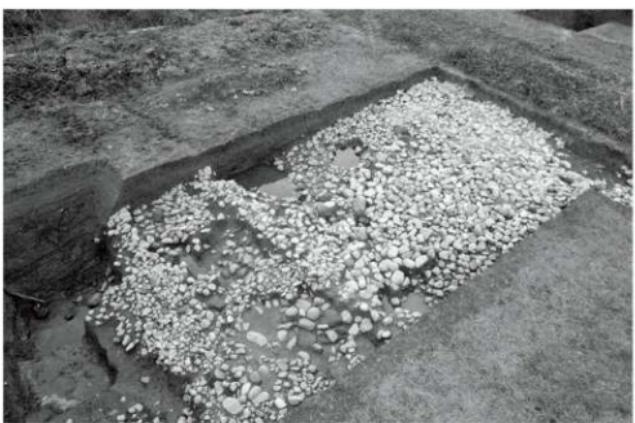
中須東原遺跡遠景（東から）



第120図 中須東原遺跡遠景写真・遺構配置図（益田市教育委員会2013を一部加工して作成）



SX 1 平面図



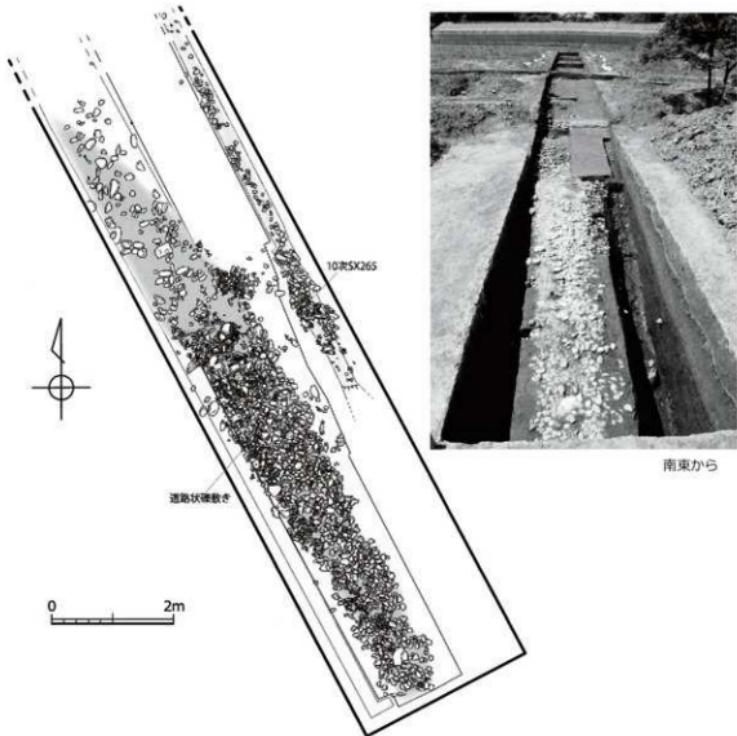
(東から)

第121図 中須東原遺跡SX 1（益田市教育委員会2013を一部加工して作成）

る。その内訳は、I期が34点、II期100点、III期が89点、IV期736点、V期が493点、VI期が86点である（時期区分は沖手遺跡と同じ）。中須西原遺跡は沖手遺跡が隆盛だったI期・II期は低調で、中世後期のIV期に遺物がピークに達している。この時期は船着場・荷揚場と考えられる疊敷き1・2が築造された時期と重なる。V期には遺物量が半減し、VI期には衰退していたと考えられる（国立歴史民俗博物館2020・2022）。

④ 中須東原遺跡（益田市教育委員会2013）

中須東原遺跡は、中須西原遺跡の東側に隣接しており、両者は一連の遺跡である。中須東原遺跡は沖手遺跡の北西方向で、益田川の対岸に位置している（第116図1）。この遺跡では、疊敷き遺構、掘立柱建物跡、鍛冶関連遺構、墓などが確認されており、集落跡と考えられる。この遺跡の特徴は、船着場・荷揚場と考えられる疊敷き遺構である。疊敷き遺構は調査区の中で、大きく3箇所に分かれて分布している。それらは東端部地区（SX 1・SX 265）、南北中央



第122図 中須東原遺跡SX265（益田市教育委員会2013を一部加工して作成）

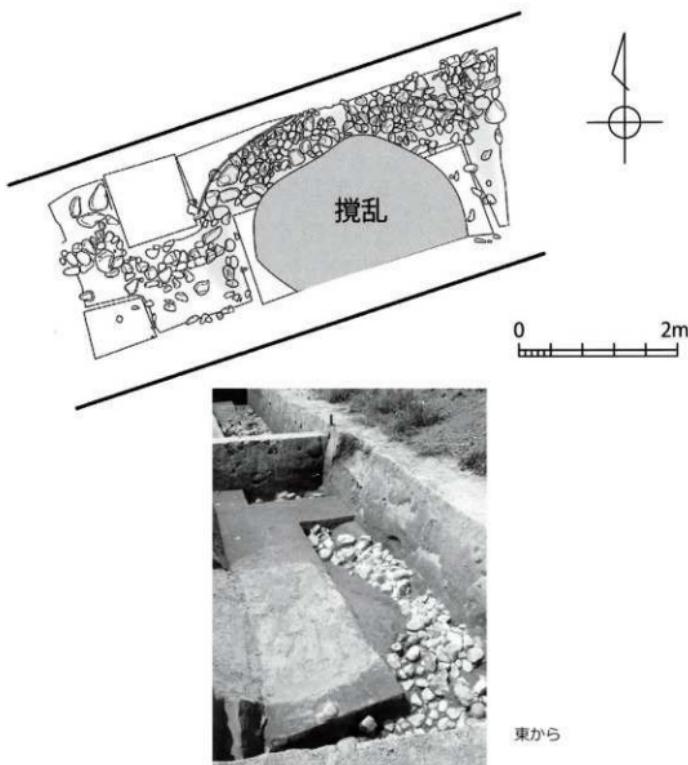
道路付近の中央部地区（S X266・S X119）、西侧端部地区（S X22）である（第120図）。各遺構を個別に見てみる。

#### 【S X1】（第121図）

S X1は礫が北西方向から南東方向にかけて分布しており、確認最大長約14m、確認最大幅約5mである。礫の大きさは直径約3~40cmの角礫・円礫であるが、直径15cm前後の円礫が多数である。遺構は北から南に向かって緩やかに低く傾斜している。中央部は幅約10mで南側に向けて舌状に張り出し、約10°の傾斜角で南に向かって低くなる。標高は北端部で約0.3m、南端部で約-0.8mである。写真を見ると、崖みの斜面・底面に礫敷きが確認できる。礫と礫の間から備前焼擂鉢（IV B期・15世紀後半以降）が出土している。

#### 【S X265】（第122図）

遺構の平面形は北西から南東方向に伸びる細長い帯状を呈している。確認した範囲での最大長約6m、最大幅約50cmである。使用されている礫は直径約6~10cmの円礫が主であるが、遺構北端部から南に約5.3mの地点から南側の部分は直径約2~3cmの円礫、玉砂利の割合が増加する。遺構の北端部からこの使用礫変化箇所までは、傾斜角約10°で緩やかに南側に向けて低く傾斜するが、使用礫変化箇所から南側に向けて



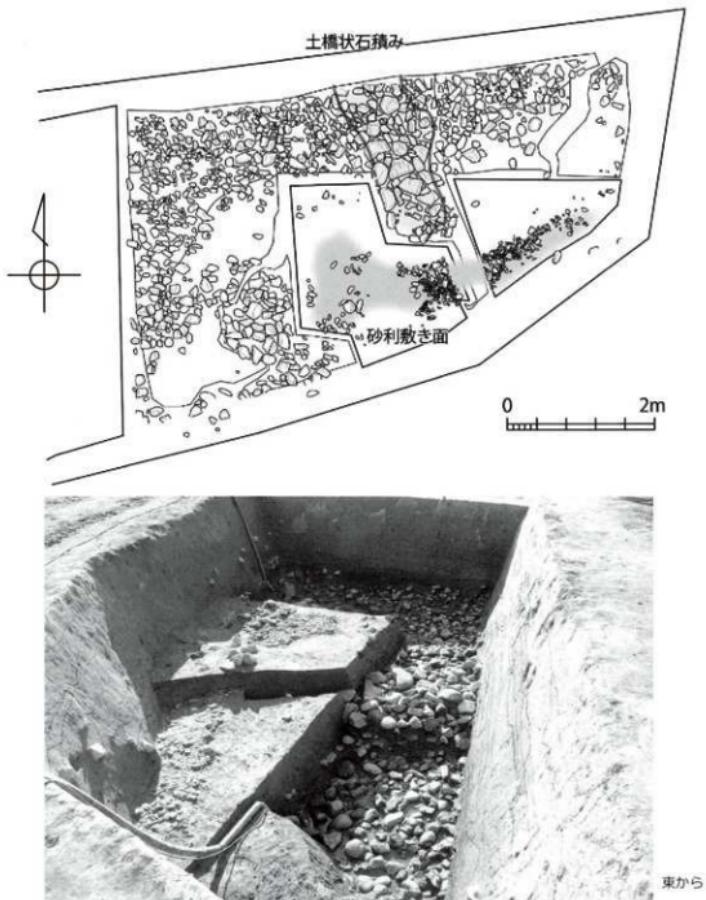
第123図 中須東原遺跡SX266（益田市教育委員会2013を一部加工して作成）

の箇所では傾斜角約30°の急な落ち込みになっている。遺構北端部の標高は約0.2~0.35mである。SX1とSX266との間は確認調査を実施していないが、ピンポールを1mピッチで差し込んで、礫の広がりを確認した。その結果、両遺構の間には礫が連続して存在していると考えられる。この遺構の出土遺物はないが、SX1と同一の礫敷き遺構と判断できるので、15世紀後半頃と想定されている。

#### 【SX266】（第123図）

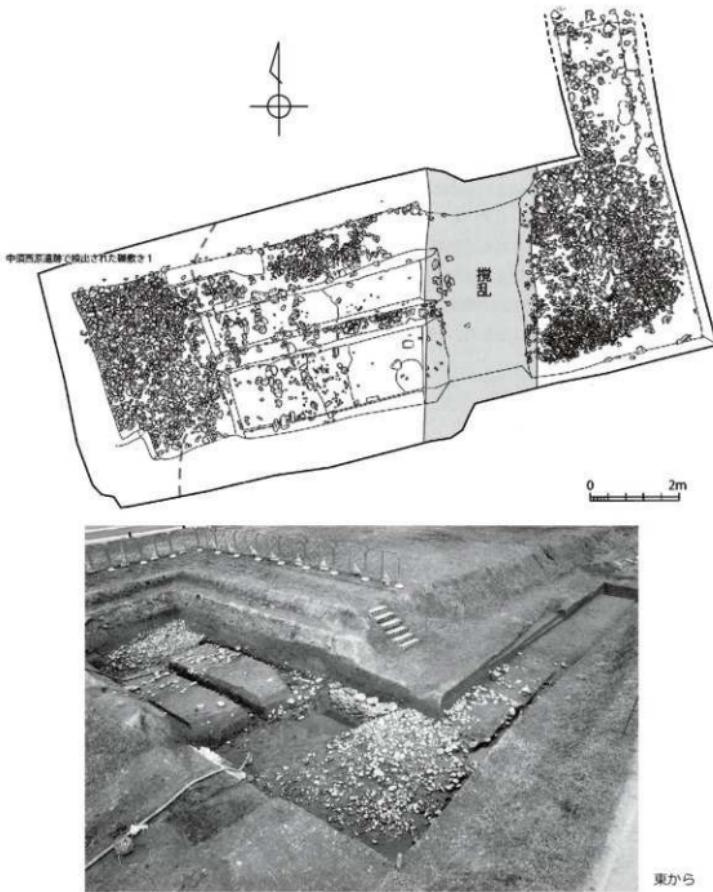
調査区の中央部が搅乱されているので、遺構の全体形は不明である。確認できた礫敷きは東西方向に帯状に分布している。礫敷きの北側は平面形が半円状を呈している。西端部付近の礫はこの遺構と一連のものでない。東隣の別調査区で礫敷きが確認されてないことから、東西の幅が最大でも約8mの比較的小型の礫敷きである。使用している礫は直徑約8~30cmの円礫、角礫で、円礫が大半である。礫敷きの北端から南側に約1.5mの幅で、北から南に向かって緩やかに低く傾斜する。北端の標高は約0.7mである。遺構に伴う遺物はないが、周辺や遺構直上層の出土遺物から、15世紀中頃以降の築造と考えられている。

#### 【SX119】（第124図）



第124図 中須東原遺跡SX119（益田市教育委員会2013を一部加工して作成）

確認した遺構は東西方向に細長く伸びる礫敷きで、長さは約16mである。この礫敷きのほぼ中央部に南北方向に築造された土橋状石積みが存在する。この土橋状石積みを境にして、東側と西側とで石の構成内容に違いがある。東側は直径約10~20cmの円礫が多用され、西側は直径約5~15cmの角礫の占める割合が高い。西側の礫分布密度が東側と比べて疎である。礫敷きの標高は北端部で約0m、南端部で約-0.2m、土橋状石積みの上面で約0.2mである。遺構全体は北から南に向かって傾斜角は約6~10°で緩やかに低くなる。土橋状石積みは確認できた範囲内で、平面形が略長方形（約22m×約0.75m）で、断面形が台形に近い形を呈している。積み上げられた石は約20~30cmの比較的大型の円礫・角礫を使っており、それらの中に五輪塔の火輪の転用材が含まれる。五輪塔は室町時代のものと考えられ、遺構検出面がSX266の下層であると判



第125図 中須東原遺跡SX22（益田市教育委員会2013を一部加工して作成）

断できることから、遺構の時期は15世紀中頃以前と想定されている。

#### 【SX22】（第125図）

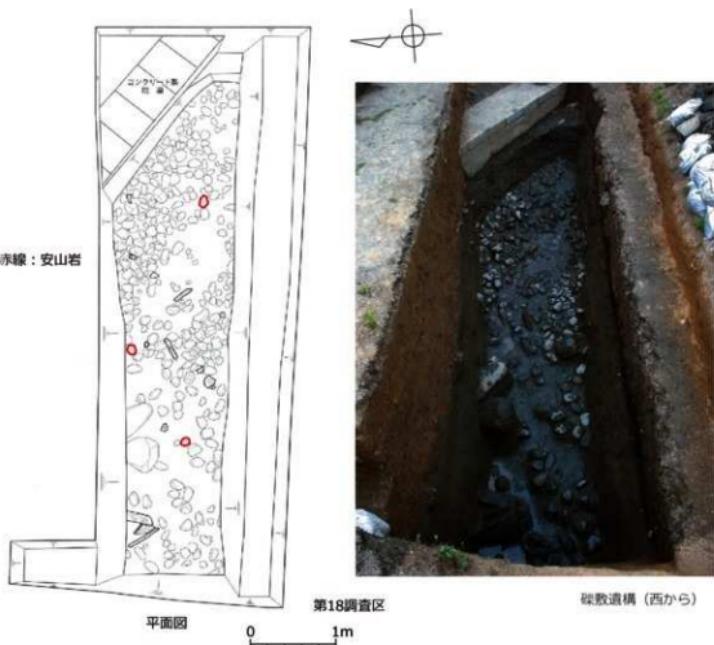
確認した襷敷きは調査区内で東西方向の最大長は約10~11m、南北方向の最大幅は約4mである。この襷敷きの西端部は中須西原遺跡の襷敷き1に続いていく。使用された石は直径約5~30cmの円礫や角礫であるが、直径約10cmの円礫が大半である。遺構全体は北から南に向かって緩やかに低く傾斜している。遺構覆土から備前焼IV-A期の擂鉢、龍泉窯系青磁碗D類が出土している。また、中須西原遺跡襷敷き1の時期を参考にしながら、15世紀後半以前と考えられている。

#### 【襷敷き遺構】

5基の礫敷き遺構についてまとめる。これらの遺構は汀線沿いの緩斜面に拳大から人頭大の礫を敷き詰めている。礫敷き遺構は水運を利用した物資の荷揚げをした船着場と考えられる。これらの遺構は分布状況から東端部、中央部、西端部の3群に分けることができ、各々の群の間隔は約100mある。各群の間を繋ぐ礫敷き遺構は、現段階の調査範囲内では確認されていないので、各群は独立した港湾施設と考えられている。想定した遺構の時期は、東端部が15世紀後半、中央部が15世紀中頃、西端部が15世紀後半以前であり、築造時期に違いが認められる。しかし、東端部と西端部の礫敷き遺構は同一時期に機能した可能性がある。東端部の2基の礫敷き遺構（SX1・SX265）は同じ遺構と考えられ、東西長約40mの中須東原遺跡最大規模の遺構である。この遺構の近くで鍛冶関連遺構が確認されていることから、船の補修を行う施設の可能性がある。

#### 【遺跡全体について】

中須東原遺跡では調査面積が狭いため、集落の全体像が明確ではないが、掘立柱建物跡も確認されており、中須西原遺跡のように道路で区画された集落の存在が推定されている。中須東原遺跡出土の年代の分かる中國産陶磁器は3568点で、内訳はⅠ期が89点、Ⅱ期が533点、Ⅲ期が520点、Ⅳ期が587点、Ⅴ期が1133点、Ⅵ期が706点である（時期区分は沖手遺跡と同じ）。中須東原遺跡は沖手遺跡が繁栄しているⅡ期にはかなりの遺物が出土しており、中世前半代から機能していたと考えられる。沖手遺跡で出土量が減少するⅢ期でも殆ど減ることなく、中須西原遺跡が最盛期を迎えるⅣ期でも出土量に大きな変化はない。中須東原遺跡は出土



第126図 中世今市遺跡礫敷遺構（益田市教育委員会2015を一部加工して作成）

量が最も多いのがV期であり、この時期が最盛期と考えられる（国立歴史民俗博物館2020・2022）。

#### ⑤ 中世今市遺跡（益田市教育委員会2000・2015）

中世今市遺跡は島根県益田市乙吉町にあり、益田川の支流である今市川の右岸に位置する。中世今市遺跡は中須西原遺跡、中須東原遺跡、沖手遺跡より上流に位置し、沖手遺跡の南西方向に直線距離で約800m離れた箇所にある（第116図4）。遺跡が所在する今市地区は短冊状の地割が残り、今市川沿いに築造された約100mの護岸状石垣は益田市指定史跡「中世今市船着場」になっている。発掘調査で確認した主な遺構について見てみる。

第3調査区は今市川右岸の指定石垣部分南側の小路を挟んだ隣接地点に設定してある。この調査区からは約5~15cmの石を敷いた礫敷き遺構を確認している。遺構の平面形は長方形で、約25×12mの範囲に礫が分布している。この礫敷きの東側隣接箇所で、木杭が列状に並んで検出されている。第4調査区は第3調査区の西側で、今市川の対岸・左岸の水田に設定してある。この調査区では木杭列が確認されている。第9調査区は第3調査区の北側で、小路の対面隣接箇所で、指定石垣下の畑に設定してある。この調査区では礫敷き遺構と木杭2本を確認した。これらの遺構は石垣に極めて近い場所であるので、護岸施設の可能性があるとされている。第10調査区は第9調査区の北東方向に直線距離で約40m離れた、市道沿いに設定してある。この調査区では町割に沿った状態の礫石、石列が確認されている。これらの遺構の時期については、第5・第10調査区出土遺物を検討した結果、16世紀前半を最盛期とし、17世紀初頭以降の遺物が少なくなる傾向を確認している。この時期は遺構の使用最終年代を示すものとして捉えられている。

第3調査区の北側に接する状態で第18調査区が設定されている。この調査区では最大長約56m、最大幅約1.3mの平面形が略長方形の範囲内で、礫敷き遺構が確認されている。使用されている石は第3調査区で確認した礫と同様に約5~15cmの円礫が多用されている。遺構面の標高は調査区東側で約1m、調査区西側で約0.3mで、東側から西側（今市川側）に緩やかに低く傾斜している。標高約0.7m付近の遺構面に、等高線に沿う状態で直径約5cmの木杭が打設されている。この木杭は船を繋ぎとめると考えられている（第126図）。この礫敷き遺構に伴って出土した遺物を検討した結果、遺構が機能した最終段階及び埋設時期は17世紀第3四半期頃と判断している。遺構に伴う築造時期を示す遺物が確認できていないが、調査区から僅かながら出土している中国製磁器の存在や既往の調査成果から、中世末から近世初頭にかけて存続した遺構と考えられている。

#### ⑥ 中世益田港について（国立歴史民俗博物館2022）

島根県益田市の益田川沿いには川港である沖手遺跡、中須西原・中須東原遺跡、中世今市遺跡が存在している。また、益田川の西側隣接地域を流れている高津川河口域には「津渡等」が13世紀前半には存在したことが文献史料から明らかになっている。これらの川港遺跡は盛衰時期に違いがあるが、複数の港が同時に稼働し、一体となって中世益田港として機能していたと考えられている。

益田港で交易による遺物が登場するのは沖手遺跡の11世紀後半からで、12世紀代には方形街区に倉庫をもつ計画的な港町が成立していたようである。その後、中須西原・中須東原遺跡では12世紀後半には港として機能し始める。中世今市遺跡は16世紀前半に築造された新しい港である。また、15世紀に大規模な施設整備を行い、最盛期を迎える中須西原・中須東原遺跡の繁栄時期は、三宅御土居跡に拠点をもった益田氏の勢力が拡大する時期と重なる。港湾設備を整備し、港の維持・拡大に益田氏が積極的に関わったと考えられている。

#### ⑦ 朝酌矢田Ⅱ遺跡（島根県教育委員会2020・2021）

朝酌矢田Ⅱ遺跡は島根県松江市朝酌町矢田に所在する。遺跡は島根県北部を流れる斐伊川流域に位置する。斐伊川下流は出雲平野を東に貫流し、宍道湖、大橋川、中海、境水道を経て日本海に注ぐ（第127図遺跡位置図1）。遺跡は松江市街地を貫流する大橋川の河川幅が最も狭まる箇所の北岸（左岸）立地する（第127図



遺跡位置図1 (国土地理院地図を一部加工して作成)



遺跡位置図2



遺跡遠景（東から）



石敷き遺構（北東から）

第127図 朝の矢田II遺跡 (島根県教育委員会2020を一部加工して作成)

遺跡位置図2）。D区の発掘調査では古代の礫敷き遺構が確認されている。礫は拳大ほどの大きさで、礫間から出土した須恵器片から7世紀中葉～後半の築造と考えられている。大橋川沿いに設定したC区では、調査区一面に護岸状の礫敷き遺構が確認されている。礫敷きは川に向かって緩やかに低く傾斜している。この遺構は礫間から出土した須恵器片から7世紀後半～8世紀代に造られたと考えられている。遺構の北側部と南側部では石の状況が異なっている。北側部（陸地側）の礫は拳大ほどの小さめの石が隙間なく敷かれてい

る。南側部（水中側）では北側部の礫より大きめの人頭大以上の礫を使用しており、礫の密集度が粗い。また、北側部と南側部の石の色が異なっており、色の違いは当時の大橋川の汀線を示すものと考えられている。部分的な土層断面で、川と並行する木杭列も確認されており、長さ約1.3mの木杭を打ち込んでいることが明らかにされている。この礫敷き造構の下面には7世紀後半の須恵器片を伴う礫層が存在することも確認されている。礫敷き造構の機能は船着場や荷揚げ場が考えられている。『出雲國風土記』に記載のある「朝酌渡」と関連する造構の可能性が高いとされている（第127図）。

#### ⑧ まとめ

これまで見た遺跡は川の近くに立地しており、川船を利用する交通の利便性に富んだ場所を選定している点が共通している。以下、各遺跡の造構と菊之池B遺跡の造構を比較・検討する。

#### 川西遺跡

この遺跡の集石造構は石積み護岸施設と考えられている。第1段階の川岸斜面の最大勾配は約30°である。この施設に使用されている石材は小角礫（約15×10×5cm）、中角礫（約30×20×10cm）、大角礫（約30×20×10cm以上）、円礫（直径約5～10cm）である。第1段階の護岸の小角礫の上に、第2段階で中角礫を積み改修・補強を行っている。

菊之池B遺跡3号石組は約20°の川岸勾配があり、川西遺跡の石積み構造と類似している。また、使用されている石材の大きさもほぼ同様なものである。川西遺跡と同様な構造である菊之池B遺跡3号石組は、同様な用途として、護岸施設の可能性が高いと考える。

また、菊之池B遺跡1・2号石組は1期の石組の上面に2期の石組を積んでいる。この状況は川西遺跡の改修・補強と同様である。さらに3期の石組は版築状に土を重ねた上に石を直線的な並びで配置している。このことは川西遺跡の第4段階の集石（突堤）と類似した工法である。川西遺跡では護岸施設の維持目的で改修工事などを行っている。菊之池B遺跡の1号～3号石組も川西遺跡と同様な工法で築造しており、川港開発施設と考えられる。

#### 沖手遺跡

沖手遺跡では船着場跡は確認されていないが、護岸状施設の背後には計画的に区画された屋敷地が存在する。その屋敷地には川港の公的施設跡、有力者の館跡や町家と考えられる短冊状建物跡が確認されている。これらは11世紀後半～12世紀後半頃に成立したと考えられている。北宮館跡（菊之城跡）の周辺に沖手遺跡のような施設の存在が想定できる。今後の調査の課題の一つである。

#### 中須西原遺跡

中須西原遺跡の礫敷1・2は船着場・荷揚げ場と考えられている。礫敷1には礫が集中して高く盛り上がる箇所があり、礫積みは斜面だけなく、斜面に接続する底面にも及んでいる。この状況は菊之池B遺跡の1・2号石組の擂鉢状に窪んだ斜面と石組底面の石配置状況に類似している。また、礫敷1では船繋ぎと考えられる杭が確認されている。このことから菊之池B遺跡の2号石組西側隅で検出したピットは船繋ぎ杭穴の可能性がある。

礫敷2は礫敷1築造後に帯状に伸びる方向を変えて築造している。これは河道変化に対応した結果と想定されている。そうであれば、礫敷2の前面は河道に接していることになる。帯状に伸びる東寄りの箇所に、平面形が方形の張り出しがある。この張り出しの東西端部は船が着岸するのに都合の良い場所と考えられる。菊之池B遺跡1号石組の全体形は不明であるが、U字の平面形を呈する石組と推定できる。礫敷2の方形張り出し部の両端の形状はU字形を呈しており、1号石組の推定全体形状と類似している。菊之池B遺跡の1・2号石組が船着場との想定を補強するものと考える。

#### 中須東原遺跡

この遺跡の礫敷き造構（S X）は船着場・荷揚場と考えられている。S X 1は直径15cm前後の円礫を使用している。その造構のはば中央部に平面形が舌状に張り出し、その両端は平面形がU字形を呈する窪みがある。窪みの壁面は緩やかに傾斜し、窪みの底面にも礫が敷かれている。S X265は直径約6～10cmの円礫で殆どが築造されている。礫敷は南側に向けて緩やかに低く傾斜している。S X 1とS X265の間は未調査であるが、ピンボールで礫の広がりが確認されており、両者は同一の造構と考えられている。S X266は北側端部の平面形が半円状を呈している。礫敷は南側に向けて緩やかに低く傾斜しており、使用されている礫は直径約8～30cm円礫が大半である。S X119のはば中央部に帯状の土橋状石積みがある。この造構の東側は直径約10～20cmの円礫、西側は直径約5～15cmの角礫が多用されている。土橋状石積みの西側端部には直線的に伸びる石積みが確認できる。S X22は中須西原遺跡礫敷き1と同じ造構と考えられている。S X22は直径約10cmの円礫が主に使用されており、南側に向かって緩やかに低く傾斜している。

S X 1の平面形がU字形の窪みやS X266の半円形の平面形は菊之池B遺跡の1号石組の推定平面形に類似している。さらに、S X 1のU字形の窪みの壁面や底面の石積みの形状は菊之池B遺跡の1・2号石組の壁面・底面と類似している。S X119の直線的な土橋状石積みは菊之池B遺跡の1号石組の3期の修復時の石組と類似している。また、5基の礫敷き造構に使用されている礫の大きさも菊之池B遺跡の1・2号石組を構築している石の大きさと同様な傾向である。菊之池B遺跡の1・2号石組と中須東原遺跡の礫敷き造構は、造構の構造や使用石材の多くに類似点があり、同様な目的で築造されたと考えられる。

#### 中世今市遺跡

第3・9・18調査区で、礫敷き造構が確認されている。第3・18調査区の礫は約5～15cmの円礫が多用されている。第18調査区では東側から西側の今市川に向かって低く緩やかに傾斜している。また、標高約0.7mの等高線に沿った状態で木杭が打ち込まれており、船を繋ぎとめるものと考えられている。中世今市遺跡の礫敷き造構と菊之池B遺跡の1・2号石組で使用されている石の大きさには共通点がある。さらに、中世今市川に向かって低く緩やかに傾斜する構造は菊之池B遺跡の1号石組が菊池川旧河道に向かって傾斜する状況に類似している。また、菊之池B遺跡の2号石組近くのビットは中世今市遺跡の木杭と同様な船繋ぎの可能性がある。

#### 朝駒矢田Ⅱ遺跡

この遺跡のC区では古代の礫敷き造構が確認されている。礫敷き造構は川に向かって緩やかに低く傾斜している。使用されている礫は拳大ほどの大きさである。この状況は菊之池B遺跡の1号石組の構造と共通している。

以上の比較・検討の結果、県外の川港類似施設と菊之池B遺跡の旧河川沿いの造構は、その構造や使用石材の大きさ等で共通するものが多くあることが判明した。このことは、菊之池B遺跡の造構が川港関連施設である可能性を示唆するものである。

### 第2節 福井地区の調査について

守山城跡は文献史料に記載があるが、確認調査が未実施で、考古学的な成果が殆どない状態である。城跡の主郭推定地の北側に土壘状の高まりが残っており、測量調査を実施した。土壘状の高まりは約10mの比高差があり、この高まりと主郭推定地の間に凹部が存在する（第128図①）。

隈府城下遺跡の南西隅付近の確認調査で、直角に交わると考えられる溝跡2条を確認した。この場所に方形区画の居住地が存在する可能性がある（第128図②）。出土した土器類は小片で、詳細な時期は不明であるが、外底部に回転糸切痕があり、中世のものである。また、同遺跡の北東部周辺で確認調査を実施した。確



第128図 隅府地区の中核部施設想定図 (国土地理院地図を一部加工して作成)

認できた遺構は溝跡、井戸跡、ピット等で、溝跡内部に建物跡が存在する可能性がある。さらに、遺跡周辺の現地踏査結果、段差地形の存在、古写真に写っている旧地形、聞き取り内容を合わせて考えると、遺跡内に一辺約200mの方形区画の存在が浮かび上がってくる（第128図③・④）。

上記の一辺約200mの方形区画の南側に接した箇所に「院馬場（いんのばば）」の字名が残っている（第128図⑤）。服部氏は九州・西日本の犬の馬場地名と方形地割を研究し、まとめている。それによれば、犬馬場地名について、近江では「インパンバ」、九州では「インノパパ」である。表記は犬の馬場以外に、弓の馬場、院の馬場、犬王馬場、陰の馬場などがある。また、地籍図から四十間以上の方形地割も確認できている。犬の馬場の立地は、館・城の周辺である都市の中核部におかれたものと河原などの広大な土地に設置されたものがあり、その数は前者が圧倒的に多い。菊池市隅府院馬場は、地名と方形地割が残っている事例の一つである。さらに、永和元年（1375）の水島陣以降の菊池氏は島津氏と友好関係に転じており、南北朝の末、島津師久が近親者に送った書状がある。その内容は、「菊池方から犬追物の誘いが必ず来るので、犬追物は父の時代には少しやったことがあるが、我々は合戦ばかりで、稽古の余裕がない。やり方も分からないので、お断りすると、返事をしておけ。」というものである（服部2012）。

上記史料の記述から菊池市「院馬場」では実際に犬追物が行われていた可能性が高い。「院馬場」が存在したとすれば、この場所の北側に隣接する隅府城下遺跡に都市中核部の施設が存在した可能性が高まる。この遺跡内に推定した一辺約200mの方形区画は、都市中核部施設と考えられ、大友氏館跡、大内氏館跡と同

規模の守護館跡である可能性がある（第128図②・③・④）。

隈府土井ノ外遺跡は、上記の一辺約200mの方形区画の北西部に隣接した場所に位置する。この遺跡の発掘調査で二重に巡る塙跡と居住地が確認されている。4号・5号・99号塙跡から一辺約90～100mの外塙跡の全体像が推定できる。この外塙が伸びる方向は、隣接する一辺約200mの方形区画の伸びる方向と一致しており、現在の町割区画の道路と直交・平行している。また、外塙跡の内側に直角方向に交わる内塙跡が確認されている（第128図⑥）。

中山氏は隈府土井ノ外遺跡出土陶器の再評価を行い、14世紀後半～15世紀前半の遺跡存続期間を16世紀後半と修正し、遺跡のピークは15世紀中葉～後半とした（中山2022）。また、中山氏は遺跡の性格について、列島の戦国大名の城館と遜色ないレベルの奢侈品を所有しており、約100m四方の屋敷地は「会所」的なものと考えた（中山2021）。隈府城下遺跡の約200m四方の守護館跡に隈府土井ノ外遺跡の会所跡が隣接していると推定できる。

立石遺跡は隈府の町割りの北西隅にある人工的な盛土で築造した中世の土壘跡と考えられる。この遺構は北側にある迫間川と一緒に、隈府の町の北側から西側にかけての最も外側の防衛ラインと考えられ、結構的な構造になる可能性をもっている（第129図⑤）。土壘跡の築造時期については出土遺物が2点であるため、現時点では明確な時期を示すことができなく、時期判断の資料増加を待ちたい。参考資料として、土壘跡出土の備前焼の搖鉢片（15世紀第三四半期～末）を挙げておく。

### 第3節 拠点移動について

菊池氏遺跡は立地場所から、深川・北宮地区と隈府地区との大きく二つに分けることができる。

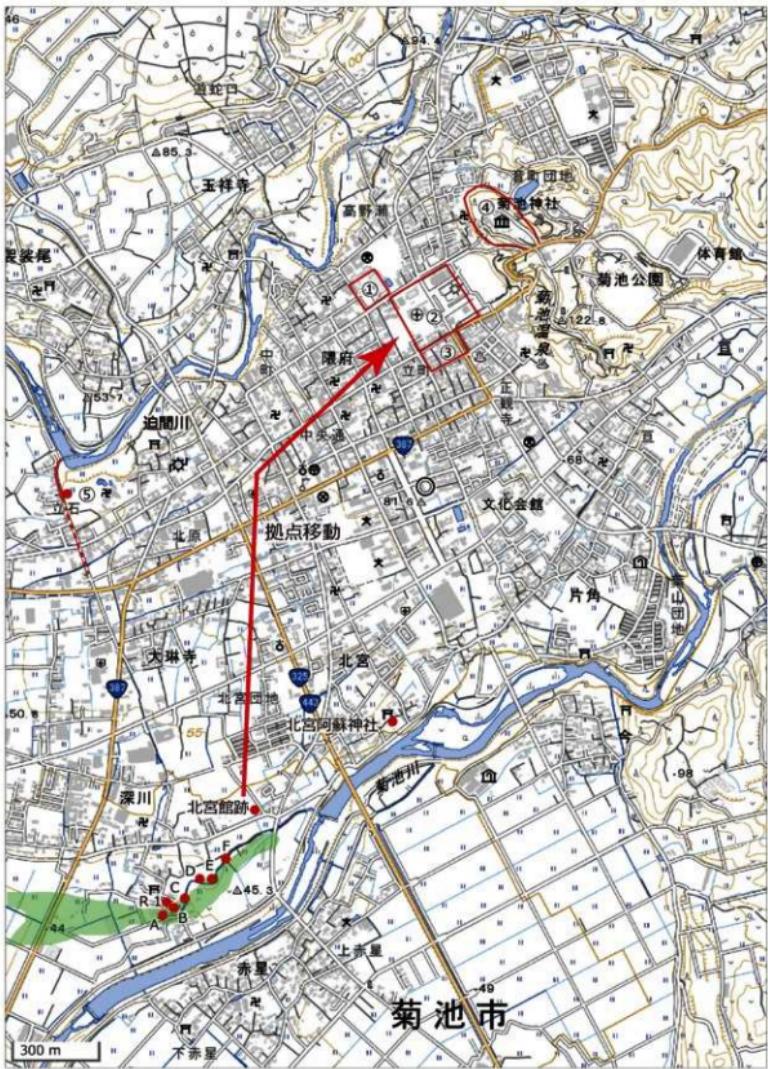
#### 【深川・北宮地区】

菊之池B遺跡で確認した遺構は1号～5号石組である。1・2号石組は1期～3期に分けられ、その時期は13世紀後半～14世紀後半と考えた。石組の覆土であるⅢ層から15世紀代の青磁が出土しており、この時期以前は石組は機能していたと考えられる。その後、17世紀末頃～18世紀中頃には石組は完全に土に埋もれた状態になったと考えた（第129図R1）。3号～5号石組は確認調査の範囲内での状況は13世紀後半～14世紀前半にかけて築造され、14世紀後半頃まで使用していたと考えた（第129図B・D・E）。北宮館跡（菊之城跡）は領主館跡と考えられ、現段階で最も新しい遺構は、1号掘立柱建物跡とその一連の遺構である。その時期は13世紀前半～13世紀後半と考えた。また、IV層出土炭化物の放射性炭素年代測定結果を併せて検討すると、14世紀後半頃までは館跡として機能していたと考えられる。（第129図北宮館跡（菊之城跡））。

北宮阿蘇神社には菊池武朝（17代）が大願主で、応永10年（1403）に制作した男女神像が存在している。このことから、北宮阿蘇神社は15世紀初頭には宗教的施設としての役割を果たしていることが確実である（第129図北宮阿蘇神社）。

#### 【隈府地区】

この地区については確認調査等の成果が充分でないが、この地区的遺跡の存続期間の概略は隈府土井ノ外遺跡の発掘調査成果で示すことができる。この遺跡からは14世紀後半～16世紀後半の遺物が出土しており、出土遺物のピークは15世紀中葉～後半である（第129図①）。この期間に「会所」と考えられる遺構が存在することは、隈府地区に領主の拠点があったことを示す資料である。現段階で想定できる拠点は「院馬場」（第129図③）に隣接する隈府城下遺跡で推定した約200m四方の館跡である（第129図②）。隈府城下遺跡の北東方向の近隣丘陵地に守山城跡が存在する（第129図④）。中中枢部と中世城が一体となった構造になっており、中枢部の町並みには基盤目状の区画割が存在している。区画割の方向と隈府土井ノ外遺跡の塙跡の方向（第128図⑥）が一致しており、中世の町割が残っていると考えられる。

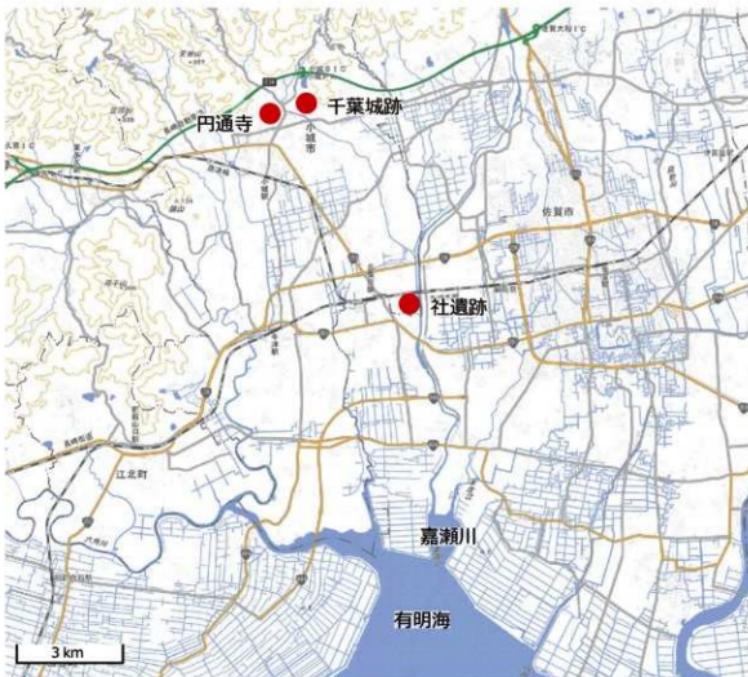


第129図 深川・北宮地区と隅府地区的遺構・遺跡と拠点移動 (国土地理院地図を一部加工して作成)

### 【拠点移動】

菊池氏遺跡の深川・北宮地区と隈府地区には立地上の違いだけではなく、時期差も存在している。深川・北宮地区にある領主館跡と考えられる北宮館跡（菊之城跡）は、14世紀後半頃に役割を終えたと考えられ、隈府地区の中枢施設に移動したと想定できる。北宮館跡（菊之城跡）の初期の遺構が確認できていないが、文献上では11世紀後半頃には館を構えたと伝えられている。この頃の遺物が北宮館跡（菊之城跡）から出土していることから、11世紀後半頃には菊池氏が在地領主としてこの地に居を構え、14世紀後半頃まで統治していたと考えられる。深川・北宮地区的遺跡の出現・展開は菊池氏遺跡の形成期（前期）のものとして位置付けることができる。この形成期の拠点は北側の隈府地区へ14世紀後半頃以降に移動した可能性が高い。隈府への拠点移動後でも菊池川旧河川の川港施設などは経済活動の基盤となるので、調査区外の箇所に川港施設などがあると推定できる。北宮阿蘇神社は拠点移動後でも同じ場所で、宗教施設としての役割を担っていた（第129図）。

菊池氏は隈府に拠点移動後、肥後・筑後を支配する守護職として発展していく。その発展過程で營まれた遺跡は菊池氏遺跡の確立期（後期）として捉えることができる。東国から下向した勢力以外で、在地領主からその国の守護となった者は九州では菊池氏が唯一の例である。菊池氏遺跡の深川・北宮地区から隈府地区への拠点移動は、在地領主から守護となった武士の形成期から確立期までの過程を辿ることができる貴重な



第130図 肥前千葉氏関連遺跡位置図（国土地理院地図を一部加工して作成）



第131図 肥前千葉氏の本拠地図 (国立歴史民俗博物館2022を一部加工して作成)

事例である。他地域の拠点活動について見てみる。

【肥前千葉氏の拠点移動】（国立歴史民俗博物館2022）

千葉宗胤は鎌倉時代後期に下総国千葉荘から肥前国小城郡へ拠点を移しはじめ、子の胤貞の時に小城郡を本拠地とする肥前千葉氏が成立した。しかし、肥前千葉氏の拠点を示す同時代の文献史料や考古資料がないため不明である。このような状況で、注目されたのが近世千葉氏の系図にある「高田城」である。社跡跡が所在する一帯が「高田」であることから、候補地にされていたが、河川輸送の流通拠点と考えた方が妥当とされている。そこで、「高田」の小字名に着目して探すと、円通寺西隣の字高田が該当する。この場所は標高約35mの段丘上で、東側に紙園川が流れているが、水害が殆どない地域との聞き取り調査結果であった。高田地域の東側に接する円通寺は宗胤が再興した寺であり、西側には胤貞が建立した光勝寺がある。この付近は肥前千葉氏に関連するものが残っている。また、円通寺の東側を流れる川を地元では「タッチューガワ」と呼んでいる。「タッчуュー」は「立中」のことと考えられ、領主や配偶者、領主屋敷の所在地を示す用語



千葉城跡出土陶磁器



千葉城跡出土陶磁器



千葉城跡出土土師器



千葉城跡出土茶臼



古町遺跡出土中国陶磁器



古町遺跡出土鉄滓

第132図 千葉城跡・古町遺跡出土遺物写真（国立歴史民俗博物館2022を一部加工して作成）

として西九州に広く分布している。これらのことから、宇高田一帯と円通寺が鎌倉時代の肥前千葉氏の有力な候補地と考えられる。円通寺に残る土墨跡は境内の一部を間借りする形で拠点を築いた痕跡と想定できる。そうであれば、光勝寺は拠点の西側の谷奥に建てられた聖地として理解できる（第130図・第131図）。

上記の拠点地と考えられる地點の東側に千葉城跡がある。城跡は標高約133mの平場が主郭で、東西約900mにわたる城域が考えられている（第131図）。城跡からは13世紀～16世紀の遺物が出土している。城内からは15世紀～16世紀前半の輸入陶磁器が出土している。日常使う碗や皿が多いが、青磁盤・酒海壺・花瓶・天目茶碗・青花壺などの奢侈品やベトナム産の染付も含まれている。また、多量の土師器が出土しており、城内で宴會儀礼が行われていたと考えられている（第132図）。千葉城跡の南側山麓に位置するのが古町遺跡である。この遺跡では12世紀～16世紀の遺物が出土しているが、15世紀～16世紀前半の青磁・白磁・青花の碗・皿が最も多く出土しており、この頃が最盛期である。この遺跡では鍛冶関連遺物も出土しており、職人の存



第133図 益田氏本郷地図（国土地理院地図を一部加工して作成）

在が想定できる（第132図）。

鎌倉時代の肥前千葉氏の拠点が円通寺一帯にあり、南北朝時代以降の拠点となる千葉城跡は円通寺一帯より祇園川を隔てた東側に位置する。拠点は南北朝内乱の勃発に伴い、武装化の必要性が生じ、円通寺周辺から千葉城跡へ移動したと考えられている（第131図）。

#### 【益田氏の拠点移動】（国立歴史民俗博物館2022）

三宅御土居跡は島根県益田市三宅にあり、益田川右岸の微高地に位置し、益田氏の屋敷跡とされている。屋敷跡は土塁と堀に囲まれており、東西約2町×南北約1町の規模で守護所クラスである。堀跡の幅は東西が約9m、北側が最大約16mである。南側は約20~25m幅の川が堀の役目をしている。この遺跡は中世前半は益田莊の政所と考えられているが、南北朝時代以降は土塁や堀が築造され、益田氏の屋敷となったようである。13世紀までの白磁・青磁は多量に出土しているが、14世紀代の遺物は減少し、15世紀後半~16世紀前半の青磁・青花が相当数確認されている。16世紀中頃には遺物出土量が急激に減少する。

三宅御土居跡の南東方向の益田川対岸に七尾城跡が位置している。城跡は島根県益田市七尾にあり、標高約118mの最上部には本丸がある。本丸では礎石建物跡が確認されており、多量の土師器や染付を中心とした中国産陶磁器の碗・皿等が出土している。二の段の境には瓦葺きの櫓門が築造されており、二の段先端部には庭園を伴った建物遺構が検出されており、宴会儀礼が行われたと考えられている。城跡からは出土した中国産陶磁器で、南北朝時代のものは殆どなく、15世紀後半~16世紀末の戦国時代のものが大半を占めている。これらのことから、戦国時代前半は三宅御土居跡と七尾城跡が併用されていたが、後半になると七尾城跡に拠点が移動したと考えられる（第133図）。

#### 【比較・検討】

肥前千葉氏、益田氏の拠点移動は移動先に中世城跡が含まれている点が共通しており、武装化、防衛化の必要性から移動したと考えられる。菊池氏の場合も、中世城跡を取り込んだ中枢部施設存在域が移動先となり、肥前千葉氏、益田氏の拠点移動と共通する。

## 第4節 菊池川を利用した交易

### (1) 輸入陶磁器について

第IV章第1節で述べたように、菊之池B遺跡、北宮館跡（菊之城跡）から白磁、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁などが出土している。その中で、1・2号石組覆土出土の龍泉窯系青磁瓶片、5号石組覆土出土の天目碗片、北宮館跡（菊之城跡）の1・2・5トレンチ出土の磁灶窯系盤片、4トレンチ出土の禾目天目碗片は特殊な陶磁器である。また、第IV章第2節での隈府土井ノ外遺跡出土の陶磁器の再評価の結果、日常生活に使用する用具だけでなく、青磁瓶類に代表される室礼の奢侈品が多数出土していることが明らかになった。さらに、国内の守護等があまり所有していない青磁水注・青磁器台・青花大皿・法花壺などは、首里城跡や沖縄県のグスクの出土品と共通点があることも明確になった（中山2021）。

### (2) 「蒙古襲来絵詞」の菊池一族（服部2014、2017）

「蒙古襲来絵詞」は肥後國御家人・竹崎季長が文永11年(1274)と弘安4年(1284)の元寇の時、戦いに出陣し、活躍した様子を描いた絵巻物である。弘安4年の元寇の時、生の松原と推定される石塗地上に並んで集団で座っている菊池一族の前を馬に乗った竹崎季長が歩むシーンに着目する。菊池一族最初の集団は五人で、旗指の旗章は鷹の羽であるが、「一つ鷹の羽」である。続く一団は七人で、さらに八人の集団が描かれている。八人全員が大鎧姿で、「次郎武房三十七」と朱字で注記された者が百余騎を率いる菊池武房である。武房の兜は従者が持ち、その横に旗指がいて、旗章は「並び鷹の羽」である。菊池一族の旗章は惣領が「並び鷹の



第134図 蒙古襲来合戦絵巻3（国立国会図書館デジタルコレクションを一部加工して作成）

羽と庶子は「一つ鷹の羽」で、違いを区別して描いている。また、井文字水草紋の旗持の隣にいる□次郎と注記された将の赤袴に三つ星紋を具体的に表現している。このことから、絵師と竹崎季長は弘安の役当時の詳細な情報を把握していたと考えられる。

そこで、注目されるのが菊池武房の刀に装着されている虎の尾の尻鞘である。この尻鞘は格別に鮮やかで目立つ（第134図↓の下部）。尻鞘は佩用者の位階で使用する皮に違いがあるとされ、五位以上は虎、四位以上は豹、六位以下は水豹（あざらし）や鹿となっている。この絵詞の別場面で、肥前白石一族、住吉神社前の武士、安達家出仕の侍が使用している尻鞘は鹿ないしは熊の毛皮と思われる。菊池武房は無位無冠にもかかわらず、高位の者しか着用しない高級輸入品である虎皮を用いていた。

### （3）菊池川河口での交易について

菊池川流域での日宋貿易の文献史料はこれまで見つかっていない。しかし、日宋貿易の存在を示す考古資料がある。それは菊池川下流域の河床遺跡で、高瀬橋周辺、永徳寺～向都留までの菊池川河川敷で採集された陶磁器である（第135図⑥）。陶磁器は約2700点で、その中で、中国青磁約1400点、中国白磁約1000点、青花約80点である。白磁は11世紀前半～12世紀前半のものが中心で、龍泉窯系青磁・同安窯系青磁は13世紀のものが多い。博多での貿易陶磁器が減少する13世紀後半～15世紀前半の陶磁器も豊富にある。さらに、沖縄での出土例が多い、ビロースクタイプ白磁があり、琉球経由の交易が含まれていると考えられる。寧波主体の博多湾交易、宗像交易とは異なる貿易商人や背後の政治権力が存在する部分もあったと考えられる。表探



第135図 菊池川旧河道と関連遺跡分布図 (国土地理院地図を一部加工して作成)

遺物の中に、福建白磁3点の底部に墨書があり、うち1点は「王□」もしくは「寿」と判読できる（服部2014、2017）。

11世紀後半～13世紀前半の博多から出土する外底部の墨書磁器には、中国商人の組織と考えられる「綱」や「王」「張」「林」などの中国人名と思われる墨書がある。これらは貿易港を示す特徴的な遺物と考えられている（田上2017）。

河川敷での表探品であるが、摩耗が少ない多量の陶磁器であり、陶磁器は上流からの流れ込みではないと考えられる。また、墨書きされた白磁から、表探地点周辺に貿易港が存在した可能性が高い。表探地点周辺は菊池川旧河道の右岸（西側）に沿った箇所にある。表探資料の時期から、貿易港としての機能を有していたのは、近世の菊池川の河川改修以前と考えられる。そうであれば、港は菊池川旧河道である唐人川を利用した水運を行っていた時期のものと考えられる。

菊池川下流域での貿易港の存在を検討するのに参考となるのが社遺跡である。社遺跡は佐賀県小城市三日月町に所在する。社遺跡は有明海に注ぐ嘉瀬川旧河道沿いに立地する古代から中世の集落遺跡である。遺跡は標高約3mと海岸線に近いため、河口に近い川港として重要な機能を有していたと考えられている（第130図）。中世の建物跡は2間×3間の身舎に4面庇がつく掘立柱建物跡など10棟が確認されている。また、時期が異なる区画溝跡が巡っており、継続的に営まれた集落跡と考えられている。遺跡からは白磁碗や同安窯系青磁碗、龍泉窯系青磁碗などが出土しており、12～13世紀頃が集落の最盛期とされている（第136図）。また、東播系、常滑、瀬戸窯の国産陶器も多く、中世前半の国内流通経路による様々なものが持ち込まれている。社遺跡は小城から国府地域への物流の集散地としての役割をもった重要な川港の集落であったと考えられている。円通寺周辺や千葉城跡に拠点をもったと推定できる肥前千葉氏が築いた流通拠点集落と想定されている（国立歴史民俗博物館2022）。

菊池川旧河道流域で多量の輸入陶磁器が表探できる場所は、社遺跡の立地に類似しており、同様な役割を担ったと考えられ、菊池氏が運営した貿易港の可能性がある。(1)で述べたように、菊之池B遺跡、北宮館跡（菊之城跡）、隈原土井ノ外遺跡からは輸入陶磁器が出土している。また、蒙古襲来絵詞には菊池武房が虎の尾の尻輪を装着した姿が描かれている。虎は日本にいなく、交易品である。希少品である虎の尾を入手できたのは武房自身が日宋貿易に関与していた可能性が高いと考えられる（服部2017）。

#### (4) 菊池川水運における伊倉と竹崎

第135図は菊池川の旧河道と関連遺跡等の位置関係を示した図である。加藤清正は肥後領内の大河川である菊池川・白川・緑川・球磨川の河川改修工事を行ったと言われている。菊池川旧河道とされる唐人川沿いには「舟津」「川丁」などの小字名が存在することから、この地域に旧菊池川が流れていたと考えられる。菊池川の改修工事は慶長10年（1605）頃に開始されたと推定されている。菊池川下流域の玉名地域には高瀬津と伊倉津（丹倍津）の港があった。伊倉津は唐人川沿いの港で（第135図⑤）、高瀬津は伊倉津より上流域にあると想定でき、上記の輸入陶磁器表探地周辺（第135図⑥）が高瀬津であった可能性がある。伊倉津で海外交易が行われたと推測できる遺跡などを見てみる。伊倉津には唐人町と呼ばれる地名があり、唐人屋敷との小字名も残っている。また、唐人墓も3基ある。肥後四位官郭公墓は玉名市伊倉南方（通称、鍛冶屋町）にある。四位官郭公は福建省出身で、朱印船貿易に従事した。墓は長方形の敷地中央に盤状の石を置き、縁取りした板石を立てており、福建南部の様式に共通している。子の珍栄が元和5年（1619）に建立した（第135図③、第137図3）。振倉謝公墳は玉名市伊倉北方にあり、墓石に「大明振倉謝公墳」と刻まれている。その名から古伊倉に住んだと考えられる明人謝公の墓である。林均吾墓は玉名市天水町部田見にある。墓碑に「龍郡林均吾墓 元和七年男作立」と刻んである。林均吾は元和七年没の明人で、朱印船貿易家の林三官



社遺跡（西から）



社遺跡（東から）



社遺跡（南東から）（↓の下の低い面が遺跡）



白磁



青磁



国産陶器



青白磁合子等

(陶磁器の写真是国立歴史民俗博物館2022を一部加工して作成)

第136図 社遺跡と社遺跡出土遺物写真



1 切支丹墓碑（東から）



2 海奇山金剛寺（竹崎觀音）（南から）



3 肥後四位官郭公墓（南から）



4 唐人舟つなぎの銀杏（東から）

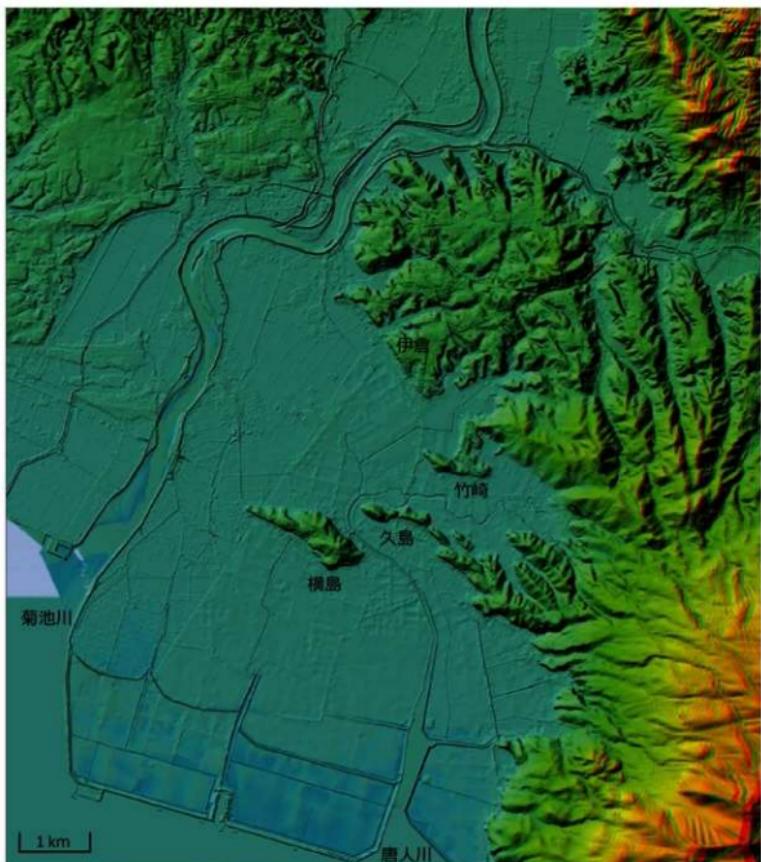


5 唐人川河口付近（東から）

第137図 唐人川関係写真

の一族と考えられる。切支丹墓碑は玉名市伊倉北方にあり、蒲鉾形の墓石が明治時代、土に埋まっていたのが発見された。墓石は安山岩製で、全長約57cm、高さ約27cm、底面幅約35cmで、前面に花十字が刻まれている（第135図①、第137図1）。また、玉名市伊倉北方にある唐人船繫ぎの銀杏は丘陵西側端部の急峻な崖面との境に位置している（第135図②）。銀杏は幹回り約7.7mあり、樹齢約800年と言われている（第137図4）（森山2005）。

伊倉には日本的な品種改良を加えていない唐茶の原本が2本あった。1本はこの船繫ぎの銀杏の根元にあったが、崖崩れで消滅した。もう1本は海奇山金剛寺にあり、この原本を挿し木で光専寺境内で増やしている。伊倉には唐茶保存会があり、唐茶、香る茶、苦茶として嗜んでいる。伊倉では日明交易が盛んだったので、唐茶は中国から直輸入されたと考えられ、日宋貿易の拠点地の可能性がある。この海奇山金剛寺は玉名市天水町竹崎にあり、通称で竹崎観音と呼ばれている（第135図④、第137図2）。海奇山の山号は海の奇



第138図 菊池川旧河道と河口の様子（国土地理院地図を一部加工して作成）

山と考えられ、近世干拓が行われる以前の金剛寺周辺の景観は、大潮の満潮時には海水が満ちた状態で、海の景観となつた。竹崎の南西側に位置する久島、横島やさらにその後方の雲仙岳、南東方向には三ノ岳、二ノ岳が遠望でき、海に浮かぶ島々、山々は壯觀である。海に囲まれた竹崎の海洋性が分かる。菊池川の旧河道である唐人川が有明海に注ぐ河口周辺に竹崎が存在しており、河口津としての立地を活かした竹崎の役割は重要であったと考えられる（第138図）（服部2014）。第137図5は菊池川の旧河道である唐人川の河口周辺の写真である。近世・近代・現代の横島干拓箇所が海水に満ちた状態を想像すれば、この全体を海の奇山とした素晴らしい中世の景観が浮かび上がってくる。

#### （5）竹崎氏と江田氏について（服部2014、2017）

竹崎季長は江田秀家と蒙古襲来の合戦で、互いの兜を交換した。合戦中でも自分の兜なら見つけやすく、相方の活躍を証言し易かった。竹崎季長にとって江田氏は最も親近感のある関係であったと考えられる。江田氏は肥後国玉名郡江田（現、和水町江田）を苗字の地とする。この地は菊池川の感潮区間の上限で、延喜式の江田駅も置かれ、水陸交通の結節点である。江田氏はこの地の領主であり、菊池川水運を掌握し、八代海を経て薩摩国高城郡と交流があった。江田氏は菊池一族であり、その祖は日宋貿易の中心的存在である高田牧司・大宰大監藤原蔵規である。

竹崎季長は「蒙古襲来絵詞」の中で、菊池軍團と遭遇する場面で、菊池武房に問われて、「同じきうち（内または氏）」と返答している。つまり、竹崎氏は菊池一族である。従来の研究では竹崎氏の本貫地は益城郡とされていたが、季長と八代郡海東郷との関係ができるのは弘安の役後の恩賞を得た正応以降であり、文永の役段階では八代郡・益城郡との関係は成立していなかった。また、弘安の役で季長の兵船に乗った人々は季長の同族か配下と考えられる。船に乗った人々は飛田二郎秀忠、小野大進らいせう、やいごめの五郎、宮原三郎である。飛田の地名は飽田郡飛田（現、熊本市北区飛田）にあり、飛田氏の拠点である。焼米の地名は菊池川流域の玉名郡焼米（現、玉名郡和水町焼米）にあり、焼米氏の拠点である。飛田氏と焼米氏は秀を通字とし、同族と考えられる。宮原氏の宮原は玉名市宮原（現、玉名市伊倉南方の東側隣接地）にあり、竹崎の近隣地である。小野の地名は荒尾市水野にある。水野は小野と水島の合併地名である。以上のことから、竹崎季長は菊池川流域やその近隣に拠点を置く同族もしくは配下と同様な地域に拠点をもったと考えられ、その本貫地は玉名郡竹崎であろう。

以上のことから、江田氏と竹崎氏は菊池川水運を利用しやすい場所を拠点とし、水運を掌握する菊池一族であったと考えられる。

「蒙古襲来絵詞」は肥後国竹崎季長が戦後10年程経て、絵師に描かせたものである。絵巻は極めて高額の費用が必要なので、天皇家、摂関家のよう貴族、大寺社が発注するものである。一地方御家人である竹崎季長がなぜ、このような絵巻を作成することができたのであろうか。竹崎氏の経済的基盤は菊池川水運を掌握し易い河口に拠点を確保し、多様な交易を行ったことによるものと考えられる。

#### （6）日宋貿易について

前述した菊之池B遺跡、北宮館跡（菊之城跡）、隈府土井ノ外遺跡から出土した輸入陶磁器、「蒙古襲来絵詞」に描かれた菊池武房の虎の尻鞆、菊池川下流域から表採された多量の輸入陶磁器、唐人川沿いの伊倉津、唐人川河口にある竹崎、菊池川水運を掌握していた江田氏・竹崎氏の存在から、菊池川流域での日宋貿易が展開されたと考えられる。ここでは日本から宋への輸出品について見てみる。

貿易の輸送手段は帆船である。帆船は帆柱を高く立てると不安定になる。それで、転覆を防ぐためにバラスト（重量物）が必要になる。重量があり、輸出商品としての価値が高く重要視された積荷が木材と硫黄で

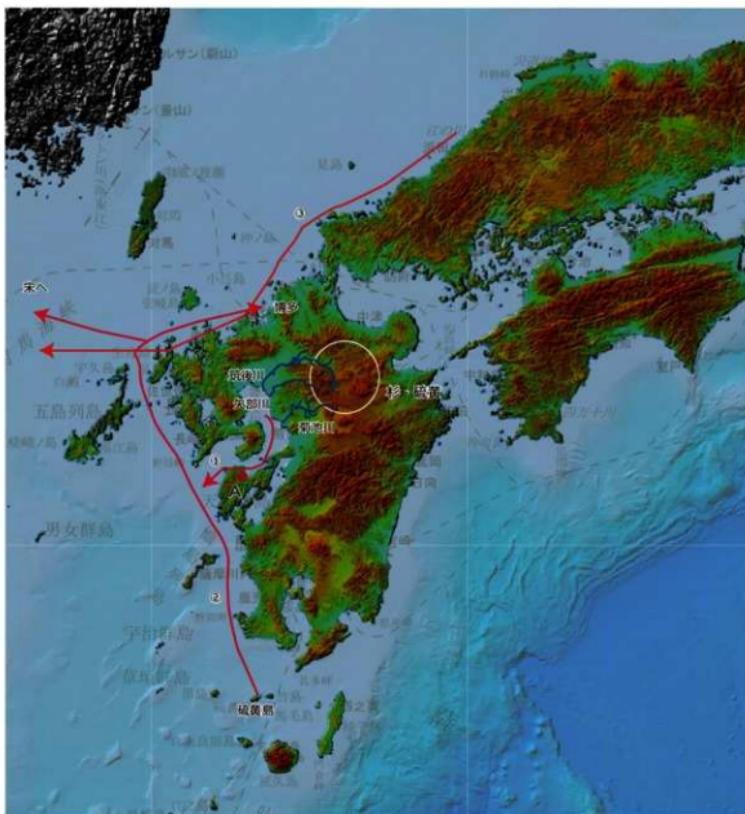
ある。木材の中でも中国に産出しないものが杉・檜で、日本にしか育っていない。硫黄は火薬の原料として、有益性のある商品である。中国大陆には火山が少なく、宋の領域には火山が殆どなく、自国内で硫黄を確保するのは困難であった（服部2017）。

肥後国阿蘇郡には九州で有数の杉産地である小国がある。小国の西側には筑後国、豊後国、肥後の国境の三国山がある。ここから筑後川、矢部川、菊池川が流れている。九州山地で育った良材はこれらの河川を下って有明海に運ばれた。その一つが菊池川水運を利用した木材運搬である。良質の木材を畿内に運んでも、吉野・熊野の木材と競り合うことになる。同じ木材をほぼ同じ距離の宋まで運べば商品価値が高まり、莫大な利益を得たと考えられる。鎌倉時代の北条氏の所領をみると、阿蘇郡や人吉庄北方など九州山地に集中しており、杉などの産地である。もう一つの輸出品である硫黄の産出地は阿蘇・久住・雲仙などであるが、これらの場所での入手権利も北条氏は確保していた。さらに、天草の志岐にも北条氏の所領があった。この場所は有明海を経由して、宋に向かう航海ルート上の重要な中継点である（第139図ルート①）。菊池氏は蒙古襲来前後には鎌倉・北条実時と深い交流関係を築いており、菊池武房はその被官であった。菊池氏は自己の権利を保障してくれる中央権力を求めており、北条氏は自らの権益・権力を行使する際の手足となって実働してくれる存在を求めていたので、両者の利害は一致し、宋との交易を盛んに行い、財政的な基盤を築いたと考えられる（服部2017）。

前述の硫黄の産地以外に、古代・中世の日本から輸出された硫黄の主要産地とされているのが硫黄島である。この島では活発な火山活動の産物として硫黄が採掘されていた。このことが1471年に朝鮮で刊行された日本・琉球の国情や対日外交マニュアルである『海東諸國紀』の「日本国西海道九州之図」に記載されている。図中の硫黄島には「硫黄を産し、日本人これを採る」との記述がある（第140図）。また、近世の日本でも佐藤中陵が記述した『中陵漫録』（1826年）の中に「硫黄の用途は広く、年月を経たものが薬用として貴重であり、信州の島の目・鷹の目の硫黄は絶品である。その他、会津の泥尻、肥後の阿蘇山などにも産する。しかし、薩摩の硫黄島の産が隨一である。」とあるように硫黄島の硫黄は重要なものとされている。『海東諸國紀』記載の航路を参照した硫黄島から宋までの硫黄運搬航路は次のように考えられる。硫黄島の南に隣接した「恵羅武」（口永良部島）から「房御崎」（坊ノ岬）、天草津、松浦を経て博多の「愁末要時」（住吉）までのルートである。このルートで博多に到着した硫黄は博多港から中国に輸出されたと想定できる（第139図ルート②、第140図）（山内2016）。

ここで、木材交易ルート上の中継地とした天草に浜崎遺跡（第139図A）がある。浜崎遺跡は天草市北浜町にある11世紀～13世紀の中世遺跡である。遺構は掘立柱建物跡、溝跡などが確認され、出土遺物は輸入陶磁器、土師器、東播系須恵器、滑石製石鍋、籠の羽口、鉄滓、宝瓶印塔、五輪塔などで多岐にわたる。その中で、墨書陶磁器5点は注目すべき遺物である。外底部に「大」を墨書きした白磁V類碗以外は文字が判読できない。墨書き陶磁器の存在から、この遺跡は日宋貿易の港として役割を担っていたと考えられる（中山2011）。この遺跡は有明海から東シナ海への出入口に立地しており、『海東諸國紀』に記載されている「天草津」の可能性がある（第140図上）。「海東諸國紀」の「肥後州」には「菊池殿」として20代菊池為邦の遣使が1456年に来朝したこと、肥後・筑後の二国を統治していたこと等が記述されている（第140図下、申1991）。菊池氏の対外交易の一部を示す史料である。

菊池氏以外の木材交易の例として、益田氏の日本海交易を見てみる。石見国の木材は京都周辺に運ばれて商品として流通しながら、他国から木材の調達もあった。肥前国の櫛田神社の縁起に正和3年（1314）の出来事として、次の靈験譚が記述されている。梶取の宗定が石見国須河（鳥根県津和野町日原の須川地区）で木材を確保したが、旱魃で川下しできない状態であった。ところが、局地的な大雨が降り、一晩で「みなと」まで木材を流すことができた。しかし、「みなと」の「浦人」が「流れ木」は「半分ハ得分」であると木



第139図 木材・硫黄の交易ルート（国土地理院地図を一部加工して作成） A：浜崎遺跡

材の半分を取り上げた。その後、「惣領の下人」の夢に「天童」が現れて木材の返還を要求した。下人は主人である惣領にその夢の内容を伝えたけれども、返還は行われなかった。すると、惣領は重病となり、浦人に対して木材の返還を命じたという。須川は高津川の上流域にあり、「みなど」には「浦人」がいることから、「みなど」は益田川・高津川河口の港と考えられる。この史料からは、肥前国から木材の調達に訪れていたこと、高津川で木材の川下し運搬があったこと、「惣領」の支配体制下で木材の生産・流通が行われていたことが分かる。また、櫛田神社が日宋貿易の拠点である肥前国神崎荘に位置しており、木材が交易の大きな比重を占めていたと考えられる（西田2018）。

『海東諸国紀』には日本海の交易ルートが示されており、若狭一山陰一北部九州一壱岐一対馬一朝鮮を結ぶ交通網が考えられる。益田川・高津川河口の中須西原遺跡、中須東原遺跡から出土した多量の朝鮮陶磁器はこのような流通網によってもたらされ、益田と朝鮮のつながりを示している（国立歴史民俗博物館2022、第139図ルート③）。

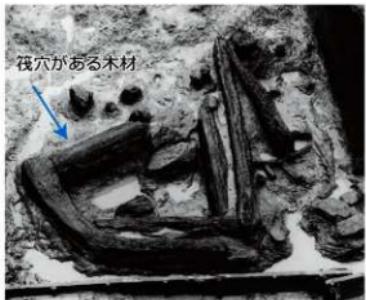
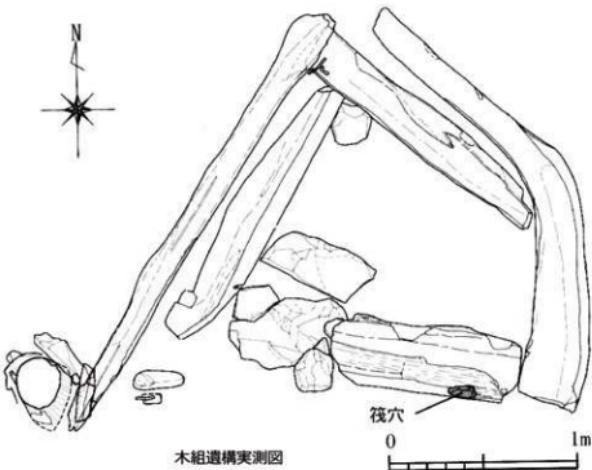


第140図 『海東諸国紀』 (国立国会図書館デジタルコレクションを一部加工して作成)

### (7) 菊池川の筏での木材運搬について

古代山城である鞠智城跡（熊本県菊池市・山鹿市）の貯水池跡の南東頭部に木組遺構がある。木組遺構は木材を略方形に配置し、その一部に石段を設けたもので、開まれた中央で水が湧くので、水汲み場と考えられている。木組遺構に使用されている木材には、加工された痕跡があるものが含まれており、そこで筏穴のある木材に着目する。筏穴は木材を筏に組んで固定する時に、蔓などの繩状のものを通した穴である。このことは菊池川流域に所在する鞠智城跡では筏流しで運搬した木材を利用していたと考えられ、菊池川での筏運搬は古代までは遡ると想定できる。（第141図、熊本県教育委員会2012）。

菊池川流域で筏運搬に関連する船着場については資料が乏しい現状である。比較的資料が残っているのが高島船着場跡である。この船着場跡がある菊池市七城町は菊池川に沿った平野部の上流域に位置している。船着場跡の周辺略図及び古写真（昭和20年代）から、当時の様子を復元してみる（第143図・第144図）。旧高島橋の下流右岸に石組の俵ころがしがある。俵ころがしの構造は中央部が石壠で、左右両端に石段が付設



木組構造（北東から）



木組構造木材 筏穴 (南から)

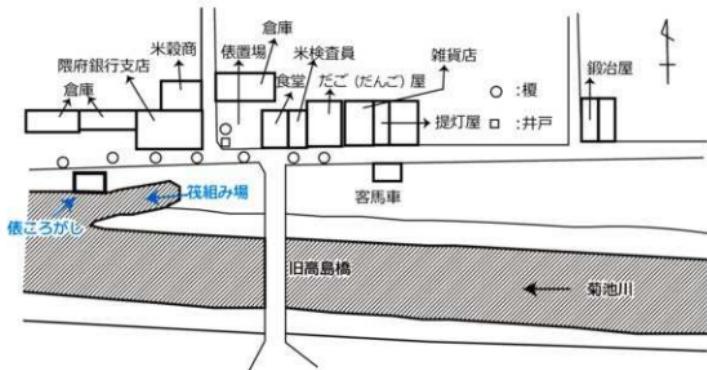
第141図 鞠智城跡木組構造と筏穴（熊本県教育委員会2012を一部加工して作成）

してあった。石畳の幅は約5m、石段の幅は約1.2mのことである。古写真から俵ころがしの様子が見て取れる。俵転がしの北側の河川に沿った箇所には、下流側から上流側に向けて、倉庫・隣府銀行高島支店・米穀商・俵置場があり、さらに食堂などの商店が並んでおり、物流の拠点としての状況が想定できる。さらに、注目したいのは俵ころがし東側の隣接箇所に貯水池状になっている施設があり、筏組場となっている。木を水に浮かべた状態で筏を組んでいたと考えられる。

高島船着場での筏師であった金森一男氏の話が「菊池市史」に掲載されており、その概要を述べる。菊池川上流域の深葉山から材木を積んだ馬車数十台が高島に到着し、筏師は貯水池で自分が乗る筏を組んだ。25石から30石ぐらゐの材木（馬車5台分）で一艘の筏を組んだ。筏は菊池川の水量、堰の関係で第142図のように独特な組み方をした。この筏に乗って一人で下れば、途中思わぬ故障が起こることがあるので、2~10艘で下っていた。到着場所は菊池川河口付近の大浜（現玉名市）で、通常2日の行程であった。昭和10年頃



第142図 筏組みの図(菊池市1986を一部加工して作成)



第143図 高島船着場付近図(大正初期) (七城町1991を一部加工して作成)



旧高島橋（東から）



高島船着場（南から）  
隣接した場所に倉庫2棟、隸府銀行高島支店



旧高島橋、隸府銀行高島支店（左側）（南から）



高島船着場の石の桟橋（南から）

第144図 昭和20年代の高島船着場・旧高島橋周辺写真（七城町1999を一部加工して作成）

からトラックでの運搬が主流になり、筏流しは姿を消した（菊池市1986）。

以上のように、菊池川では古代と近代で、筏流しでの木材運搬の状況が把握できる。昭和10年頃までは筏流しでの木材運搬が行われていたことは、中世・近世でも木材の筏流しが継続的に行われていたと推定できる。筏流しで河口付近に集められた木材は大型船に積み込み、有明海を経由した貿易品の一つとして流通していたと想定できる。

## 第5節 「福岡の市」からみた集散地の様子

### (1) 「一遍聖絵」の福岡の市（五味2021、第145図）

「一遍聖絵」は一遍が亡くなった10年後の正安元年（1299）の一一遍の命日に絵巻が完成した。その中の一つの絵が福岡の市である。福岡の市は岡山県瀬戸内市長船町福岡の吉井川沿いにあった。絵の下部に描かれている川は吉井川と考えられる。絵の中央には、一遍に向かって大太刀を抜こうとする人とその背後に侍鳥帽子の従者二人が身構えているのに対し、一遍が右手を出し、問いかける様子が描かれている。その絵の左下の川では市女笠の女が乗る小船が右に進んでいる。その上流の船着場には二艘の船が着岸している。その前面に、背面を延べた見世物小屋と大型の壺を横倒しの状態で並べた小屋がある。その小屋の前では人々が中央で行われている一遍の対決場面を見物している。対決場面の背後には市の町筋があり、道路の両側に三棟の建物が描かれている。三棟の建物は掘立柱の小屋で、切妻造、草葺の構造である。これら的小屋の人々は対決を見ていない。対決に興心がないのでなく、市の日常の様子を描いている。

市に集まつた人々を場所ごとに見てみると、見世物小屋の前で対決を見ている人々は、市女笠の女二人、頭巾の人、侍鳥帽子男二人、頭巾の男、市女笠の女である。壺を置いた小屋の前では、法衣の坊主、侍鳥帽子、直垂の男、衣被きの女、笠を背負う頭巾の女、塗笠の男、少女の手を引く女が対決を見ている。そこに二人の男の子が駆け寄る。

町筋手前の小屋では、市女笠の女二人と折鳥帽子男が商品を売っている。その後ろで琵琶を弾く侍鳥帽子の男、頭巾の女三人と下げ髪の女がものを売っており、背後には乞食二人、その横には大きな壺が三つ並んでいる。

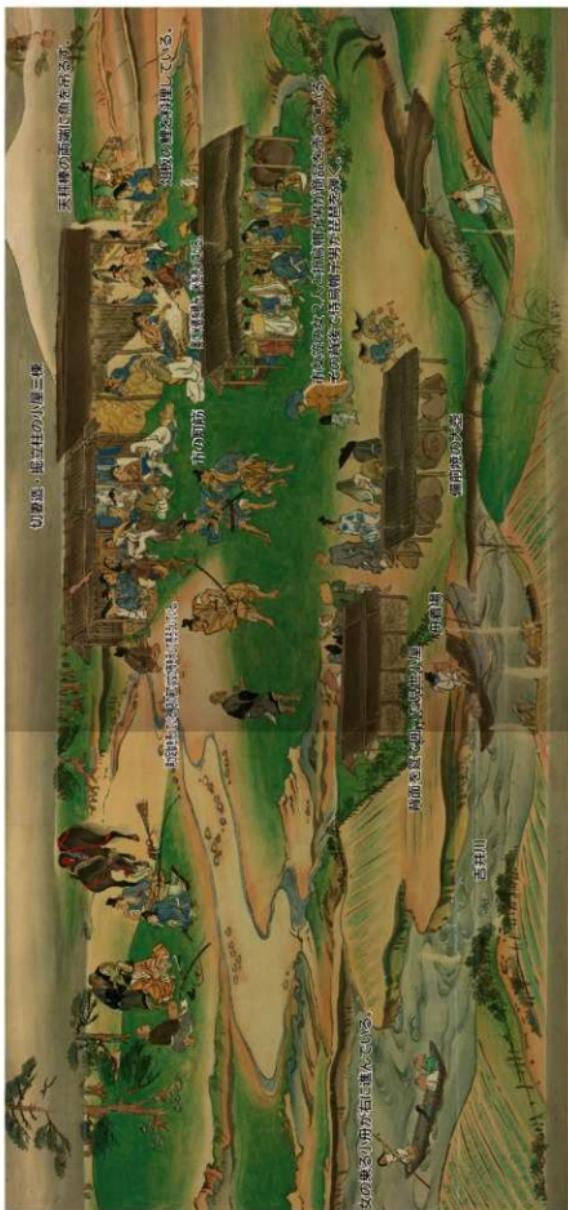
道向かいの小屋では、膝をついた男が筵に座る女に何か捧げており、その前で侍鳥帽子の男が足駄を売っている。小屋の中には七人の女がいる。小屋の前には市女笠の女が銭をもって立っている男に布を売ろうとしている。布をもった衣被きの女と坊主頭の男が座り、見世の女と交渉している。

隣の小屋では、積まれた米俵に肘を付く男、その前に男客のもつ袋に桥で米を入れようとする男、その様子を座って見ている頭巾の女と市女笠の女が描かれている。板壁仕切りを背にする男の前には鳥、魚が棚に並べられている。その近くで男が俎板の鯉を料理し、客の女が鉢を横に置いている。その隣には侍鳥帽子の男が魚を天秤棒に吊るした姿が描かれている。

これらは中世の市の様子を具体的に描いた貴重な史料である。小屋の中に描かれた陶器の壺は、市の近くに備前焼の産地があるので備前焼の大壺と考えられる。

### (2) 陸上交通について

中国・四国地方は瀬戸内海を中心とする海上交通が主流で、港町の発達が顕著である。一方、宿場町はそれほど発達しなかった。山陽道の宿駅は「一遍聖絵」の中に垣間見ることができる。一遍は安芸（現広島県）の嚴島に参詣した。その後、備前の藤井（現岡山市）の政所、福岡の市を訪れた。福岡の市では特産物の備前焼などが見られ、山陽道の商品流通の盛んな様子がうかがえる（菊池2019）。



第145図 「福岡の市」(一通書翰 4 国立国会図書館デジタルコレクションを一部加工して作成)  
(絵の解説は五味2021を一部改変して作成)

### (3) 集散地としての市

「一遍聖絵」の福岡の市の史料から、吉井川水運を利用した物資の集散の具体的な内容が見られる。市には三棟の小屋の間に町筋があり、その通りで売買が行われている。その他に見世物小屋、商品を置いた小屋があり、人の集合が見られる。商品としては備前焼、米・魚・鳥などの食料、足駄、布があり、様々な人々が市に集まっている。また、見世物小屋もあり、賑やかな市の人々の様子が描かれている。また、この市近くには陸路である山陽道も通っていることから、水陸交通の結節点に市が開催されていたと考えられる。

定期的に開催された市は、開催日には商品や人が集まり賑やかであった。開催日以外は閉散とした非日常生活空間となった。このような場の特性から市の交易機能を補完するため、集散地の周りには町場が形成される。町場は領主や地域の人々との交易の場であり、地域住人の労働力提供の場ともなった。集散地の町場は、市の空間に入々が自然に定住することで形成されたのでなく、領主が市となる場の周辺に町屋を設定し、そこに入々を居住させることで形成された（国立歴史民俗博物館2020）。

### (4) 北宮館跡（菊之城跡）周辺の「上市場」、「下市場」

第146図は明治期の北宮館跡（菊之城跡）周辺の絵図である。この絵図を見ると、北宮館跡（菊之城跡）の東側に「上市場」、「下市場」の字名が残る場所がある。北宮館跡（菊之城跡）が領主館跡と考えられるところから、「上市場」、「下市場」は拠点近くの集散地である可能性がある。館跡の南側隣接地點には菊池川の旧河道が流れおり、「下市場」は菊池川旧河道沿いにあり、「上市場」は現菊池川河道に沿った場所にある。これらの場所は河川交通を利用しやすい立地である。この旧河道を利用するかたちで、江戸時代には菊池井手が開発された。

北宮館跡（菊之城跡）南西方向周辺の旧河道沿いには、船着場跡と考えられる護岸施設（第146図R 1）、旧河川護岸施設と考えられるもの（第146図B・D）、旧河川に伴う水が溜まる施設と想定できるもの（第146図E）が築造されている。これらの河川交通に関する施設と共に、「上市場」、「下市場」は福岡の市のような物資の集散地としての役割を担っていたと考えられる。さらに宗教施設である北宮阿蘇神社も市場東側



第146図 明治期の北宮館跡（菊之城跡）周辺の絵図

の隣接地に位置している。北宮館跡（菊之城跡）から北宮阿蘇神社までの空間と旧菊池川河道沿いの河川護岸施設周辺には、「一遍聖絵」の福岡の市のような中世的な都市景観が展開されていたと想定できる（第145図）。

## 第6節 和船について

日本の船は縄文時代の一本の木を刳り抜いた丸木船が最初に登場する。造船史では丸木船を単材刳船と呼んでいる。出土した縄文時代の単材刳船の多くは長さ5m~7m、幅50cm~60cmで、平面形は船の首尾を丸く削った鰐筋型を呈し、船の首尾は反っていない。単材刳船は小型船として長く使われ、古代・中世でも造られた。板材と梁材を組み合わせた構造船が登場した江戸時代になっても、漁船の一部は単材刳船であった。近年でも岩礁の多い磯漁では単材刳船が使われていた。単材刳船が無くなったのは繊維強化プラスチック（FRP）船の登場後である（安達1998）。

### (1) 中世の絵巻物の川船

まず、中世の絵巻物に描かれた川船を見てみる。第147図1は「一遍聖絵」の「福岡の市」の中から、吉井川沿いの市場に着岸している二艘の川船を抽出したものである。左側の船の首尾は反っている。この船は首尾を縱方向に継ぎ合わせた複材刳船と考えられる。右側の船は継ぎ目が描かれてないので単材刳船すると、船の深さが不足する。単材刳船の両舷に一对の側板を追加すると、描かれた船の深さが確保できる。そうであれば、準構造船と考えられる。

第147図3は「一遍聖絵」に描かれた琵琶湖の大津の浜に着岸する鵜舟船を抽出したものである。この船は船首が反っており、船首部分を継ぎ合わせたと考えられる。継ぎ合わせ箇所から船尾まではほぼ平らに造られている。その構造から「箱型構造船」と考えられ、小型であっても、深い船体をもつ「高瀬船」である可能性が高い（石井1995）。

次に、船が描かれているのは海上であるが、川船としての利用が考えられる船を取り上げる。第147図2は「蒙古襲来絵詞」の中で、敵船に乗りつけている兵船の上で、竹崎季長が敵の首をとろうとしている場面である。兵船は小型であり、船首部の半分が描かれている。船首は反っており、船首材と胴瓦（胴部材）との継ぎ目が明瞭に表現してある。船尾部が描かれていないが、三材構成の複材刳船と考えられ、小型船に複材刳船の技術が普及した例である（石井1983）。

第147図4は「蒙古襲来絵詞」で、生ノ松原を出発する竹崎季長の兵船を描いたものである。橋で見えない箇所があるが、船縁保護用の角材をつけた船首尾は反っている。船尾の丸味のある表現には刳船の特徴が示されている。この船は船首材・胴瓦（胴部材）・船尾材の三つの刳船部を縦につないだ三材構成の複材刳船である。船首尾部の形状や細長い船型から複材刳船式の櫓（ひらた）である。漕手が6人いることから、最大級の體と考えられ、他の事例から長さ25m前後、幅2m程度の大きさと判断できる（石井1983）。第147図5は「蒙古襲来絵詞」の志賀島海戦と思われるの場面の兵船三艘を抽出したものである。三艘は船体の特徴から、櫓である。漕手が4人であることから、第147図4の船よりはひと回り小さい三材構成の複材刳船である。船縁に保護材を取り付けている点は第147図4の船と同様である。長寛2年（1164）の「嚴島文書」にある長さ45尺、幅7尺の船がこのクラスの櫓と考えられる。櫓という船は本来は川船であり、海での利用は波が高くない風の状態時に限られたものである（石井1983）。

中世の絵巻物に描かれた船の形状から構造の検討を行った結果、準構造船や複材刳船が中世の川船に使用されていたと考えられる。さらに、川船である櫓船が穏やかな波の時には海でも利用されていたと想定できる。



2



3



4



5

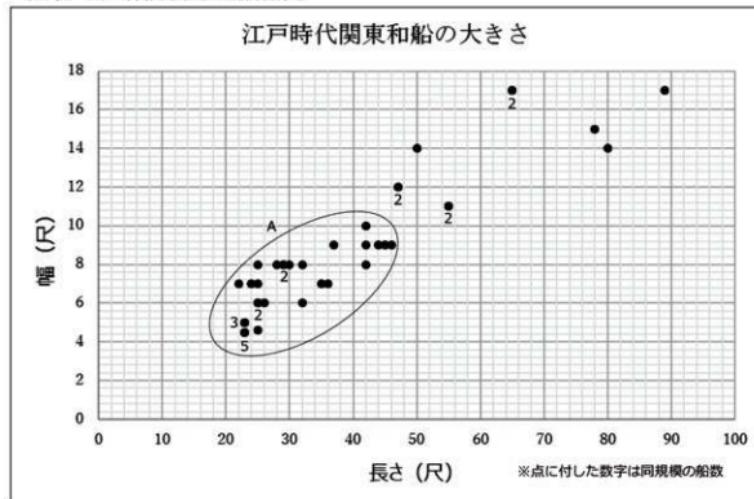
第147図 一遍聖繪の川船（1・3）蒙古襲来合戦絵巻3の船（2・4・5）  
(国立国会図書館デジタルコレクションを一部加工して作成)

## (2) 川船の大きさ

次に川船の大きさについて考えてみる。川船の規模を示す中世史料が不足しているので、近世史料から川船の大きさを検討してみる。『船鑑』は江戸幕府の川船役所が管下の船統制のために作成したものである。この史料には関東の川船の絵図が描かれており、その中に船の大きさの記述がある。幅のある数値が記述してあるので、41艘の長さ、幅の最大値をまとめてある（川名2013）。その数値をグラフ化したものが第6表である。この表から読み取れることは、河川で主に利用したのは小回りが利く小型船と考えられ、長さ約20尺～50尺、幅約4尺～10尺の大きさの範囲に31艘が集中している（75.6%・第6表A）。この範囲外には大型船10艘が分布している（24.4%）。

古代の船については『日本三代実録』の中に記述がある。その内容は「近江・丹波の両国それぞれに高瀬船3艘を造らせた。長さ3丈1尺（31尺）、幅5尺の2艘、長さ2丈1尺（21尺）、幅5尺の2艘、長さ2丈（20尺）、幅3尺の2艘を神泉苑に送る。」である（国立国会図書館デジタルコレクション）。古代の船の大きさも上記の近世小型船が集中する範囲内におさまる。古代川船の大きさが近世川船と大きな差はない事例であり、中世川船も近世川船の規模とほぼ変わらないと考えられる。

第6表 江戸時代関東和船の規模別分布



## (3) 菊池川の川船

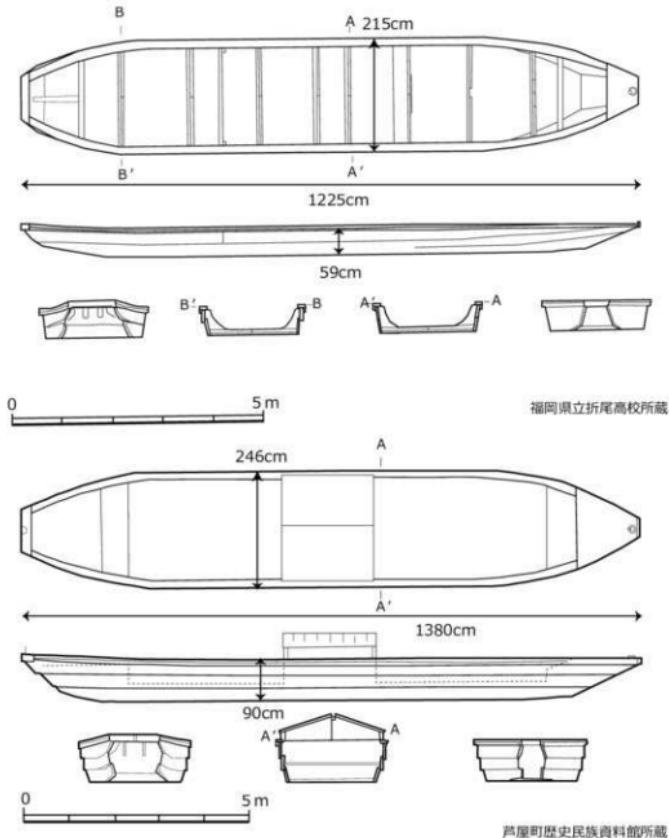
松井氏は川名登『近世日本の川船研究』をベースに川船の分布図を作成された。近世の川船は高瀬船、縄(ひらた)船、鵜飼船などが代表的なものである。これらの船の分布状況は、高瀬船と縄船は北は岩木川（青森県）から南は球磨川（熊本県）、川内川（熊本県・宮崎県・鹿児島県）まで、全国の河川に広く分布していた。鵜飼船は岐阜県から愛知県にかけての地域と東北の一部の河川で利用されていた。高瀬船と縄船、または鵜飼船が共存していた河川も存在していた。また、川船については、各地での資料が収集されているが、部分寸法や見取り図が殆どであり、比較・検討に必要な資料である船図は僅かである（松井2007）。先述の全国河川分布図で菊池川では縄船が主要船である。しかし、菊池川の縄船船図がないので、遠賀川の主要船であ

る艤船の船図を参考資料として取り上げる。

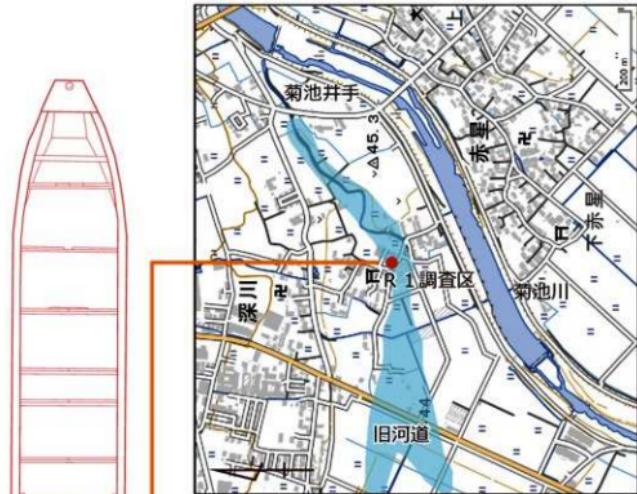
第148図上は福岡県立折尾高校（北九州市）所蔵の艤船実測図である。この船は船室がない子船と呼ばれた船であろう。最大長1225cm（約40.4尺）、最大幅215cm（約7尺）、最大高59cmである。一枚立板二階造りで、船尾のシキは僅かに反るが、船首の反りは殆どない。第148図下は福岡県遠賀郡芦屋町歴史民俗資料館所蔵の艤船実測図である。この船は居間がある世帯船、親船と呼ばれる船で、一枚板三階造りである。最大長1380cm（約45.5尺）、最大幅246cm（約8.1尺）、最大高90cmである（松井2007）。この二艘の艤船は第6表江戸時代の関東和船の小型船が集中する範囲内に含まれ、その中の大きな船のグループに属する。

#### （4）菊之池B遺跡1号・2号石組の利用想定について

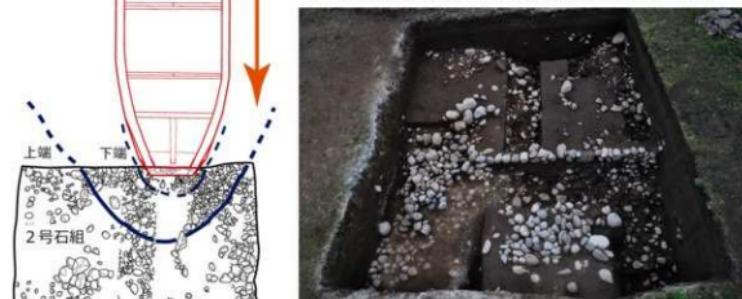
1・2号石組は「U」字形の平面形を呈すると想定できることから、その窪んだ箇所に船が着岸すると推



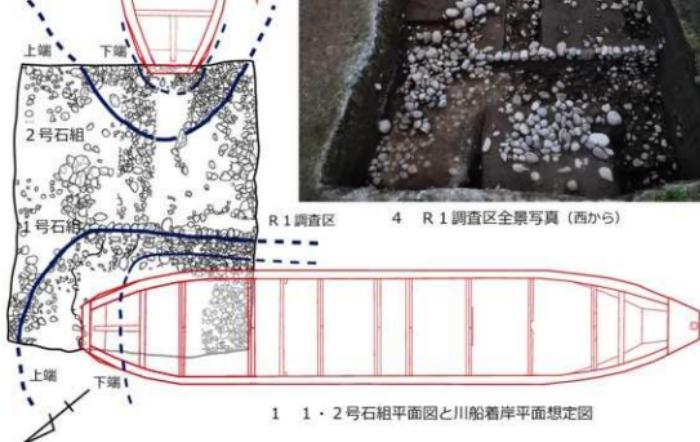
第148図 遠賀川の川船実測図（松井2007を一部改変して作成）



3 R 1調査区と旧河道 (国土地理院地図を一部加工して作成)



4 R 1調査区全景写真 (西から)



1 1・2号石組平面図と川船着岸平面想定図



2 1号石組断面図と川船着岸立面想定図

第149図 1・2号石組と旧河道との関係

定した。その点を検討するために、1・2号石組の平面図、断面図と近世の菊池川での主要船である艤船の船図（第148図上）を用いて、図上で利用状況を想定してみる。

第149図1は1・2号石組平面図と艤船の平面図を複合した想定図である。1・2号石組平面図に石組の上端・下端を青線で示した。平面図だけでは石組の上端・下端が明確にできないので、判断資料として第149図4の写真を掲載した。この写真のはば中央下端部にある四角形の高まりは、Ⅲ層上面まで掘り下げを行い、それより下位層は保存のため掘り下げを実施しなかった部分である。この部分にも擂鉢状の窪みが存在することを土層から確認した。1号石組は調査区西側の未調査区にも石組が存在すると想定できる。想定平面形は「U」の字を横にしたようなものになると考えられる。また、2号石組の未調査区を含めた想定平面形も「U」の字形を呈すると考えられる。1・2号石組の想定平面形の窪みの中に、船首を前方に着岸する艤船の平面船図がうまく収まる。第149図2は1号石組の長軸方向の断面図と艤船の立面船図を複合した想定図である。1号石組の擂鉢状の窪みの最大高低差は約60cmあり、最大高59cmの艤船が窪みの中に着岸可能と考えられる。また、2号石組の最大深部が約60cmがあるので、1号石組と同様に艤船は着岸できると想定できる。

第149図3は1・2号石組を確認したR1調査区と菊池川旧河道の位置関係を示したものである。R1調査区は旧河道の右岸（北岸）付近に立地し、調査区の南側隣接地には旧河道が流れていたと想定できる。1号・2号石組に着岸する船はこの旧河道を航行する船と考えられる。

以上のことから、1・2号石組は菊池川旧河道を利用する小型川船の船着場であったと考えられ、石組やその周辺部は荷揚げや積み込みのための作業場である可能性が高い。

## 第7節 課題について

深川・北宮地区と隈府地区で確認調査、現地踏査などを行い、その成果をまとめたものが本報告書である。確認調査中や報告書作成過程、まとめの段階で未解明なことや今後に必要なことなどが明らかになった。これらについて、各拠点での活動時期に分けて述べる。

### (1) 深川・北宮時代について

#### 【菊池川旧河道左岸の確認】

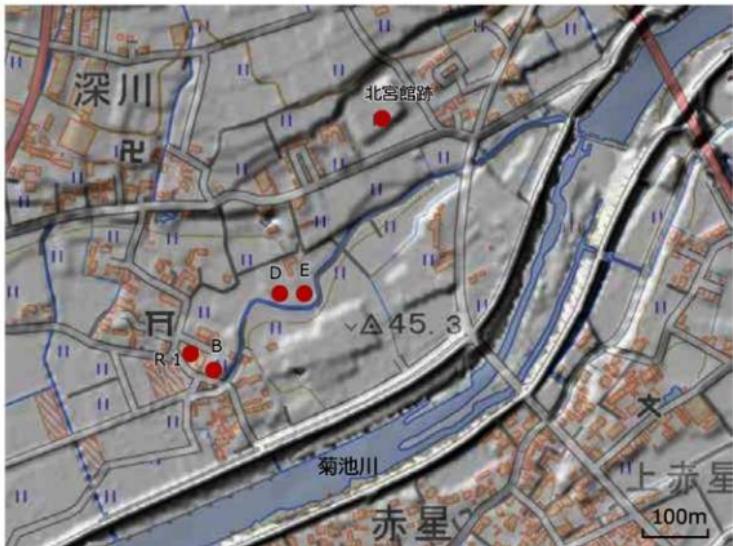
菊之池B遺跡の菊池川旧河道沿いに河川関連遺構を確認した。確認した遺構は菊池川旧河道の右岸（北側）であり、対岸である左岸（南側）の遺構は未確認である。旧河道の左岸については、確認調査を実施し、遺構の有無の確認、遺構の内容把握などが今後、必要と考える。左岸の場所を推定する資料として第150図の起伏図が参考となる。旧河道右岸の河川関連遺構（第150図R1・B・D・E）の対岸に高低差1m前後の高まりが旧河道右岸に並行した状態で帯状に見られる。この高まりは旧河道の川岸の地形が残っていると推定できる。

この推定範囲は国土地理院治水地形分類図の旧河道と一致している。遺構保存の観点から、まず、石組の有無を地中レーダー探査で確認する検討が必要であろう。地中レーダー探査での河川関連の石組遺構の確認ができない場合や石組の詳細内容把握の目的で掘削での確認調査を行うなどの計画的な実施が課題である。

#### 【北宮館跡（菊之城跡）堀跡の確認】

館跡の残存地形から、館跡の外周に堀跡が巡ると考えられる。堀跡推定地は水田であるため、掘削を伴う確認調査の実施が困難であった。条件が整い次第、確認調査を実施し、堀跡の内容を把握する必要がある。確認調査の内容は上記旧河道左岸の確認調査と同様に地中レーダー探査を前提に検討するのが望ましい。

#### 【北宮館跡（菊之城跡）と菊池川旧河道とのアクセス】



第150図 菊池川旧河道の左岸想定箇所の起伏図(国土地理院の標準地図と陰影起伏図を合成し、一部加工して作成)

館跡と菊池川旧河道との位置関係から、館跡の南側に旧河道との出入口や通路が存在すると考えられる。また、今回確認した船着場・荷揚場と考えられる遺構を確認した場所以外に北宮館跡（菊之城跡）専用の船着場・荷揚場が存在した可能性もある。今後の確認調査に期待したい。

#### 【集散地の町場の確認】

北宮館跡（菊之城跡）と北宮阿蘇神社の間に上市場・下市場の字名が残っている区画が存在する。国立歴史民俗博物館の最新の研究成果から、この場所で市が開催されたと仮定すると、市は定期的に開催されるので非日常的な空間として存在していたと考えられる。当時の人々が住み着く場所は市の周りであり、商人・職人などが住人となる町場が市の周囲に形成されている（国立歴史民俗博物館2022）。北宮館跡（菊之城跡）、北宮阿蘇神社の周辺に掘立柱建物跡などで構成される集落跡の確認が課題となる。菊之池A遺跡での発掘調査や確認調査では中世の建物跡・溝跡などや遺物が確認されている。北宮遺跡では中世の土師器や輸入陶磁器が表実されている。

このことから、集落跡の候補地として、菊池川旧河道の北側隣接地の菊之池A遺跡、菊池川北側隣接地の北宮遺跡が挙げられる。

#### (2) 隣府時代について

##### 【隣府地区の確認調査の充実】

県立菊池高校の校舎改築に伴って、隣府土井ノ外遺跡の発掘調査を実施し、建物跡・塁などの遺構を確認した。これ以外の主な確認調査は、熊本県県北広域本部の施設改修事業、菊池市ふるさと創生市民広場の再整備に伴って隣府城下遺跡で実施している。これらの確認調査で中世の塁跡やピットなどの遺構を確認した。現状では、中世の隣府地区の町並みを復元するには資料不足である。隣府地区は市街地化が進んでいるので、

建物の建て替えなどに伴う小規模な確認調査を継続的に行い、資料の蓄積が必要である。今後、長期的な視野に立った、粘り強い取り組みを行い、中世都市的景観の復元が可能な情報量を確保すべきと考える。

【守山城跡（菊之城跡）の時期と範囲の確認】

守山城跡については文献史料から検討は行っているが、考古学的な調査成果が殆どない状態である。後世の地形変化が広範囲に及んでいるが、原地形が残っている箇所の調査を行い、城跡に伴う遺構などの確認が必要である。さらに、城跡の範囲を明らかにするための確認調査も課題である。

## 参考・引用文献

- 安達裕之 1998 「日本の船 和船編」日本海事科学振興財团 船の科学館
- 石井謙治 1983 「図説和船史話」図説日本海軍史話叢書1 至誠堂
- 石井謙治 1995 「和船Ⅱ」ものと人間の文化史 法政大学出版局
- 稻葉繼陽 2022 「記念講演」「記録集「陣ノ内城跡」国史跡記念シンポジウム 甲佐の魅力を探る」甲佐町教育委員会
- 上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類」「貿易陶磁研究」No.2
- 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」「貿易陶磁研究」NO. 2
- 小野正敏 2003 「威信財としての貿易陶磁と場—戦国期東国を例に—」「戦国時代の考古学」高志書院
- 小野正敏 2022 「パネルディスカッション」「記録集「陣ノ内城跡」国史跡記念シンポジウム 甲佐の魅力を探る」甲佐町教育委員会
- 香川県教育委員会 2003 「村黒遺跡 積浦遺跡」
- 上高原 聰 2022 「概要報告」「記録集「陣ノ内城跡」国史跡記念シンポジウム 甲佐の魅力を探る」甲佐町教育委員会
- 川名 登 2013 「二 関東川船の支配と構造」「船鑑」船の科学館叢書7
- 木下尚子 2009 「13~14世紀海上貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究—中国福建省を中心に—」熊本大学文学部
- 菊池市 1986 「菊池市史」下巻
- 菊池市 2017 <https://da.library-kikuchi.jp/>
- 菊池市教育委員会 2012 「万太郎遺跡 森北院ノ馬場・追畠遺跡」菊池市文化財調査報告第6集
- 菊池市教育委員会 2017 「3 立石遺跡」「菊池市埋蔵文化財発掘調査報告書」菊池市文化財調査報告第9集
- 菊池市教育委員会 2020 「中世菊池一族関連遺跡群確認調査概要報告書」菊池市埋蔵文化財発掘調査報告第10集
- 菊池紳一 2019 「鎌倉幕府の交通政策（陸上交通）『日本交通史』（新装版）」吉川弘文館
- 九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の編年」—九州近世陶磁学会10周年記念—
- 熊本県教育委員会 1977 「蓮花寺跡・相良頼景館跡」熊本県文化財調査報告第22集
- 熊本県教育委員会 1989 「熊本県歴史の道調査—緑川水運—」熊本県文化財調査報告第107集
- 熊本県教育委員会 2012 「陶智城跡Ⅱ」熊本県文化財調査報告第276集
- 熊本県地質図編纂委員会 2008 「熊本県地質図（10万分の1）および同説明書」社団法人熊本県地質調査業協会
- 五味文彦 2021 「一遍聖絵の世界」吉川弘文館
- 甲佐町教育委員会 2012 「鶴ノ瀬塚・上揚往還遺跡文化財調査報告書」
- 甲佐町教育委員会 2020 「陣ノ内城跡—総括報告書—」甲佐町文化財報告第5集
- 国土地理院 ウエブサイト (<https://maps.gsi.go.jp/#14/32966591/130.803900/>) 治水地形分類図 更新版 (2007~2020年)
- 国立国会図書館デジタルコレクション 「国史大系第4巻」「日本三代実録巻第46」
- 国立国会図書館デジタルコレクション 「一遍聖絵」
- 国立国会図書館デジタルコレクション 「蒙古襲来合戦絵巻3」
- 国立歴史民俗博物館 2020 「中世益田現地調査成果概報」vol.3
- 国立歴史民俗博物館 2022 「企画展示 中世武士団一地域に生きた武家の領主—」

- 七城町 1991 「七城町誌」
- 七城町 1999 「ふるさと」七城町ふるさと写真集
- 島根県教育委員会 2020 埋蔵文化財センター「朝酌矢田Ⅱ遺跡現地説明会資料」[https://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/index.data/asakumi\\_gennsetusiryou\\_hppdf](https://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/index.data/asakumi_gennsetusiryou_hppdf)
- 島根県教育委員会 2021 「埋蔵文化財調査センター年報29」
- 申淑舟（しんしゅくしゅう）著・田中健夫訳注 1991 『海東諸国紀』岩波書店
- 田上勇一郎 2017 「中世國際貿易都市「博多」の調査成果」『専修大学古代東ユーラシア研究センター年報』第3号
- 多良木町史編纂会 1980 「多良木町史」
- 徳島県教育委員会 2017 「川西遺跡」徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第91集
- 永井孝宏 2016 「東国御家の地域開発—球磨川流域相良頼景館跡船着き場遺構—」『中世港町論の射程港町の現像：下』岩田書院
- 中山 圭 2011 「天草における中世の交流—天草の遺跡出土貿易陶磁から—」『周縁の文化交渉学シリーズ4』
- 中山 圭 2021 「菊池氏関連遺跡「隈府土井ノ外遺跡」の輸入陶磁器に関する研究」『菊池一族解體新章』卷之二 菊池市教育委員会 菊池文化研究所
- 中山 圭 2022 「隈府土井ノ外遺跡出土の土師器に関する研究」『菊池一族解體新章』卷之三 菊池市教育委員会 菊池文化研究所
- 中島恒次郎 1998 「12.九州北部」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 西田友宏 2018 「中世前期の石見国と益田氏」『石見の中世領主の盛衰と東アジア海陸世界』島根県古代文化センター研究論集第18集
- 乗岡 実 2005 「備前」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』
- 花岡興史 2013 「第3章 緑川の治水と洪水」『新甲佐町史』甲佐町史編纂委員会
- 服部英雄 1978a 「中世城館発掘—熊本県の場合を中心に—」『史学雑誌』87卷6号
- 服部英雄 1978b 「空から見た人吉庄・交通と新田開発」『史学雑誌』87卷8号
- 服部英雄 2012 『河原ノ者・非人・秀吉』山川出版社
- 服部英雄 2014 『蒙古襲来』山川出版社
- 服部英雄 2017 『蒙古襲来と神風』中公新書
- 服部英雄 2022 『しぐさ・表情 蒙古襲来絵図復原』水青文庫白描本・彩色本から一 海鳥社
- 堀川和夫・梅沢義信 1962 「古代鉄釘の冶金学的調査」『鉄と鋼』第48年（1962）第1号
- 本田彰男 1970 「肥後藩農業水利史—肥後藩農業水利施設の歴史的研究—」熊本県土地改良事業団体連合会
- 益田市教育委員会 2000 「中世今市船着場跡文化財調査報告書」
- 益田市教育委員会 2010 「沖手遺跡」
- 益田市教育委員会 2013 「中須東原遺跡」
- 益田市教育委員会 2015 「中世今市遺跡」
- 松井哲洋 2007 「川船の船図と工法(1)―日本の主要川船（高瀬船・櫓舟・鵜舟）―」千葉県立開宿城博物館研究報告第11号 千葉県立開宿城博物館
- 美濃口雅朗 1994 「熊本県における中世前期の土師器について」『中世土器の基礎研究X』日本中世土器研究会

- 持田 透 2019 「平安京在京二条四坊二丁町跡・烏丸丸太町遺跡」『アルケス発掘調査報告』1 合同会社  
アルケス
- 森山恒雄・村上晶子 2005 「第5章 室町・戦国期の国际津と海外交渉」『玉名市史通史稿上巻』
- 森田 勉 1982 「14~16世纪の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2
- 森本朝子 1994 「博多遺跡群の天目」『唐物天目—福建省建窑出土天目と日本伝世の天目一』茶道資料館
- 山内晋次 2016 「日宋貿易と「硫黄の道」」日本史リブレット75 山川出版社
- 山本信夫 2000 「大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編一」太宰府市教育委員会

第7表 遺物観察表

標号 No.	種類 T-オーレンシス	測量区 ゾーン	測量番号 ゾーン	各種	測量用 (12種)				構成	色調		測量 内面	測量 外面	備考		
					高さ mm	口径 mm	通徑 mm	溝幅 mm		内面	外面					
第10回	I	R1	2号右舷	土師器	三	2.7	11.4	8.5	良好	にごり青 7.5V9R/4	淡青 7.5V9R/6	細砂利少・量多	コナデ	ヨコナデ・固軋無 凹凸	内面側に青緑斑、外北側 に青苔化	
第12回	1	R1	砂2層	土師器	小瓶	1.1	8.2	6.2	良好	白	白	細砂利中量・量多	ヨコナデ	ヨコナデ・固軋無 凹凸		
	2	R1	砂2層	土師器	小瓶	1.3	8.0	6.4	良好	白	白	細砂利少・量多	ヨコナデ	ヨコナデ・固軋無 凹凸		
	3	R1	S001		(1.0)		4.2		良好	白	白	細砂利少・量多	ヨコナデ	ヨコナデ・固軋無 凹凸		
	4	R1	墨土	5001	土器	高さ:長 4.4cm 直径:1.1cm	最大幅 3.8cm (3g)	良好		明黄	明黄	細砂利少	ヨコナデ	ヨコナデ・固軋無 凹凸		
	5	R1	砂2層	土師器	井	2.4	11.4	7.4	良好	褐	7.5V9R/6	オレンジ色の細砂利	ヨコナデ	ヨコナデ・固軋無 凹凸		
	6	R1	砂2層	土師器	坪地部				良好	にごり青 7.5V9R/4	淡青 7.5V9R/6	細砂利少・量多	ヨコナデ	ヨコナデ・固軋無 凹凸		
	7	R1	1号右舷 (2層)	土師器	小瓶	0.8		7.2	良好	褐	7.5V9R/6	細砂利少・量多	ヨコナデ	ヨコナデ・固軋無 凹凸		
	8	R1	1号右舷 (2層)	土師器	大瓶				良好	褐	7.5V9R/6	細砂利少・量多	ヨコナデ	ヨコナデ・固軋無 凹凸	内面に部分的に青緑斑、外 面に青苔化する。内面側に 青苔斑(7.5V9R/4)	
	9	R1	1号右舷	土師器	(1.2)		6.8		良好	にごり青 7.5V9R/4	淡青 7.5V9R/6	細砂利少・量多	ヨコナデ	ヨコナデ・固軋無 凹凸		
	10	R1	1号右舷 (2層石垣)	土師器	大瓶	(1.2)	10.9		良好	褐	7.5V9R/6	細砂利少・量多	ヨコナデ	ヨコナデ・固軋無 凹凸		
	11	R1	V層	1号右舷	瓦質土器	瓶			良好	白	7.5V9R/1	細砂利少	ヨコナデ	ヨコナデ・固軋無 凹凸		
第13回	1	R1	亞層	土師器		2.0	8.4	5.8	良好	にごり青 7.5V9R/3	淡青 7.5V9R/2	細砂利・量多	ヨコナデ	ヨコナデ・固軋無 凹凸		
	2	R1	亞層	土師器		1.8	8.2	6.2	良好	にごり青 7.5V9R/3	淡青 7.5V9R/2	細砂利・量多	ヨコナデ	ヨコナデ・固軋無 凹凸	内面側指揮斑・底板状斑	
	3	R1	亞層	土師器		2.0	8.0	6.4	良好	にごり青 7.5V9R/3	淡青 7.5V9R/2	細砂利・量多	ヨコナデ	ヨコナデ・固軋無 凹凸	内面側指揮斑・底板状斑	
	4	R1	亞層	土師器	小瓶	1.5	6.6	5.2	良好	白	7.5V9R/5	細砂利少・量多	ヨコナデ	ヨコナデ・固軋無 凹凸		
	5	R1	亞層	土師器	小瓶	(1.0)	8.2		良好	にごり青 7.5V9R/3	淡青 7.5V9R/2	細砂利少・量多	ヨコナデ	ヨコナデ・固軋無 凹凸		
	6	R1	亞層	土師器	小瓶	(0.8)	6.0		良好	にごり青 7.5V9R/4	淡青 7.5V9R/4	細砂利少・量多	ヨコナデ	ヨコナデ・固軋無 凹凸		
	7	R1	亞層	土師器	小瓶	(0.6)	4.2		良好	にごり青 7.5V9R/3	淡青 7.5V9R/2	細砂利中量・量多	ヨコナデ	ヨコナデ・部分的 分離	ヨコナデ・固軋無 凹凸	
	8	R1	亞層	土師器	(1.0)		8.2		良好	にごり青 7.5V9R/4	淡青 7.5V9R/4	細砂利中量・量多	ヨコナデ	ヨコナデ・部分的 分離	ヨコナデ・固軋無 凹凸	
	9	R1	亞層	土師器	井	3.1	10.6	7.2	良好	淡青	淡青	細砂利少	ヨコナデ	ヨコナデ・固軋無 凹凸	内面がみに立ち上がる	
	10	R1	亞層	土師器	井	(2.0)	8.2		良好	淡青	淡青	細砂利少	ヨコナデ	ヨコナデ・固軋無 凹凸	内面がみに立ち上がる	
	11	R1	亞層	土師器	井	2.4	11.6	8.8	良好	褐	7.5V9R/6	細砂利少・量多	ヨコナデ	ヨコナデ・固軋無 凹凸	内面裏に赤茶色斜状帶の痕 跡あり	
	12	R1	亞層	土師器	井	(2.0)	8.0		良好	にごり青 7.5V9R/4	淡青 7.5V9R/4	細砂利少・量多	ヨコナデ	ヨコナデ・固軋無 凹凸		
	13	R1	亞層	瓦質土器	大瓶?				良好	灰	7.5V9R/1	細砂利中量	ヨコナデ	ヨコナデ	外面上文スタンプ	
	14	R1	亞層	瓦質土器	灰瓦?				良好	灰	5V9R/1	細砂利中量	ヨコナデ	ヨコナデ		
第14回	15	R1	亞層	瓦質土器	素面型				良好	灰	5V9R/1	細砂利多量	ヨコナデ	ヨコナデ	内面にスリ付ける。同一全体上 に複数のスリ付ける。(例)他の部分 にスリ付ける場合としない。	
	16	R1	亞層	砂岩	高さ:長 6.8mm 直径:4.0mm	最大幅 4.0mm	重量 0.15kg		良好	白	10W9T/1				粗粒風化あり(赤面)、田園風 景の外見で、他場所か 持ち込まれ。	
	17	R1	亞層	隕石	火山岩	最大長 23.9cm	最大幅 26.4cm	重量 17.0kg	良好	暗青	7.5V9T/1	粗粒風化	ヨコナデ	ヨコナデ	粗粒風化	
	1	R1	亞層	土師器	瓶				良好	白	7.5V9T/1	粗粒風化	ヨコナデ	ヨコナデ		
	2	R1	亞層	土師器	瓶				良好	オーピー灰 7.5V9T/3	オーピー灰 7.5V9T/2	白灰	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
	3	R1	北西T	亞層	同安達系 青磁				良好	オーピー灰 7.5V9T/2	オーピー灰 7.5V9T/1	白灰	ヨコナデ	ヨコナデ		
	4	R1	亞層	土師器					良好	オーピー灰 7.5V9T/1	オーピー灰 7.5V9T/1	白灰	ヨコナデ	ヨコナデ		
	5	R1	亞層	同安達系 青磁					良好	オーピー灰 7.5V9T/1	オーピー灰 7.5V9T/1	白灰	ヨコナデ	ヨコナデ	底部外側の物を落取る。底 部	
	6	R1	亞層	同安達系 青磁					良好	NB	NB	白	ヨコナデ	ヨコナデ		
	7	R1	S001						良好	にごり青 7.5V9T/2	淡青 7.5V9T/2	青	ヨコナデ	ヨコナデ		
	8	R1	砂1層	1号右舷	青瓦系 瓶				良好	灰	7.5V9T/3	オーピー灰 7.5V9T/2	白やや黒	ヨコナデ	ヨコナデ	
	9	R1	亞層	1号右舷	青瓦系 瓶				良好	7.5V9T/0	7.5V9T/1	白やや黒	ヨコナデ	ヨコナデ		
	10	R1	亞層	1号右舷	青瓦系 瓶				良好	オーピー灰 5V9T/4	オーピー灰 5V9T/4	白やや黒	ヨコナデ	ヨコナデ		
	11	R1	砂2層	白磁	瓶	(1.0)	8.8		良好	灰	7.5V9T/1	白	ヨコナデ	ヨコナデ	底部下半は露胎	
	12	R1	S001	同安達系 青磁	瓶	(高台 内寸2.2)			良好	オーピー灰 7.5V9T/1	オーピー灰 7.5V9T/1	青	ヨコナデ	ヨコナデ		
	13	R1	1号右舷 (2層)	白磁	瓶				良好	7.5V9T/0	7.5V9T/1	青	ヨコナデ	ヨコナデ		
	14	R1	1号右舷 (2層)	白磁	瓶				良好	オーピー灰 5V9T/4	オーピー灰 5V9T/4	青	ヨコナデ	ヨコナデ		
第15回	1	R1	亞層	1号右舷	白磁				良好	灰	25V7/2	白	ヨコナデ	ヨコナデ	五線より向東な口縫	
	2	R1	亞層	1号右舷	白磁				良好	白	25V7/2	白	ヨコナデ	ヨコナデ	五線より向東な口縫	
	3	R1	亞層	1号右舷	白磁				良好	白	25V7/2	白	ヨコナデ	ヨコナデ	五線より向東な口縫	
	4	R1	亞層	1号右舷	白磁				良好	白	25V7/2	白	ヨコナデ	ヨコナデ	五線より向東な口縫	
	5	R1	亞層	1号右舷	白磁				良好	灰	10W9T/2	白	ヨコナデ	ヨコナデ	五線より向東な口縫	
	6	R1	亞層	1号右舷	白磁				良好	白	10W9T/2	白	ヨコナデ	ヨコナデ	五線より向東な口縫	
	7	R1	亞層	1号右舷	白磁	(A.2)	21.0		良好	白	10W9T/2	白	ヨコナデ	ヨコナデ	五線より向東な口縫	
	8	R1	亞層	1号右舷	白磁				良好	白	10W9T/2	白	ヨコナデ	ヨコナデ	五線より向東な口縫	
	9	R2	底版	白磁	土師器	小瓶	(1.2)	8.0	良好	褐	7.5V9T/6	細砂利少・量多	ヨコナデ	ヨコナデ		
	10	R2	底版	白磁	土師器	小瓶	(1.2)	8.0	良好	褐	7.5V9T/6	細砂利少・量多	ヨコナデ	ヨコナデ		
第17回	1	R2	底版	白色土器	土師器				良好	灰	10W9T/1	細砂利多量	ヨコナデ	ヨコナデ	黑色土器 A	
	2	R2	底版	白色土器	土師器				良好	灰	10W9T/2	細砂利多量	ヨコナデ	ヨコナデ		
	3	R2	底版	白色土器	土師器				良好	灰	10W9T/2	細砂利多量	ヨコナデ	ヨコナデ		

渓流 No.	施設 名	調査区 Tマニシヤ	岸用	過橋名	番種	流量(m³/s)・水深(m)				色調		底面		備考		
						面積 cm²	口幅 cm	進深 cm	厚さ cm	底床	内面	外面	内面	外面		
4	R2-BK	V1層		土跡跡	小丘					良好	にごり有 7.5W/7.2	にごり有 7.5W/7.2	細粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	
5	R2-BK	V1層		土跡跡	小丘 or 斜面	(1.4)				良好	標	7.5W/6	7.5W/6	細粒中量・藻食量		
6	R2-BK	V1層		土跡跡	斜面	(3.3)		7.6		良好	にごり有 7.5W/7.2	にごり有 7.5W/7.2	細粒少・藻少	ヨコナデ	ヨコナデ	
7	R2-BK	V1層		土跡跡	斜面					良好	にごり有 7.5W/7.2	にごり有 7.5W/7.2	細粒少・藻少・藻食量	ヨコナデ	ヨコナデ	
8	R2-BK	V1層		土跡跡	小丘					良好	SV7W/6	SV7W/6	細粒少・藻少	ヨコナデ	ヨコナデ	
9	R2-BK	V1層		土跡跡	斜面					良好	にごり有 7.5W/7.2	にごり有 7.5W/7.2	細粒少・藻少	ヨコナデ	ヨコナデ	
10	R2-BK	V1層		土跡跡	斜面	(1.3)				良好	7.5W/7.6	7.5W/7.6	細粒少・藻少	ヨコナデ	ヨコナデ	
11	R2-C区	乱れ		土跡跡	小丘					良好	標	7.5W/6	7.5W/6	細粒少・藻量		
12	R2-C区	乱れ		土跡跡	斜面	(3.3)				良好	5W/1	5W/1	細粒少・中型砂少	高いヨコナデ	低いヨコナデ・ア 越走不規	
13	R2-C区	乱れ		土跡跡	大丘		11.0			良好	にごり有 7.5W/7.4	にごり有 7.5W/7.2	細粒中量・藻食量	ヨコナデ	ヨコナデ	
14	R2-EK	4層	5号右端 土跡跡	土跡跡	斜面					良好	にごり有 7.5W/7.2	にごり有 7.5W/7.2	細粒少	ヨコナデ	ヨコナデ	
15	R2-EK	4層	5号右端 土跡跡	土跡跡	斜面	小丘 5W/1				良好	7.5W/6	7.5W/6	細粒少	ヨコナデ	ヨコナデ	
16	R2-EK	4層	5号右端 土跡跡	土跡跡	斜面					良好	にごり有 7.5W/7.2	にごり有 7.5W/7.2	細粒少	ヨコナデ	ヨコナデ	
17	R2-EK	4層	5号右端 土跡跡	土跡跡	斜面					良好	にごり有 7.5W/7.2	にごり有 7.5W/7.2	細粒中量・藻食量	ヨコナデ	ヨコナデ	
18	R2-EK	4層	5号右端 土跡跡	土跡跡	斜面					良好	7.5W/6	7.5W/6	細粒少	ヨコナデ	ヨコナデ	
19	R2-EK	4層	5号右端 土跡跡	土跡跡	斜面					良好	にごり有 7.5W/7.2	にごり有 7.5W/7.2	細粒中量・藻食量	ヨコナデ	ヨコナデ	
20	R2-EK	4層	5号右端 土跡跡	土跡跡	斜面					良好	標	7.5W/7.6	7.5W/7.6	細粒少	ヨコナデ	ヨコナデ
21	R2-F区	1層		土跡跡	小丘	(1.3)				良好	SV7W/6	SV7W/6	細粒少・藻食量			
22	R2-F区	1層		土跡跡	斜面					良好	底質場 10W/1	底質場 10W/1	細粒少	ヨコナデ	ヨコナデ	
23	R2-F区	2層	河底石中 5号右端	土跡跡	斜面					良好	底質場 10W/1	底質場 10W/1	細粒少	田舎町售		
24	R2-F区	2層	河底石中 5号右端	土跡跡	斜面	(1.2)				良好	にごり有 7.5W/7.2	にごり有 7.5W/7.2	細粒少・藻少	ヨコナデ	ヨコナデ	
25	R2-F区	2層	河底石中 5号右端	土跡跡	斜面	(0.9)				良好	にごり有 7.5W/7.4	にごり有 7.5W/7.4	細粒少	ヨコナデ	ヨコナデ	
1	R2-BK	V1層	3号右端 土跡跡	斜面	(2.0)					良好	底質場 10W/1	底質場 10W/1	底質場	ヨコナデ	底質場	
2	R2-C区	乱れ	河底石中 5号右端	土跡跡	斜面	1層				良好	底質場 10W/1	底質場 10W/1	底質場	ヨコナデ	ヨコナデ	
3	R2-D区	I層	4号右端 土跡跡	新芝根	斜面					良好	オゾノフ 1.5W/1	オゾノフ 1.5W/1	底質	ヨコナデ	ヨコナデ	
4	R2-EK	東側	河底石中 5号右端	土跡跡	斜面					良好	底質場 10W/2	底質場 10W/2	底質	ヨコナデ	ヨコナデ	
5	R2-EK	5号右端 土跡跡	底質場 10W/1	土跡跡	斜面					良好	オゾノフ 1.5W/1	オゾノフ 1.5W/1	底質	ヨコナデ	ヨコナデ	
6	R2-EK	5号右端 土跡跡	底質場 10W/1	土跡跡	斜面					良好	オゾノフ 1.5W/2	オゾノフ 1.5W/2	底質	ヨコナデ	ヨコナデ	
7	R2-EK	5号右端 土跡跡	底質場 10W/1	土跡跡	斜面					良好	朝鮮風 1.5W/1	朝鮮風 1.5W/1	底質	ヨコナデ	ヨコナデ	
8	R2-F区	河底石中 5号右端	土跡跡	底質場 10W/1	斜面	(2.0)				良好	底質場 10W/2	底質場 10W/2	底質	ヨコナデ	ヨコナデ	
9	R2-F区	1層	白石	底V1層	(3.0)					良好	底V1層	底V1層	底質	ヨコナデ	ヨコナデ	
10	R2-F区	河底石中	底V1層	底V1層	斜面					良好	底V1層	底V1層	底質	ヨコナデ	ヨコナデ	
11	R2-F区	河底石中	底V1層	底V1層	斜面	(1.4)				良好	底V1層	底V1層	底質	ヨコナデ	ヨコナデ	
12	R2-F区	河底石中	底V1層	底V1層	斜面					良好	底V1層	底V1層	底質	ヨコナデ	ヨコナデ	
13	R2-F区	河底石中	底V1層	底V1層	斜面	(1.4)				良好	底V1層	底V1層	底質	ヨコナデ	ヨコナデ	
14	R2-F区	河底石中	底V1層	底V1層	斜面	(1.0)				良好	底V1層	底V1層	底質	ヨコナデ	ヨコナデ	
15	R2-F区	河底石中	底V1層	底V1層	斜面	(1.0)				良好	底V1層	底V1層	底質	ヨコナデ	ヨコナデ	
16	R2-F区	河底石中	底V1層	底V1層	斜面	(3.0)	(25)			良好	底V1層	底V1層	底質	ヨコナデ	ヨコナデ	
1	北安壁跡	当合層	土跡跡	斜面	3.2	(12.0)	10.1			良好	にごり有 7.5W/7.2	にごり有 7.5W/7.2	角・直・高・砂	ヨコナデ	ヨコナデ	
2	北安壁跡	当合層	土跡跡	斜面	3.25	12.0	10.0			良好	標	7.5W/6	7.5W/6	角・直・高・砂	ヨコナデ	ヨコナデ
3	北安壁跡	当合層	土跡跡	斜面	3.3	12.5	9.5			良好	にごり有 7.5W/7.2	にごり有 7.5W/7.2	角・直・高・砂	ヨコナデ	ヨコナデ	
4	北安壁跡	当合層	土跡跡	斜面	3.2	12.05	9.6			良好	標	7.5W/6	7.5W/6	角・直・高・砂	ヨコナデ	ヨコナデ
5	北安壁跡	当合層	土跡跡	斜面	3.2~3.4	14.6	(10.6~10.8)			良好	にごり有 7.5W/7.2	にごり有 7.5W/7.2	角・直・高・砂	ヨコナデ	ヨコナデ	
6	北安壁跡	当合層	土跡跡	斜面	3.2	14.0	10.0			良好	底V1層	底V1層	角・直・高・砂	ヨコナデ	ヨコナデ	
7	北安壁跡	当合層	土跡跡	斜面	3.4~3.8	13.8	(9.0)			良好	底V1層	底V1層	角・直・高・砂	ヨコナデ	ヨコナデ	
8	北安壁跡	当合層	土跡跡	斜面	3.65	12.4	8.65			良好	標	7.5W/6	7.5W/6	角・直・高・砂・砂	ヨコナデ	ヨコナデ
9	北安壁跡	当合層	土跡跡	斜面	3.45	12.3	8.6			良好	底V1層	底V1層	角・直・高・砂・砂	ヨコナデ	ヨコナデ	
10	北安壁跡	当合層	土跡跡	斜面	3.05	(13.2)	(10.0)			良好	底V1層	底V1層	角・直・高・砂・砂	ヨコナデ	ヨコナデ	
11	北安壁跡	当合層	土跡跡	斜面	3.1	—	8.6			良好	12.5W/6	12.5W/6	角・直・高・砂	ヨコナデ	ヨコナデ	
12	北安壁跡	当合層	土跡跡	斜面	3.7	—	9.4~9.9			良好	標	7.5W/6	7.5W/6	角・直・高・砂	ヨコナデ	ヨコナデ
13	北安壁跡	当合層	土跡跡	斜面	3.4	(12.5)	(9.3)			良好	7.5W/6	7.5W/6	角・直・高・砂	ヨコナデ	ヨコナデ	
14	北安壁跡	当合層	土跡跡	斜面	3.25	(12.2)	(9.0)			良好	標	7.5W/6	7.5W/6	角・直・高・砂	ヨコナデ	ヨコナデ
15	北安壁跡	当合層	土跡跡	斜面	2.1	—	8.6			良好	7.5W/7	7.5W/7	角・直・高・砂	ヨコナデ	ヨコナデ	
1	北安壁跡	当合層	土跡跡	斜面	2.7~2.9	(12.4)	(9.6)			良好	7.5W/6	7.5W/6	角・直・高・砂・砂	ヨコナデ	ヨコナデ	

碑誌 No.	施設 名	調査区 Tマッシュン	用件	造営年	基準	法度(引)・法度元		法度	色調		床面 内面	床面 外面	備考
						高さ cm	口幅 cm		内面	外面			
2	北斎跡 17	包合層	土師器	坪	3.0	(12.4)	(9.2)	良	淡黄青 1097/3	淡黄青 1097/3	角・茶・白・赤・粉	白ナデ・白ナデ	淡黄青
3	北斎跡 17	包合層	土師器	坪	2.1~ 3.5	(11.8)	(7.1)	良	■	■	白・白・白・粉	白ナデ・白ナデ	淡黄青、内面スス付
4	北斎跡 17	包合層	土師器	坪	3.2	(11.6)	(8.3)	良	に淡い黄 1097/4	に淡い黄 1097/4	白・白・白・粉	白ナデ・白ナデ・ ナシ・ナシ	淡黄青、内面スス付
5	北斎跡 17	包合層	土師器	坪	3.3	(11.1)	(8.0)	良	に淡い黄 1097/4	に淡い黄 1097/4	角・茶・白・粉・粉	白ナデ・白ナデ	内面淡久又村番
6	北斎跡 17	包合層	土師器	坪	3.1~ 2.4	(11.1)	(8.0)	良	■	■	角・茶・白・粉・粉	白ナデ・白ナデ	淡黄青、内面スス付
7	北斎跡 17	包合層	土師器	坪	2.2~ 3.0	(10.8)	(8.0)	良	■	■	角・茶・白・粉・粉	白ナデ・白ナデ	淡黄青、内面スス付
8	北斎跡 17	包合層	土師器	坪	2.7	(10.0)	(8.0)	良	■	■	角・茶・白・粉・粉	白ナデ・白ナデ	淡黄青、内面スス付
9	北斎跡 17	包合層	土師器	坪	3.7	(11.0)	(8.0)	良	に淡い黄 1097/4	に淡い黄 1097/4	角・茶・白・粉	白ナデ・白ナデ	淡黄青伏塗底
10	北斎跡 17	包合層	土師器	坪	2.8~ 2.9	(10.0)	(8.0)	良	■	■	角・茶・白・白・粉	白ナデ・白ナデ・ ナシ	淡黄青
11	北斎跡 17	包合層	土師器	坪	2.8~ 3.4	(10.5)	(11.9)	良	に淡い黄 1097/4	に淡い黄 1097/4	角・茶・白・白・粉	白ナデ・白ナデ	淡黄青
12	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.6	(9.5)	(7.5)	良	に淡い黄 1097/4	に淡い黄 1097/4	角・茶・白・白・粉	白ナデ・白ナデ	淡黄青、内面スス付
13	北斎跡 17	包合層	土師器	坪	2.2~ 2.4	(10.5)	(8.0)	良	■	■	角・茶・白・白・粉	白ナデ・白ナデ	淡黄青伏塗底
14	北斎跡 17	包合層	土師器	坪	1.7	(10.0)	(8.0)	良	■	■	角・茶・白・白・粉	白ナデ・白ナデ	淡黄青、内面スス付
15	北斎跡 17	包合層	土師器	坪	2.8~ 3.1	(10.2)	(10.0)	良	■	■	角・茶・白・白	白ナデ・白ナデ	淡黄青、内面スス付
16	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.1	(9.4)	(6.0)	良	に淡い黄 1097/4	に淡い黄 1097/4	角・茶・白・白・粉	白ナデ・白ナデ	淡黄青
17	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.1	(9.2)	(6.0)	良	に淡い黄 1097/4	に淡い黄 1097/4	角・茶・白・白・粉	白ナデ・白ナデ	淡黄青、内面スス付
18	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.2	(9.2)	(6.0)	良	に淡い黄 1097/4	に淡い黄 1097/4	角・茶・白・白・粉	白ナデ・白ナデ	淡黄青伏塗底
19	北斎跡 17	包合層	土師器 (古器)	小皿	1.3	(9.1)	(7.2)	良	■	■	角・茶・白・白・粉	白ナデ・白ナデ	内面に黒物
20	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.1	8.7	8.7	良	に淡い黄 1097/3	に淡い黄 1097/3	角・茶・白	白ナデ・白ナデ	淡黄青伏塗底
21	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.3	8.5	8.5	良	に淡い黄 1097/4	に淡い黄 1097/4	角・茶・白	白ナデ・白ナデ	淡黄青
22	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.6	8.6	7.4	良	■	■	角・茶・白・白	白ナデ・白ナデ	略太い淡黄青底、通部穿孔ナ
23	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.8	(8.0)	(6.4)	良	■	■	角・茶・白・白・粉	白ナデ・白ナデ	淡黄青伏塗底、外側淡久又
1	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.9	(7.4)	(6.4)	良	に淡い黄 1097/4	に淡い黄 1097/4	角・茶・白・白・粉	白ナデ・白ナデ	略太い淡黄青底、内面スス付
2	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.9~ 2.0	(7.5)	(6.4)	良	に淡い黄 1097/4	に淡い黄 1097/4	角・茶・白・白・粉	白ナデ・白ナデ	淡黄青底、内面スス付
3	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.8	(8.6)	(6.5)	良	■	■	角・茶・白・白	白ナデ・白ナデ	淡黄青
4	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.2~ 1.3	(5.0)	(6.0)	良	に淡い黄 1097/4	に淡い黄 1097/4	角・茶・白	白ナデ・白ナデ	淡黄青、内面スス付
5	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.3	(5.5)	(6.0)	良	に淡い黄 1097/4	に淡い黄 1097/4	角・茶・白・白・粉	白ナデ・白ナデ	淡黄青底、底面に薄い黒物付
6	北斎跡 17	包合層	土師器 (古器)	小皿	1.2	(8.4)	(6.4)	良	に淡い黄 1097/4	に淡い黄 1097/4	角・茶・白・白・粉	白ナデ・白ナデ	淡黄青底、底面に薄い黒物付
7	北斎跡 17	包合層	土師器	坪	1.2	(8.4)	(7.2)	良	淡黄青 1097/3	に淡い黄 1097/4	角・茶・白・白・粉	白ナデ・白ナデ	略太い淡黄青底、内面スス付
8	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.5	(8.0)	(7.0)	良	■	■	角・茶・白・白	白ナデ・白ナデ	淡黄青底、内面スス付
9	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.5	(8.0)	(6.5)	良	■	■	角・茶・白・白	白ナデ・白ナデ	やがみがほしい
10	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.5~ 1.6	(8.2)	(6.0)	良	に淡い黄 1097/4	に淡い黄 1097/4	角・茶・白・白	白ナデ・白ナデ	淡黄青底、底面に薄い黒物付
11	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.4~ 1.5	(8.2)	(7.0)	良	に淡い黄 1097/4	に淡い黄 1097/4	角・茶・白・白・粉	白ナデ・白ナデ	淡黄青底、底面に薄い黒物付
12	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.5	8.2	6.4	良	■	■	角・茶・白・白	白ナデ・白ナデ	淡黄青底伏塗底
13	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.4	8.2	6.2	良	■	■	角・茶・白・白	白ナデ・白ナデ	淡黄青底、底面に薄い黒物付
14	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.7	8.2	5.8	良	■	■	角・茶・白・白	白ナデ・白ナデ	淡黄青底伏塗底、やがみがほしい
15	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.5~ 1.6	(8.1)	(7.0)	良	に淡い黄 1097/4	に淡い黄 1097/4	角・茶・白・白・粉	白ナデ・白ナデ	内面淡久又付
16	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.65	8.1	6.7	良	■	■	角・茶・白・白	白ナデ・白ナデ	略太い淡黄青底
17	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.4	(8.17)	(6.0)	良	に淡い黄 1097/4	に淡い黄 1097/4	角・茶・白・白・粉	白ナデ・白ナデ	略太い淡黄青底
18	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.85	8.1	6.5	良	■	■	角・茶・白・白	白ナデ・白ナデ	淡黄青底、内面スス付
19	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.2~ 1.3	(8.0)	(7.0)	良	■	■	角・茶・白・白	白ナデ・白ナデ	淡黄青底、2次被覆ア
20	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.0	(7.0)	(6.3)	良	淡黄青 1097/2	に淡い黄 1097/2	角・茶・白・白・粉	白ナデ・白ナデ	淡黄青底伏塗底
21	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.3	(7.8)	(6.0)	良	に淡い黄 1097/2	に淡い黄 1097/2	角・茶・白・白・粉	白ナデ・白ナデ	淡黄青底伏塗底
22	北斎跡 17	包合層	土師器	小皿	1.65	7.6	6.25	良	■	■	角・茶・白・白	白ナデ・白ナデ	略太い淡黄青底
23	北斎跡 17	包合層	白磁	白磁	5.2	(6.0)	-	良好	白磁	白磁	白	白	白
24	北斎跡 17	包合層	青磁	青磁	8.0	(6.0)	5.3	良好	白磁	白磁	白	白	白
25	北斎跡 17	包合層	青磁	青磁	5.0	-	-	良好	白磁	白磁	白	白	白
26	北斎跡 17	包合層	青磁 (小皿)	青磁 (小皿)	-	-	-	良好	白磁	白磁	白	白	白
27	北斎跡 17	包合層	白磁	白磁	4.4	-	-	良好	白磁	白磁	白	白	白
28	北斎跡 17	包合層	青磁	青磁	5.0	-	-	良好	白磁	白磁	白	白	白
29	北斎跡 17	包合層	青磁	青磁	2.4	-	-	良好	白磁	白磁	白	白	白
30	北斎跡 17	包合層	直造土	直造土	2.2	(10.0)	4.3	良	■	■	角・茶	11世紀・平安後 12世紀・鎌倉後	ナ・ヘラケズ







測定番号	測定No.	測定区画	測定用具	測定名	基準	測定用具(注)は標準				色調		粒度	形状	備考
						面積 cm <sup>2</sup>	口径 cm	直径 cm	厚さ cm	内面	外面			
4	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	小底	1.7	8.0	5.8	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・ナ コナデ・田舎角	底盤状況正常
5	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	小底	1.6	7.0	5.2	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・コナデ・田舎角	底盤状況正常
6	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	小底	1.3	7.6	7.6	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒中 量	コナデ	田舎角
7	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	小底	1.6	8.4	7.2	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒中 量・葉物量	コナデ・田舎角	内面付近強化・底盤状況正常
8	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	小底	1.9	7.9	5.2	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	グリ・コナデ コナデ・田舎角	内面付近強化・底盤状況正常
9	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	小底	1.5	8.0	6.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ	底盤状況正常
10	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	小底	1.4	8.4	7.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量	コナデ・田舎角	底盤状況正常
11	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	小底	1.1~ 1.5	8.4	7.4	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
12	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	小底	1.6~ 1.5	7.6	6.6	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
13	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	小底	1.7	8.8	7.4	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
14	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	小底	1.6	8.0	6.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
15	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	底	1.5	8.0	6.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・田舎角	内面付近強化・底盤状況正常
16	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	底	2.9	11.4	8.4	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
17	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	底	(2.7)	12.2	8.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
18	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	底	(2.5)	12.0	8.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
19	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	底	3.0	13.0	7.6	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
20	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	底	(0.6)	7.6	7.6	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
21	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	底	(2.2)	8.0	6.0	良好	内定形・地盤	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
22	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	底	(0.6)	8.0	6.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
23	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	底	(3.7)	9.8	6.6	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・中粒砂	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
24	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	底	2.8	12.4	8.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
25	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	底	2.9	14.0	10.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
26	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	底	(3.4)	10.0	10.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
27	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	底	2.2	14.2	11.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
28	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	底	(3.2)	9.0	8.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
1	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	小底	1.7	7.2	5.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・中粒砂	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
2	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	小底	1.5	8.4	7.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
3	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	小底	1.6	7.8	7.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
4	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	小底	1.2~ 2.9	7.6	5.8	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
5	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	小底	2.0	9.4	7.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底砂粒少 量・葉物量	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
6	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	底	2.9	12.2	11.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	細砂粒少 量・葉物量	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
7	北富隈跡	R2 ST	V面	土壌層	底	2.4	11.6	8.2	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底砂粒少 量・葉物量	コナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
8	北富隈跡	R2 ST	V面	瓦砾層	底	(12.1)	12.6	8.0	良好	N/A	N/A	細砂粒少 量	コナデ	外側へうき
1	田崎下 谷跡	土	V面	土壌層	(小底)	1.75	18.6	(4.0)	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底砂粒少 量・葉物量	田舎ナデ・ナ 田舎ナデ・ナ	底盤付近強化
2	田崎下 谷跡	1T	透土	清掃	土壌層	底	1.5~	10.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底砂粒少 量・葉物量	田舎ナデ・ナ	外側ススキ付帯
3	田崎下 谷跡	1T	透土	清掃	土壌層	底	1.2	10.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底砂粒少 量・葉物量	田舎ナデ	底盤付近強化
4	田崎下 谷跡	1T	透土	清掃	土壌層	底	1.7	(1.0)	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底砂粒少 量・葉物量	田舎ナデ・コナデ 田舎ナデ・田舎角	底盤付近強化・底盤状況正常
5	田崎下 谷跡	2T	透土	作土上 の泥	土壌層	底	1.5	(0.6)	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底砂粒少 量・葉物量	田舎ナデ	底盤付近強化
6	田崎下 谷跡	2T	透土	作土上 の泥	土壌層	底	2.3	10.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底砂粒少 量・葉物量	田舎ナデ	外側ススキ付帯
1	田崎下 谷跡	1T	透土	清掃	土壠	底	0.25	10.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底砂粒少 量・葉物量	ナデ・ハケツ	底盤付近強化・底盤状況正常
2	田崎下 谷跡	6T	①透	透土	清掃	土壠	(2.0)	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底砂粒少 量・葉物量	ナデ・田舎ナデ	底盤付近強化	
3	田崎下 谷跡	9T	透土	透土	土壠	底	1.2	(0.8)	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底砂粒少 量・葉物量	ナデ・田舎ナデ	底盤付近強化
4	田崎下 谷跡	9T	透土	透土	土壠	底	1.65	(0.6)	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底砂粒少 量・葉物量	田舎ナデ・田舎角	底盤付近強化
5	田崎下 谷跡	27	透土	透土	土壠	底	1.5	(0.6)	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底砂粒少 量・葉物量	田舎ナデ	底盤付近強化
6	田崎下 谷跡	27	透土	透土	土壠	底	2.3	10.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底砂粒少 量・葉物量	田舎ナデ	底盤付近強化
1	田崎下 谷跡	1T	透土	清掃	土壠	底	0.25	10.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底砂粒少 量・葉物量	ナデ・ハケツ	底盤付近強化・底盤状況正常
2	田崎下 谷跡	6T	①透	透土	清掃	土壠	(2.0)	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底砂粒少 量・葉物量	ナデ・田舎ナデ	底盤付近強化	
3	田崎下 谷跡	9T	透土	透土	土壠	底	1.2	(0.8)	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底砂粒少 量・葉物量	ナデ・田舎ナデ	底盤付近強化
4	田崎下 谷跡	9T	透土	透土	土壠	底	1.65	(0.6)	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底砂粒少 量・葉物量	田舎ナデ・田舎角	底盤付近強化
5	田崎下 谷跡	27	透土	透土	土壠	底	2.3	10.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底砂粒少 量・葉物量	田舎ナデ	底盤付近強化
1	立石跡	地面上	セッキ	清掃	瓦砾土	底	0.25	10.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底砂粒少 量・葉物量	ナデ・ナ	底盤付近強化
2	立石跡	土壠土	瓦砾土	清掃	瓦砾土	底	0.4	10.0	良好	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底質 3.5Wt% / 7.5Wt%	底砂粒少 量・葉物量	ナデ・ナ	底盤付近強化

第8表 領府土井ノ外遺跡遺物観察表

種別 No.	用番 No.	遺跡名	調査区	府番	遺構名	番種	法量(く)寸法(厘米)			構成	色調		測量		備考
							高さ cm	口幅 cm	底幅 cm		内面	外面	内面	外面	
第1回	1	領府土井ノ外遺跡	1区	SE.1	土壁構	井	2.9	10.6	6.4	良好	壁 SYR1/8	壁 SYR1/8	良・黒・砂利	ナデ、回転ナデ SYR1/6	口縁にスス付有
	1	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.7	7.0	5.4	良好	土壁構 SYR1/8	土壁構 SYR1/8	白・黒・石	回転ナデ、角 付ナデ	
	2	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.7	7.1	5.3	良好	土壁構 SYR1/4	土壁構 SYR1/4	白・赤・黒	回転ナデ SYR1/6	
	3	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.7	6.6	4.7	良好	土壁構 SYR1/8	土壁構 SYR1/8	白・黒	回転ナデ SYR1/6	遺跡に指揮圧痕
	4	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.8	6.9	4.5	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒	回転ナデ SYR1/6	
	5	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	2.0	6.9	4.6	良好	土壁構 SYR1/4	土壁構 SYR1/4	白・黒	回転ナデ SYR1/6	施設のひび割れは内面に見 出される。
	6	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.8	6.6	5.0	良好	土壁構 SYR1/8	土壁構 SYR1/8	白	回転ナデ SYR1/6	
	7	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.5	7.0	5.5	良好	土壁構 SYR1/4	土壁構 SYR1/4	白・石	回転ナデ SYR1/6	遺跡に指揮圧痕
	8	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.7	6.5	5.3	良好	土壁構 SYR1/4	土壁構 SYR1/4	白・赤・黒	回転ナデ SYR1/6	遺跡に大きなひび割れ がある。
	9	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.7	6.5	4.7	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒	回転ナデ SYR1/6	反復優光
	10	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.7	7.0	5.4	良好	土壁構 SYR1/8	土壁構 SYR1/8	白・黒	回転ナデ SYR1/6	内面中央突出
	11	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.9	6.7	5.1	良好	土壁構 SYR1/4	土壁構 SYR1/4	白・黒	回転ナデ SYR1/6	
	12	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.8	7.2	6.5	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白	回転ナデ SYR1/6	
	13	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.8	6.9	5.2	良好	土壁構 SYR1/4	土壁構 SYR1/4	白・黒・石	回転ナデ SYR1/6	遺跡に指揮圧痕
	14	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.7	6.6	5.2	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒・石	回転ナデ SYR1/6	施設に指揮圧痕 がある。
	15	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.7	6.7	5.3	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒	回転ナデ SYR1/6	指揮圧痕
	16	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.7	7.1	6.0	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白	回転ナデ SYR1/6	遺跡に指揮圧痕
	17	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.4	6.5	4.8	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒・石	回転ナデ SYR1/6	
	18	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.8	7.4	5.4	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・石	回転ナデ SYR1/6	施設に指揮圧痕
	19	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.6	7.4	5.3	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒・石	回転ナデ SYR1/6	施設内面・外壁が突出
	20	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.7	6.8	5.2	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒	回転ナデ SYR1/6	
	21	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.8	6.6	4.6	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒	回転ナデ SYR1/6	
	22	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.9	(7.2)	5.2	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白	回転ナデ SYR1/6	
	23	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.7	6.6	5.2	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒・石	回転ナデ SYR1/6	施設・内面中央に指揮圧痕
	24	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	2.0	6.9	5.1	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白	回転ナデ SYR1/6	遺跡に指揮圧痕
	25	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.5	6.6	5.5	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白	回転ナデ SYR1/6	
	26	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.6	6.6	5.6	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白	回転ナデ SYR1/6	
	27	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.8	6.7	4.8	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒	回転ナデ SYR1/6	
	28	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.8	7.1	5.5	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白	回転ナデ SYR1/6	施設に指揮圧痕
	29	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.8	7.3	5.6	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒・石	回転ナデ SYR1/6	施設に指揮圧痕
	30	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.5	6.8	4.8	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白	回転ナデ SYR1/6	
	31	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.6	17.3	5.2	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒・石	回転ナデ SYR1/6	
	32	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.9	7.2	5.6	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒	回転ナデ SYR1/6	施設に指揮圧痕。やつぐ が目立つ。
	33	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	1.6	7.4	6.1	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒	回転ナデ SYR1/6	施設の跡が非常に深い。
	34	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	2.6	11.2	6.2	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白	回転ナデ SYR1/6	施設の跡が非常に深い。 ナデの1単位は2倍
	35	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	2.8	10.4	6.5	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒・石	回転ナデ SYR1/6	
	36	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	3.1	10.7	6.4	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白	回転ナデ SYR1/6	施設に指揮圧痕
	37	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	2.7	10.4	6.1	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒・石	回転ナデ SYR1/6	
	38	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	2.7	9.7	5.5	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒	回転ナデ SYR1/6	一間にスス付有
	39	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	2.7	10.0	5.1	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒・石	回転ナデ SYR1/6	
	40	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	2.5	10.2	5.7	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒・砂利・石	回転ナデ SYR1/6	施設に指揮圧痕
	41	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	2.5	9.9	5.9	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒	回転ナデ SYR1/6	
	42	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	3.0	9.9	5.4	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒	回転ナデ SYR1/6	
	43	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	2.8	11.1	6.1	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒	回転ナデ SYR1/6	施設に指揮圧痕。内面に指 揮圧痕。
	44	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	2.3	11.0	6.9	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒	回転ナデ SYR1/6	施設に指揮圧痕。
	45	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	2.8	10.7	5.8	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒・石	回転ナデ SYR1/6	
	46	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	2.6	10.8	6.1	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒・石	回転ナデ SYR1/6	
	47	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	2.7	10.1	5.5	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒	回転ナデ SYR1/6	内面に指揮圧痕。つりが つりが付有
	48	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	2.7	10.4	5.6	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒	回転ナデ SYR1/6	
	49	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	2.6	10.1	5.5	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒	回転ナデ SYR1/6	
	50	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	2.5	10.0	6.0	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒	回転ナデ SYR1/6	施設に指揮圧痕
	51	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	2.3	10.4	5.3	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白	回転ナデ SYR1/6	
	52	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	2.9	10.1	5.5	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白	回転ナデ SYR1/6	
	53	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	2.3	10.1	5.6	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	白・黒	回転ナデ SYR1/6	口縁部が大きめ外溝
	54	領府土井ノ外遺跡	1区	SKB	土壁構	井	2.6	10.2	6.3	良好	土壁構 SYR1/6	土壁構 SYR1/6	ナデ	回転ナデ SYR1/6	口縁部が大きめ外溝。施設に つりが付有

序番 No.	用語 名	直訳名	説明	直訳名	基種	法公示< 3D 像復元			色調		内面	外面	説明	参考			
						構成			内面		外面						
						高 cm	口 径 cm	底 径 cm									
55	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK2 土壁板	坪	2.7 100 52	良好	緑	7.5YR7/6	白・黒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤・内面のつりがね構・ 窓枠・外壁に取付柱、内面に有 り					
56	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK3 土壁板	坪	2.8 103 58	良好	7.5YR6-6	7.5YR7/6	白・黒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤・外壁に取付柱、内面に有 り					
57	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK2 土壁板	坪	2.9 110 70	良好	7.5YR6-6	7.5YR7/6	角・黒・赤緑	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤・外壁					
58	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK3 土壁板	坪	2.7 101 63	良好	7.5YR7-6	7.5YR7/6	白	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤・外壁					
59	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK3 土壁板	坪	2.6 101 540	良好	緑	7.5YR7/6	白・黒・石	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤・外壁					
60	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK3 土壁板	坪	2.4 104 62	良好	良好	7.5YR7/6	白・黒・石	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤・外壁					
61	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK2 土壁板	坪	2.7 (101) 58	良好	にS-L-青緑 10YR7/4	7.5YR7/6	白	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤・内面に縦溝あり、外壁に有 り					
62	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK3 土壁板	坪	2.5 107 53	良好	天井板 7.5YR7-6	7.5YR7/6	沙粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤・外壁					
63	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK3 土壁板	坪	2.3 (106) 88	良好	緑	7.5YR7/6	沙粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤・外壁					
64	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK3 土壁板	坪	2.6 110 62	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	沙粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤・外壁					
65	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK2 土壁板	坪	3.0 102 62	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	角・黒・赤緑	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤に取付柱					
66	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK3 土壁板	坪	2.7 102 53	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	沙粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤・外壁					
67	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK2 土壁板	坪	2.8 102 53	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	角・黒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤の内面・外面に剥離・ 脱落に取付柱					
68	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK3 土壁板	坪	3.0 (101) 82	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	美・緑・沙粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤・外壁					
69	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK3 土壁板	坪	2.4 110 78	良好	にS-L-青 10YR7/4	7.5YR7/6	白・黒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤の落込みが多い					
1	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	1.5 12 54	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	沙粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
2	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	1.6 44 43	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	沙粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
3	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	1.6 74 57	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	沙粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤から底盤にかけてアリの ように無い					
4	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	1.9 78 60	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	沙粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
5	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	1.7 70 52	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	沙粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤にスス付着					
6	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	1.7 72 52	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	沙粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
7	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	1.8 (68) 51	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	角・黒・赤・黄 5YR7/8	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
8	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	1.7 71 54	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	沙粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
9	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	1.8 57 57	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	沙粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤に落込みあり					
10	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	1.7 72 56	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	沙粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤に落込みあり					
11	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	1.8 72 54	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	沙粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
12	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	1.8 72 54	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	沙粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
13	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	1.4 71 52	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	白	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
14	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	1.8 72 54	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	沙粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
15	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	1.7 77 53	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	白	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤に落込み					
16	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	1.7 78 51	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	沙粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤中央と外側に落込み					
17	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	1.6 (65) 54	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	角・黒・赤・黄 5YR7/8	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
18	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	1.6 74 53	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	沙粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
19	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	1.8 65 53	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	白・黒・黒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
20	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	2.3 77 51	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	沙粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤の一部に土被り落込み 付着した可動性の壁					
21	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	1.9 71 55	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	白・黒・砂粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤に落込み					
22	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK3 土壁板	坪	1.8 73 51	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	白・黒・黒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
23	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK3 土壁板	坪	1.6 (64) 51	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	角・黒・赤・黄 5YR7/8	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤に落込み					
24	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	坪	2.9 107 59	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	白・黒・黄	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
25	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	坪	2.7 110 66	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	沙粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤に落込み・全体に入 り					
26	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK3 土壁板	坪	2.8 (104) 64	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	角・黒・黄	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤・底盤					
27	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK3 土壁板	坪	2.7 (112) 60	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	白・黒・黄	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤に落込みがある					
28	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK3 土壁板	坪	2.7 105 67	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	角・黒・白	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
29	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK3 土壁板	坪	2.8 103 64	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	白・黒・黄	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
30	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	2.7 109 61	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	白	圓転ナデ	凹凸ナデ	北端に落込み					
31	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 土壁板	壁	2.3 112 63	良好	にS-L-青 10YR7/4	7.5YR7/6	沙粒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤に落込み					
32	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK3 土壁板	坪	2.8 106 65	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	白・黒・赤	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
33	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK3 土壁板	坪	2.8 104 63	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	白・黒・赤	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
34	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK3 土壁板	坪	2.8 (110) 60	良好	にS-L-青 10YR7/4	7.5YR7/6	白・黒	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
35	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK3 土壁板	坪	2.8 110 63	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	白・黒・赤	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
36	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK3 土壁板	坪	2.9 110 57	不良	にS-L-青 10YR7/4	7.5YR7/6	白	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
37	地方政府 ノ外壁部材	1区	SK3 土壁板	坪	3.0 104 63	良好	7.5YR7/6	7.5YR7/6	白・黒・赤・黄	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤					
38	地方政府 ノ外壁部材	1区	埋1層 SK3 青磚	壁	2.7~	78	良好	10YR7/1	白	圓転ナデ	凹凸ナデ	地盤や薄い					

第9表 北宮遺跡表採遺物觀察表

序号 No.	用紙 No.	器種 Category	法量(容) / 深度 cm / cm	口徑 cm	構成 Material	色調 Color		地土 Soil	調査 Survey	備考 Remarks			
						内面 Interior							
						内面 Interior	外面 Exterior						
第10回	1	網	目蓋高島 蓋板	(2.3)	5	良好 S97/1	オリーブ灰 5GYR-1	白色細粒少量含む	粘粒	粘粒	表面に墨文、作成初期物。高台付帯を斜めに通過する。		
	2	鐵錫	瓦質土器			良好 S97/1	S9YR-1	細砂粒多量 茶・金黃			四角形単位		
	3	小皿	土器器	(1.1)	8.4	良好 7SYR7-6	7SYR7-6	細砂粒・白色細粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ・粘粒あ切			
	4	坪	土器器	(2.0)		良好 7SYR7-6	7SYR7-6	細砂粒・赤茶量	ヨコナデ	ヨコナデ・粘粒&赤			
	5	坪	土器器	(1.5)		良好 7SYR7-6	7SYR7-6	にごり・褐色 7SYR7-6	ヨコナデ	ヨコナデ・粘粒&切			
	6	鐵錫	瓦質土器	(2.7)		良好 S9YR-1	S9YR-1	細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	多様4年 淡い茶		
	7	鐵錫	瓦質土器	(4.8)	(11.4)	良好 S9YR-1	S9YR-1	白色細粒・中空粒 白色細粒多量	粘粒	粘粒	ヨコナデ		
	8	鐵錫	瓦質土器	(3.2)		良好 S9YR-1	S9YR-1	白色細粒多量、やや太さ の砂粒混在	粘粒	ヨコナデ	2単位 単で明確多量		
	9	陶器				良好 2SYR-2	2SYR-2	白色細粒 2SYR-2	粘粒	粘粒			
	10	鐵錫高島 蓋板		(2.7)		良好 7SYR7-6	7SYR7-6	白色細粒・褐色少量	粘粒	粘粒			
第11回	11	鐵錫	蓋付	(1.3)		良好 S9YR7-1	S9YR7-1	白色細粒・褐色少量	粘粒	粘粒	表面に茶		
	12	鐵錫	瓦質土器	(3.2)	6.2	良好 7SYR7-6	7SYR7-6	白色細粒多量	粘粒	粘粒	見込みの軸を既に引き取る		
	1	大型鉢	臼桶	(2.9)	17.6	やや良 S9YR-1	良好 7SYR7-3	やや白・白色細粒 黑色細粒少量	粘粒	粘粒	内面のみ褐色少量、全体の細入 れ・一粒粒の白茶、直付部付側約1/3		
	2	鐵錫	瓦質土器			良好 7SYR7-6	7SYR7-6	白色細粒 7SYR7-6	粘粒	粘粒	外観表面日本 内面著者の先端で押した点線文		
	3	坪	土器器	(1.1)		良好 7SYR7-6	7SYR7-6	細砂粒少量 茶・赤茶量	ヨコナデ・粘粒&切				
	4	鐵錫	瓦質土器	(2.1)	6.2	良好 7SYR7-6	7SYR7-6	褐色細粒多量	粘粒	粘粒	東部南N出しが多い為、面内が薄い、高台幅広		
	5	鐵錫	瓦質土器	(1.8)	6.4	良好 7SYR7-6	7SYR7-6	白色細粒	粘粒	粘粒	東部南N出しが多い 高台幅広		
	6	坪	土器器	(1.2)		良好 7SYR7-6	7SYR7-6	細砂粒多量 全面薄少 茶・金黃	ヨコナデ	ヨコナデ	東部南、茶・白色不明		
	7	不明	滑石	(3.5)		良好 7SYR7-6	7SYR7-6	白色 7SYR7-6	粘粒	粘粒	内面保護層、約4cm、深さ5mmの小孔があり、貫通している。		
	8	平皿	大皿	(3.1)		良好 7SYR7-6	7SYR7-6	白色 7SYR7-6	粘粒	粘粒	完全にナデシコ		
	9	坪	土器器	(1.3)		良好 7SYR7-6	7SYR7-6	褐色 7SYR7-6	ヨコナデ	ヨコナデ・粘粒&切	部分的に黄褐色 墓場丁寧なナデ		
	10	坪	土器器	(2.4)		良好 7SYR7-3	7SYR7-3	細砂粒多量	粘粒	粘粒	粘粒&切不明跡		

第10表 北宮館跡出土土器製品・鉄製品觀察表

探因 No.	揭紙 No.	調査区 T=トレンド	層序 Stratum	器種 Category	法量(容) / 深度 最大長 cm / 最大幅 cm / 重量 g / 厚さ cm			焼成 Firing	色調 Color	地土 Soil
					内面 Interior		外面 Exterior			
					内面 Interior	外面 Exterior	内面 Interior			
第58回	1	北宮館跡 R2 ST	IV層	土錠	6.0cm	2.1cm	17g		良好 7SYR7-3	細砂粒微量
	2	北宮館跡 R2 ST	IV層	土錠	3.8cm	1.1cm	3g		良好 7SYR6/6	細砂粒少量
	3	北宮館跡 R2 ST	IV層	土錠	4.8cm	1.2cm	5g		良好 7SYR7/8	細砂粒微量
	4	北宮館跡 R2 ST	IV層	土錠	4.7cm	1.1cm	4g		良好 7SYR6/3	細砂粒少量
	5	北宮館跡 R2 ST	V層	土錠	(4.1cm)	(1.1cm)			良好 7SYR7/1	明暗灰 7SYR6/6
	6	北宮館跡 R2 ST	V層	土錠	(3.9cm)	(1.2cm)	(5g)		良好 7SYR6/6	細砂粒微量
	7	北宮館跡 R2 ST	IV層	鐵製品	鉄釘	(2.8cm)	(0.4cm)	(2g)	(0.6cm)	
	8	北宮館跡 R2 ST	IV層	鐵製品	鉄釘	(3.4cm)	(0.7cm)	(6g)	(0.4cm)	
	9	北宮館跡 R2 ST	IV層	鐵製品	鉄釘	(4.9cm)	(1.0cm)	(8g)	(0.4cm)	
	10	北宮館跡 R2 ST	IV層	鐵製品	鉄釘	(3.6cm)	(0.9cm)	(10g)	(0.8cm)	
	11	北宮館跡 R2 ST	IV層	鐵製品	鉄釘	(3.1cm)	(0.9cm)	(4g)	(0.7cm)	
	12	北宮館跡 R2 ST	IV層	鐵製品	鉄釘	(4.9cm)	(0.9cm)	(8g)	(0.8cm)	
	13	北宮館跡 R2 ST	IV層	鐵製品	鉄釘	(4.8cm)	(0.7cm)	(10g)	(0.8cm)	
	14	北宮館跡 R2 ST	IV層	鐵製品	鉄釘	(3.6cm)	(0.8cm)	(4g)	(0.7cm)	
	15	北宮館跡 R2 ST	IV層	鐵製品	鉄釘	(3.9cm)	(0.9cm)	(4g)	(0.6cm)	
	16	北宮館跡 R2 ST	IV層	鐵製品	合釘	(8.3cm)	1.2cm	(16g)	(0.6cm)	

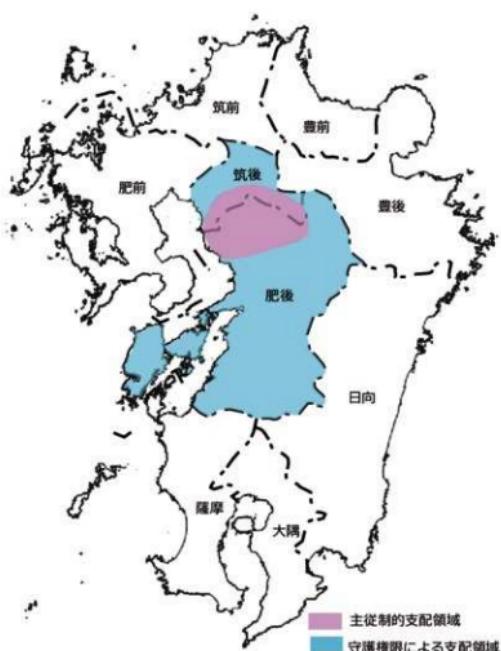
## 総括

菊池氏は土地付きの開発領主武士団として出発し、11世紀から16世紀初期まで一貫して肥後国内武士団のトップの地位を保持した存在である。東国から下向した勢力以外で、その国の守護となった者は、九州では菊池氏が唯一である。その活動の主なものをまとめると別紙の略年表（第11表）のとおりである。また、菊池氏の支配領域は室町時代に最大となる。その範囲は菊池・山鹿・玉名・山本・合志・飽田郡の肥後国北部から筑後国南部までの主従制的支配領域と上記以外の肥後国全城、筑後国北部の守護権限による支配領域とに分けることができる（第151図）。

このように稀有な存在である菊池氏の主要な遺跡は、熊本県菊池市内の深川・北宮地区と隈府地区の大きく二つに分けることができる。両地区に存在する遺跡の確認調査や発掘調査、現地踏査により、遺跡群の内容を明らかにすることができた。その調査成果と考察をまとめる。

### 【深川・北宮地区】

県内と徳島県・島根県の中世類似遺跡との比較検討から、菊之池B遺跡の1・2号石組は船着場跡、3・4号石組は河川護岸施設と考えられる。R 2 A区・R 2 C区は河道の中、R 2 F区は河原と想定した。これらの成果と国土地理院治水地形分類図を比較検討した結果、検出した遺構・調査区は菊池川旧河道に伴う13世紀後半～14世紀後半頃のものと考えられる。



第151図 室町期菊池氏支配領域

北宮館跡は確認した遺構や出土遺物の特殊性である多量な土師器、唐物威信財の存在から、壕に囲まれた南北約90m、東西約100mの方形区画をもつ13世紀前半～13世紀後半頃の領主館跡と考えられる。館跡は最上層で検出した遺構から14世紀後半頃までは機能していたと想定できる。文献上では11世紀後半頃に船を構えたと伝えられている。北宮館跡からはこの時期の遺物が出土しているので、北宮館跡の築造は11世紀後半頃の可能性がある。菊池川旧河道に伴う遺構の確認で、館跡は菊池川旧河道に接し、水運の利便性に富んだ立地であることが明確になった。菊池氏は河川関係の諸施設の運営や維持・管理を掌握し、深川・北宮地区に拠点を築き、中世都市的空間を形成したと考えられる。

北宮館跡の北東方向直線距離

で約500mの隣接地点に北宮阿蘇神社がある。北宮阿蘇神社には現在、菊池武朝（17代）が大願主である男女神像10体が奉納されている。神像に記された番号から計12体の神像の存在が想定でき、北宮阿蘇神社は阿蘇十二神を祀る菊池氏の宗教施設としての機能をもつと考えられる。

#### 【隈府地区】

隈府地区には隈府土井ノ外遺跡で確認した壕跡と平行・直交の位置関係にある方形区画の町割りが現在も残っている。この企画性のある町割りは中世まで遡ると考えられる。

守山城跡は確認調査が未実施で詳細な構造・時期が不明であるが、土壘状の高まりが残っており、文献史料に登場する城跡と考えられる。その立地は隈府中心地区の方形区画の東側隣接地の丘陵上である。

隈府城下遺跡は、確認した中世の遺構から約200m四方の区内に居住地の存在が想定できる。この遺跡の南側に接した箇所に「インノババ」の字名が残る方形地割の隈府院馬場遺跡がある。隈府院馬場遺跡は犬追物を行った犬の馬場と考えられる。犬の馬場は都市中枢部に立地している事例が多いことから、犬の馬場に隣接する隈府城下遺跡の方形区画は都市中枢部施設と考えられる。

隈府土井ノ外遺跡は約100m四方の壕に囲まれた屋敷跡である。出土陶磁器の再検討から、屋敷跡は14世紀後半～16世紀前半のもので、15世紀中葉～後半に最盛期がある。この遺跡からは列島の戦国大名と遜色のないレベルの奢侈品が出土しており、屋敷跡は「会所」的なものと考えられている。隈府土井ノ外遺跡の特殊性から、この遺跡に隣接する隈府城下遺跡の約200m四方の施設は都市中枢部施設の可能性が高くなる。

#### 【拠点移動】

深川・北宮地区と隈府地区の遺跡は立地上の違いだけでなく、その中心となる時期にも違いがある。菊池氏の拠点が14世紀後半以降に深川・北宮地区から隈府地区へ移動したと考えられる。

菊池氏の活躍した時期は形成期と確立期に分けることができる。中世前期の形成期には深川・北宮地区的北宮館跡に中心拠点を築き、周辺の河川交通要衝地を掌握了。中世中・後期の確立期では隈府地区に拠点を移し、肥後に守護として領国制を整えた。

#### 【類似遺跡との比較・検討】

県内に存在する北宮館跡・陣ノ内城跡・相良頼景館跡の構成要素の比較・検討を行った。その結果、護岸・船着場の河川施設、神社・寺などの宗教施設、堰・手井などの利水施設、陸上・水上交通の結節点が共通する要素である。これらの要素は中世武士団が領地支配を行う際に、屋敷を中心とする施設の中に役割を重視して組み込んだものと理解できる。

北宮館跡東側隣接地に「上市場」「下市場」の字名が残る箇所がある。これに類似するものが益田氏の城下町である島根県石見益田の水運利用商業地と考えられる「上巿・中巿・下巿」である。両者には立地等の共通点もあることから、菊池の「上市場」「下市場」も商業地の可能性がある。

「一遍聖経」には吉井川水運を利用した福岡の市が描かれている。菊池川旧河道沿いの河川施設が確認できた菊之池B遺跡・北宮館跡周辺にも福岡の市のような物資の集散地が存在したと考えられる。

#### 【菊池川旧河道を利用した交易】

「蒙古襲来絵詞」に描かれた菊池武房（10代）は無位無冠であるが、高位の者が着用する高級輸入品である虎の尾の尻鞘を身に着けている。菊池氏の直接支配領域である菊池川下流域の河床遺跡からは白磁底部に墨書がある貿易港を示す特殊遺物が表採されている。希少品である虎の尾を入手できたのは武房自身が日宋貿易に関与していたためと考えられる。

日宋貿易の輸出品は菊池川上流域にある阿蘇地域周辺の硫黄・木材が考えられている。菊池川では後の木材運搬が昭和初期まで行われており、木材輸出は筏運搬の利用が想定できる。

日宋貿易の交易ルートの中継地として、菊池川・有明海から東シナ海への出口周辺の天草津が考えられる。

その役割を天草の浜崎遺跡が担っていた可能性がある。

【1・2号石組の利用想定】

中世の絵巻物に描かれた船の検討を行い、準構造船・複材刳船が中世の川船に使われていたと考えた。中世川船の規模を示す史料が不足している。古代・近世の川船の規模を比較して、両者に大きな差がないので、中世の川船規模も近世とほぼ変わらないと判断した。それで、史料が充実した近世史料の検討を行い、長さ約20尺～50尺、幅約4尺～10尺の範囲の小型船が主流であると考えた。さらに、近世の川船分布図によれば、菊池川の主要船は櫓船である。<sup>櫓船</sup>櫓船の正確な実測図は最大長1225cm（約40.4尺）、最大幅215cm（約7尺）、最大高59cmである。この櫓船の平面・断面図を1・2号石組の平面・断面図に重ねた結果、この程度の規模の櫓船は着岸可能と考えた。

菊池氏の本拠地は中世前期は深川・北宮地区で、中世中・後期は隈府地区に移転すると考えられる。菊池氏は菊池川旧河道の交通要衝地で拠点となる基盤を整え、拠点移転後は肥後守護として体制を充実させた。東国から下向した勢力以外で、その国の守護となった希少な存在の菊池氏の遺跡は中世史上的貴重な存在である。その菊池氏の形成期から確立期の遺跡の様子の一端が今回の調査で明らかになった。中世武士團の中で特殊な存在である菊池氏の歴史を物語る重要な遺跡と考える。

第11表 菊池氏略年表

西暦	年号	菊池のうごき 〔内の数字は菊池氏の代を示す〕	備考	文 献 等
1070	承久2	[1]潤隆 深川に居館を構える		「春記」「菊池風土記」「肥後國誌」他
1181	治承5	[6]潤直 平家にそむき、武士団を率いて挙兵		「吾妻鏡」「源平盛衰記」「平家物語」他
1221	承久3	[7]隆定 承久の変で敗れ、所領一部没収される		「菊池武朝申状」
1274	文永11	蒙古襲来、[10]武房 博多に出陣する	文永の役：文永11（1274）年 弘安の役：弘安4（1281）年	「蒙古襲来絵詞」「菊池武房書状」
1333	元弘3	[12]武時 鎮西探題を襲撃し討死	以降、菊池は官方として活動	「博多日記」
1335	建武2	[13]武重 箱根竹下の戦い		「太平記」
1336	建武3	菊池山城、攻められる 武敏・足利軍と多々負浜で戦うが敗れる	このころから守山城はあった と思われる	「小代光信軍忠状」「詫磨貞政軍忠状」 「太平記」「梅松論」
1338	延元3	武重 「百合衆内談の事」(菊池家裏)を定める		「菊池武重起請文」
1344	興国5	[15]武光 合志幸隆から「菊池陣城(菊池本城)」を寄進		「忠良惟澄軍忠状」「同申状追書写」
1348	正平3	惟良親王 征西将軍として菊池に入る		
1353	* 8	武光 針摺原で一色氏を破る		「安富泰重軍忠状」
1359	* 14	武光 惟良親王を奉じ、大保原(筑後川)合戦で勝利		「太平記」
1365	* 20	惟良親王 大宰府に征西府を置く		「征西得軍宮令旨」他
1367	* 22	[16]武政 肥後守となる このころ、本拠が隈府地区に移転か?		「菊池風土記」「肥後國誌」他
1372	文中元	今川軍に征西府占領され、武光ら高良山へ退く	このころ武光死去	
1374	* 3	[17]武朝 高良山から隈府へ退く	武政死去	
1375	天授元	武朝 今川了俊を水鳥の戦いで破る 武朝 北宮阿蘇神社を勅請(伝承)		「菊池武朝申状」「肥後國誌」他
1381	弘和元	守山城、今川軍に攻められ落城する		「今川了俊書状」「深掘時久軍忠状」「深掘時弘軍忠状」「安富了心軍忠状」
1384	元中元	武朝 「申状」を吉野朝廷に差し出す		「菊池武朝申状」
1392	* 9	武朝 菊池へ帰還する	南北朝合一	
1403	応永10	武朝 北宮阿蘇神社に男神神像を奉納		木造男女神坐像(熊本県指定重要文化財)
1407	* 14	[18]重朝 家督を継ぐ	菊池氏が肥後守連を相伝	「菊池兼朝書状」他
1472	文明4	[21]重朝 阿蘇山上の上宮と麓の阿蘇社本堂の修造のための一園 機別鉄賦課		「相良為統書状」
1481	* 13	重朝 菊池で連歌一万句の会を催す	文教の隆興	「菊池万句」
1484	* 16	重朝 相良、名和の境目確定のため、天草の上津浦上総介に仲裁を依頼		「菊池重朝書状」
1485	* 17	重朝 矢部幕平の戦いで相良為統に敗れる	このころより、菊池の推移 えをみせる	
1501	文亀元	[22]武運 (能運) 宇土為光に叛かれ、島原にのがれる		「宇土為光書状」「菊池武運書状」他
1504	永正元	能運死去。菊池家正統絶え、[23]政隆 蔡を継ぐ		
1505	* 2	政隆 守護の座を追われ、阿蘇惟長(菊池武経)肥後守連となる	重臣。政隆を追放	「菊池氏家臣連署書状」
1511	* 8	[24]武道 武包 菊池氏を継いで肥後守連となる	菊池家系統最後の守護職	「菊池武包宛行状」他
1520	* 17	大友重治(義武) 肥後守護となる	菊池、大友氏の影響下へ	「菊池重治書状」他
1551	天文20	大友宗麟 肥後侵攻		

※ゴシック体は一次資料

図版 1



1 調査区遠景（南西から）



2 R1調査区 1号・2号石組検出状況（西から）

図版2



1 R 1 調査区 1号・2号石組検出状況（北から）



2 R 1 調査区 2号石組 2期石間土師器  
出土状況（北西から）



3 上記2の拡大（北から）

図版 3



1 R 1 調査区西壁土層（東から）



2 R 1 調査区東壁土層（西から）



3 R 1 調査区南壁土層（北から）



4 R 1 調査区北壁土層（南から）

図版 4



1 R 1 調査区 1号石組 3期（西から）



2 R 2 A区北西壁（南東から）



3 R 2 B区 3号石組検出状況（南から）



4 R 2 B区  
3号石組検出  
状況  
(北東から)

図版 5



R 2 B 区 3 号石組東側深掘後の状況（デジタル合成）

図版6



1 R 2 B 区 3号石組深掘後の状況  
(南西から)



3 R 2 B 区 3号石組石間の土師器  
小片出土の状況 (東から)

2 R 2 B 区 3号石組深掘後の状況  
(北東から)

図版 7



1 R 2 B 区 3 号石組深掘後の東壁状況（西から）



2 R 2 C 区掘り下げ後の状況（南から）



3 R 2 C 区掘り下げ後の底面状況（南から）

図版 8



1 R 2 D・E・F 区遠景  
(南から)



2 R 2 D区4号石組検出状況 (南から)



3 R 2 D区4号  
石組検出状況  
(西から)

図版9



1 R 2 E 区 5号石組検出状況  
(西から)



2 R 2 E 区 5号石組と北壁土層 (南西から)

図版 10



1 R 2 F 区河原石検出状況（西から）



2 R 2 F 区深掘後の東壁（西から）



3 北宮館跡 5 トレンチ遺構検出状況（南から）

図版 11



1 北宮館跡 5 トレンチ 4 号土坑検出状況  
(東から)



2 北宮館跡 5 トレンチ 5 号土坑検出状況 (西から)



3 北宮館跡 5 トレンチ 1 号石列跡検出状況 (東から)

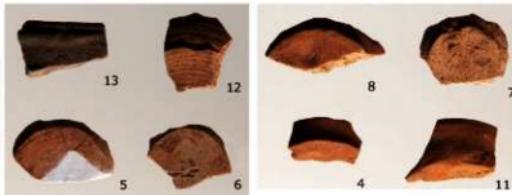


4 北宮館跡 5 トレンチ北壁 (南から)

図版 12



第10図



第13図

第13図



第12図



第12図



第12図

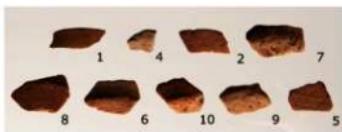


第12図



第12図

菊之池B遺跡 R 1 調査区出土遺物



第27図 R 2 B区



第27図 R 2 C区



第27図 R 2 E区



第27図 R 2 F区

菊之池B遺跡 R 2 B・C・E・F区出土遺物

図版 13



第50図  
北宮館跡 4 トレンチ出土土器



第54図



第55図

北宮館跡 5 トレンチ 5号土坑出土土師器



第54図  
北宮館跡 5 トレンチ石列跡出土土師器



北宮館跡 5 トレンチ 4号土坑出土土師器 第55図



北宮館跡 5 トレンチ 4号土坑出土土師器（縮尺任意）

# 報告書抄録

ふりがな	きくらし いせき
書名	菊池氏遺跡
調査名	中世菊池一族関連道路群確認調査総括報告書
シリーズ名	菊池市文化財調査報告
シリーズ番号	第13集
編著者名	河南 亨 宋武希代子 西坂知絵 西住欣一郎 北原美和子
編集機関	菊池市教育委員会
所在地	〒861-1392 熊本県菊池市原府888番地 Tel0968-25-7232
発行年月日	2023年3月31日

所収道路	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村 道跡番号					
北宮館跡	熊本県菊池市北宮206地	菊池083	32度58分12秒	130度48分25秒	2012.3.15	71m <sup>2</sup>	道跡範囲確認
			32度58分12秒	130度48分25秒	2012.3.27		
			32度58分12秒	130度48分25秒	2020.11.9	25m <sup>2</sup>	道跡内容確認
			~		2020.12.10		
守山城跡及び内裏庵	熊本県菊池市原府城山1257	菊池054	32度59分17秒	130度48分59秒	2015.9.09 ~ 2015.9.30	960m <sup>2</sup>	道跡範囲確認
			32度59分17秒	130度48分59秒	~		
原府城下道跡	熊本県菊池市原府城下1272-2	菊池175	32度59分10秒	130度48分49秒	2019.4.11 ~ 2019.4.19	49.5m <sup>2</sup>	市民広場再整備地
			32度59分10秒	130度48分13秒	2020.7.29 ~ 2020.10.20	70m <sup>2</sup>	道跡内容確認
菊之池B道跡	熊本県菊池市原府深川63-1地	菊池187	32度58分1秒	130度48分13秒			

所収道路	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北宮館跡	館	弥生～中世	掘立柱建物跡 石列路 土坑 ピット	土師器 頑石器 青磁 白磁 陶質系縄鉢 瓦器 風炉	船跡と考えられる。
守山城跡及び内裏庵	城	中世	土器路		中世の土壘かどうかは不明。
原府城下道跡	包蔵地 館跡	中世	溝路 ピット 井戸跡	土師器 頑石器	船の船跡検出か？
菊之池B道跡	包蔵地	中世～近世	石組遺構	土師器 青磁 白磁 陶質系 磁鉢 瓦器	旧河川の船着場、河川護岸と考えられる。

要約	菊池氏は地付きの開発領主(大宰府官)武士団から出発し、11世紀～16世紀初期まで一貫して一国内武士団のトップの座を維持した極有な存在である。東国から下向した勢力以外で、その国の守護となつた者は、九州では菊池氏が唯一の存在である。菊池氏遺跡の分布は菊池市の深川、北宮地区と原府地区の大きく二つに分けることができる。
	深川、北宮地区の主な遺跡が菊之池B道跡、北宮館跡、北宮阿蘇神社である。北宮館跡は鎌倉期から南北朝期に菊池氏が大きな規模で軍事行動を展開した時に使用された本拠地の館跡の可能性が高い。菊之池B道跡で確認された石組は菊池城旧河川の護岸施設等と考えられ、本拠地の経済活動を支える水上交通の管理施設と想定できる。北宮阿蘇神社は本拠地に付随する宗教施設で、菊池氏の一國祭祀権を行使するために、氏神三明神と肥後一宮を一括管理を行っていたと考えられる。北宮館跡と北宮阿蘇神社の間には「上市場」、「下市場」の字名が残っており、都市的な場として存在した可能性がある。

原府地区には14世紀に征西府・南朝守護所が置かれ、15世紀に室町期守護所へと発展した。守護所のある中核部施設が存在する場所として、原府土井ノ外道跡、原府城下道跡が挙げられる。これらの道跡の東側に守山城跡がある。原府土井ノ外道跡は堀路で約100m四方に区画されており、多量の土師器と輸入陶磁器の奢侈品が出土している。この施設は客人との対応に使用された会所的なものと考えられる。原府城下道跡は約200mに区画された中心的な施設の可能性がある。

深川、北宮地区に発生、展開された成立期の拠点が発展期には原府に移動したと考えられる。

菊池市文化財調査報告第13集

## 菊池氏遺跡

中世菊池一族関連遺跡群確認調査総括報告書

発行年月日 令和5年3月31日

編集・発行 菊池市教育委員会

〒861-1392 熊本県菊池市隈府888番地

印 刷 株式会社トライ

〒861-0105 熊本県熊本市北区植木町味取373-1